

編者より

若い頃から、ケシリム・ボズターエフはイルティシ川の沿岸に広がる大地での初期の核実験に対して危険で不吉な力を感じていた。実際、核実験に関する苦い思い出もある。自著「セミパラチンスク核実験場」で、ボズターエフは、自分の学生時代の年～1953年8月～に、「疫病神の住まい」(訳注：核実験場について比喩的に言及)に隣接しているアバイ郡とアブラリ郡の住民に移住措置があったことを回想している。「強制避難」- この苦い言葉は、彼の胸を切り裂いた…。年を経るとともに、振動に震えるステップ、爆発の悲鳴とそれに関連した人々の悲劇に慣らされてしまい、現地住民は強制避難を定期的にやってくる、何の対策も取りようのない災厄と受け止めるようになっていた。

当初より、そして以後の全人生においても、運命はケシリム・ボズターエフを甘やかさず、彼のために茨の道を用意した。なぜならいつもケシリムは何よりも先ず内なる良心の声を聞いていたからである。30年以上の年月が過ぎた後、ソ連政府のエリート「内輪」仲間に入り、ソ連共産党セミパラチンスク州委員会第一書記の地位に昇りつめたボズターエフは、普通の羊飼いや労働者の利益を、党と軍産共同体の利益の上に置いた。自身の立身出世も考えず、核実験反対の声を挙げた最初の一人となった。

1989年2月20日付、「極秘」の書付のある書記長ミハイル・ゴルバチョフ宛の彼の秘密電報が、核実験中止を要求するソ連における最初の公文書である。これは勇気ある人間の行為であり、当時の指導者の誰もができたわけではない。この暗号電報がソ連および全世界における新しい軍縮時代の幕を開ける転換点となった。

「対立」- 当時のペロウソフ軍事産業委員長と私の困難な人間関係を彼はこう呼んだ。「...我々の相互の不快感は最終的には公然たる対立に至った。」

対立の複雑な変遷において、ナザルバーエフ大統領の確固として一貫した姿勢は不朽の意義をもっていた。彼は軍事産業委員会の高官にこう表明した。「セミパラチンスク地域での40年に及ぶ核実験中に起こったことは、全て、非人道的であり、非人間的だ。セミパラチンスクに来て、住民と会い、自ら確かめられよ」。この言葉は、すでに始まっていた地域住民の反対運動に大きな力を与え、軍事産業委員会はその姿勢の急転を余儀なくされた。

1991年8月29日、カザフ共和国大統領ナザルバーエフの命令により、セミパ

ラチンスク核実験場は閉鎖された。現代の最も恐ろしく破壊力のある兵器の実験が行われていたセミパラチンスク核実験場は、その歴史的使命を終えた。

1996年、核実験全面禁止条約（CTBT）が、5つの核大国により署名された。

この我々共通の（国境、国籍、年齢を問わず降りかかる）災厄について、長年にわたって率直で開かれた科学的・道徳的な対話が国際社会で持たれていたという事実は、この社会が歴史的成熟度、さらには人間的な成熟度の高みに到達しつつあることを確信させるに足る。ただし、人間的な成熟度については、それはこれから我々の手で完成させねばならないが。

K．ボズターエフのような人々は、我々に「将来はある」と言う権利を与えてくれた。同時に彼は、我々が自分と自分の子供たちのために創造したい将来を、我々自身の手で作りださねばならないのであると認識すべきだ、と言い遣している。

K．ボズターエフは書いている：「時の歩みは巻き戻せない。そして人間の気質として、日常生活の中に埋もれがちになり、昨日の喜びや悲しみは認識から排除されていく。それらは日々の現実の前に精彩を失い、日々の生活を歩んできた高みに立つと、もう大きな意味を持たないように見えるものだ。」

これは、核実験場にもあてはまる。近くで爆発が響き、恐ろしい反響がセミパラチンスク地域の住民の心の中に響いていたのは、つい最近のことなのに。

平和に人々が暮らす地域と住民のすぐ横の核実験場の存在そのものが、崇高なものと悲劇的なもの、運命的なものや日常的なものとの矛盾をはらんでいた。これら永遠に人間につきまとう要素は、一時代では人類の知性に浸透しきらない類のテーマであり続ける。

しかし時が経過しても本書の著者自身は、悲劇、自分の責任、人々と自分の大地に対して心を痛めることを忘れなかった。この責任をもって全ての人々に代わって記憶するという能力は、偉大なる心と強い知性のあらわれである。「時間には一つのまやかし作用がある。それは出来事の大きさと脅威を日常性とあくせくした生活の後ろに隠してしまうことである。もちろん、何十年も経つと砂は日常の時の流れにより洗い清められ、結晶化した品種のみが残される。」

我々の責務と、我々の神聖な人間としての義務は、記憶を保ち続け、この古い大地で昔起きた核の悪夢を繰り返さないようにすることだ。今日に至るまで、セミパラチンスクでは、事実上全ての事業所と文化センターが稼働し、アパートがそびえている。

それらは、ケシリム・ボズターエフが党セミパラチンスク州委員会第一書記のポストにあったときに建てられたものだ。核実験場が閉鎖されるずっと前から、ケシリム・ボズターエフは、核実験により苦しむ住民の社会保障の問題を取り上げていた。セミパラチンスクの被災民治療のため、24の医療機関が新設され、そのうち5つは診断センターで、それは今でも稼働している。

ケシリム・ボズターエフは常に記憶していた。彼が生まれた母なる大地とのつながりのおかげで、彼はあらゆる生死に関わる悲運を堪え忍べたと：「どこか精神の深いところで、私はいつも自分のささやかな祖国、アヤグズに近いアクチャタウのステップにあるアウル（小村）に居た。人生で困難なとき、精神的に、かつて私の先生だったアウルの賢人と対面していた。『こういう場合、彼らならどういう助言をしてくれるだろうか、どういう的確で明確な言葉で、慰めたり叱ったりしてくれるだろうか』と。」

この人のもう一つの明確な特徴は、本書中に非常に明確に現れているが、驚くほどの謙虚さである。彼は思考の中でさえ、自分たちの民族の歴史や運命と自分自身を切り離していない。「人々はこの運動の歴史を知らねばならない。人々は、この長い40年間に地域に何がもたらされたのか、知らなければならない。私は完全に知り尽くしているとは言わない。しかし、黙ることはできないことは知っている。」

「セミパラチンスク核実験場」という本にエピローグはない。その継続が、人生そのものとなった。この著書は世界でその行進を続けている…。日本では、「セミパラチンスク核実験場」は1998年に翻訳され刊行された。ドキュメンタリー報告「セミパラチンスク核実験場」は、ドイツでも翻訳され人気雑誌「シュピーゲル」に掲載された。それは多くの諸国で読まれている。本は、広範な読者を、カザフスタン、ロシア他の旧ソ連共和国で獲得し、共通の過去を思い出させた。更に、ケシリム・ボズターエフの人生について、彼の所にドイツ、日本、ロシア、そして遠いオーストラリアなど様々な諸国の読者から反響が届いている。

ケシリム・ボズターエフは、永遠に民族の記憶に残るだろう。セミパラチンスク核実験場の閉鎖に大きな貢献をした、活動的な闘士の一人として。

読者への言葉

我々は、単なる羊飼いの人生を断ち切ったことにより、偉大なる天才、発見、革新といったものへと将来的に導いてくれる糸を引きちぎったのかもしれない。人類の歴史は、人民の中から偉大なる知性が輩出された例を少なからず目撃してきている。ひとつひとつの人生に真の価値を与えるべきだ。夢想家たちは、偶然つぶされた蝶ですら、我々の将来に意味のある変化を引き起こすと言っている。これには深い哲学的意味がある。人生に、安いも高いもあり得ない。それぞれの人生は、文明にとって計り知れない価値があるのだ。

しかし人間は、自分にどんな病気が進展しているか知らない間は落ち着いているが、知ると心配する。これに類することが、セミパラチンスク地域の住民に発生した。セミパラチンスクのすぐ近くの核実験場が潜在的に危険な隣人だと知らない間、彼らは気にしなかった。人々は、好奇の気持ちでゆっくり上昇していく巨大なキノコ雲、空に現れた第二の明るい太陽を、世界の新しい奇跡として観察した。毎月何回もある、彼らの住む大地のズシン・ズシンという振動も、慣れ親しんだ自然現象となった。

そうしている間、この訳の分からない隣人は、数千のステップ住民の命を奪っていた。彼らは、ひょっとしたら無意識的にもこの悲劇を核実験場に結びつけていたかも知れない。なぜならその秘密は誰にも推測さえ不可能であったからだ。

この関連性が明白になったとき、人間は心配した。しかし、平穏な8月の空にゆっくりと、しかし下界の人々を脅かすようにキノコ雲が上り始めてから、40年が過ぎていた。

この文章が書かれている現在においては、40年以上にわたり管理されることなく独占的に動き回った現代の怪物は沈黙した。しかし、我々には計り知れない心労の種が残された。完全な勝利のために、地域は傷を癒し、力を回復すべきだ。勿論、核実験場は急に黙ったのではない。ここに至る道は、茨が多く、予測できず、そして例外的に困難だった。私の人生と運命がこんなにも密接に核実験場の運命と絡みあうこととなろうとは、また、私の双肩に緊迫した戦い - 一般的には「核のない世界実現のための戦い」、「人類の生き残りをかけた戦い」などと呼ばれる戦い - の始まりと終わりが降りかかることになろうとは、以前は考えてみたこともなかった。

人々は、この運動の歴史を知らねばならない。人々は、これらの長い40年が地域に何をもたらしたのか知らねばならない。私は、全てを完全に知っていると言っている

つもりはない。しかし、私は黙っていることは出来ないことを理解したのだ。私には個人的な思いを分かち合う義務がある。偉大なるアバイ・クナンバーエフやムフタル・アウエーゾフを産んだ現代のステップの最も劇的な数頁を、時の速いながれにまかせて忘却の草で覆わせてはならない。

私の物語が、読者にとって地域の苦難に満ちた歴史を正しく理解する助けになれば、目的は達成されたと見なせるだろう。

もう一つ付け加えたい。ここ数ヶ月そして数日の出来事は、猛烈な奔流を思い起こさせる。ほんの昨日忘れられないように見えたことが、今日は必要ないように思われる。ひょっとしたら、この本を読んだ人に、狂気じみた考えが生まれるかも知れない：著者はある出来事を美化し、他の出来事の怖さを誇張することで、読者を横道にそらしてしまっているのではないか、という。

決してそうではない。この本は、事実の、事実のみの、客観的反映である。たとえ、私が感情で一杯になり極論に動かされそうになったことはあっても。

過ぎ去ったことはすべて歴史の所有物となり、時はその事実の明白さの前には無力である。

この厳密に事実に忠実な物語は、多くの支援者のおかげで日の目を見ることができた。

次の方々に、心よりお礼を申し上げる：州の新聞「イルティシ」の副編集長エリビラ・キム、当時の放射線医療センター、現国立放射線医療・環境研究所所長ボリス・グーセフ、、州保健部長ボロト・スリャムベーコフ、核実験場専門家ボリス・ソローキン、ユーリー・チェレプーニン、州人民代議員評議会執行局長ラサイラウハン・イムベーコフ、そして私が支援と助言を頂いた全ての人々に。

過去を振り返る

有名な中国の格言がある：「千里の道も一歩から始まる...」。私にとってこの最初の一歩が何によって始まったのか、という質問にはっきりは答えられない。おそらく、小学校一年生になった日からか、または、中等教育修了証書を貰った日か、または、冶金学の学位を得た時か...。いずれにせよ、私にとってこの一歩は私の生まれた場所にそもそも由来していると思える。私が思うに、人間はかけがえのない時間だった子供時代と青年時代に、記憶の中で回帰したがる性質をもっている。多くの面で、人間の運命は人生の早い段階でどんな源泉から栄養を得ていたかによって決まる。

私は幸運だった。私は広漠としたステップのまさにど真ん中に生まれた。その大地は、人生の難儀に対し我慢強く、勤勉な人々を何世代にも渡って育ててくれた。

私は農家の出で、父ボズタイはコルホーズ[集団農場]の鍛冶工の収入で大家族を養っていた。母バルヒアもコルホーズで働いていたが、子育てと家事が彼女の主な仕事だった。彼女は八人の子供を産み、五人の息子たちを世に送り出した。私の小さな故郷、セミパラチンスク州アヤグズ郡のアクチャタウ・アウル村、もしくは集落は、私の子供時代にはどんなところだったのかというと...。周囲の全てのものと同様に、果てしなきステップにちりばめられた暗く見栄えのしない黒点のようなところ。藁を混ぜた粘土の家、納屋、整備とは無縁の環境...そういうものが「豊富」な、ステップの畜産民の生活。そんなところであった。コルホーズ員の生活は厳しかった。当時、給料は支払われず、年末に労働日数に対し現物支給が行われた。もしその年の収穫が少なかったら、労働日数は帳消しになった。全ての家族と同様に、我々の家族も貧困から抜け出せなかった。鍛冶工は、どこにでもいるものではなく十分に尊敬されていたにもかかわらず、である。しかし、こうしたステップの生活では、誰も同じように貧しいのが当たり前になってしまっていた。

私は、小学校をアウルで終え、その後、郡の中心的な町であるアヤグズの学校に行った。学校の夏休みには、アウルのみんなと同じように、干し草を刈り、収穫の手伝いをした。

1951年末、私は高校を卒業した。ジャーナリストになりたくて、カザフスタン国立大学入学を考えた。しかし、最後の瞬間に、カザフスタン鉱山冶金大学に願書を出すと決め、入学試験の案内を受け取った。その決定に、最大ではないがある程度の影響を与えたのは、冶金技師という職業がエリートとみなされていたことであろうし、

更に正直に言えば、この大学の奨学金は当時としては高額だったのだ。(訳注：旧ソ連邦ではすべての大学生に奨学金が支給されていた)

入学試験前の時期のある朝早くアヤグズから実家へ向けて出発した。雄牛はのろのろと重たい足をひきずり、おんぼろの牛車を引いて山へ向かいステップを横切っていた。その牛車の荷台のかぐわしい干草のベッドに横たわり、空の透き通った青を、果てしないステップの海原を、見慣れた山々の気まぐれな輪郭を、飽きることなく見続けていた。胸が締め付けられるような光景だった。小中高と学校に通っていた年月が過ぎ去り暢気でいられた子供時代が過去のものとなったこの時、ようやく私を取り囲んでいたすべてのものを新たな認識で眺めることができていた。生まれ故郷のアウルへの長い道中、将来についての考えが私の頭を離れることはなかった。これから何が待ちうけているのか？若さの本質である容赦のなさで、私は生まれ故郷にさよならするつもりだった。将来についての夢は私を経験したことのない人生の道にいざなった。しかし、すべては両親の決定に懸かっていた。

家に着いたのは夕方遅くだった。私を待っていてくれた家族は私の到着を喜んだ。

^{かまど}竈がパオを暖め、母が釜の周りをせわしなく動き、控えめな食事を準備していた。

夕食と長い団らんの後、長旅に疲れ、さまざまな思いに浸りながら、私はようやく寢床についた。重くのしかかる眠気の中で静かな会話の声が聞こえた。くすぶるかまどの横に座り相談する両親の声だった。私の今後の進路についての話だった。

「息子はもっと勉強したいのよ」と母がいった。

父は、自信のない声で言った：

「勉強のために送る金がない。来年まで待とう、もう少し貯めれるかもしれない」

母は、反論した：

「運を試させてあげましょうよ」

父は同意した：

「多分おまえが正しいのだろうね」

母のありがたい言葉が、私の将来を決めた。

私の家族にとって、私が卒業証書を受け取ったことは、お祝い事であった。しかしその喜びにも厳しい生活の現実によって陰りがでた。私の家族は貧しく、アルマティ(当時の名称はアルマ=アタ)までの切符代すらなかったのだ。だが父は、自尊心を捨て、夏期放牧地の知り合いの羊飼いの所に行き借金の代わりに羊を借りた。それを

アヤグズで売り、得た金を私に渡してくれたのだった。

7月31日、私は鉄道で首都に着き、翌日にはカザフ鉱山冶金大学の入学試験を受けた。冶金学部の倍率は高く、競争率は6倍だった。しかし、私は選ばれた幸運な一人となれた。

隠さず言えば、私には非常に困難だった。アヤグズのカザフ語教育の鉄道第八高校（訳者より：小中高一貫教育の中高の部を指しているのですが、日本人にわかりやすいように高校としたいと思います）を卒業したが、大学入試はロシア語で行われた。しかし、試験科目が、数学、物理、化学といった科学的学問分野だったことに救われた。それらの科目については私は特に問題はなく、これには先生方に感謝している。

高校は州でも厳しい中の一つで、良き伝統を積み重ねており、卒業生の大半は大学に入学し、その内、後に有名な専門家や学者になる者も多くいた。先生方に感謝の言葉を述べずにはいられない：ジョルディバーエフ校長、数学のジュマグーロフ先生、物理のハリドゥーリン先生、化学のセイフーリナ先生、ロシア語と文学の先生のディーディン先生、地理のドシムベーク先生に。献身的に職責を果たす教師に出会える運命にあった人間は幸せ者である。

どうやっても心の中から消し去ることの出来ない学生時代が始まった。戦後は、我が国の歴史の中でよい時代ではなかった：国民経済基盤の再建が進められており、生活の困難さは学生には特に厳しく感じられた。しかし、我々は若く、エネルギーと希望と向上心に溢れていた。我々は、なぜゆえに学び、生き、険しい限界に挑戦するのか、明確に知っていた。多くの学生たちと同じように、私は奨学金だけで生活していた。両親の支援は当てに出来なかった。彼ら自身がぎりぎりの生活をしていただけから。しかし、寮で生活しながらも、貧乏そうに見えないようにさまざまな工夫を凝らしていた。また冶金工場での生産実習でいくばくかのお金を稼いだ後、休暇で帰省する時には、ささやかではあるが首都からの土産にふさわしいものを家族に持ち帰ることもできた。そもそも私の同級生の多くがそういう生活をしていたので、私たちは自分たちの境遇を不幸とはみなさなかった。私のささやかな伝記は、私の世代の伝記でもある。

記憶にはっきりと刻印されたのは、1953年8月だ。私は、カザフスタン鉱山冶金大学の三年生で、休暇で生まれ故郷のアクチャタウに帰省した。

アクチャタウは、アバイ郡とアブラリ郡と隣接している。しかし「境」という概念

は、ここでは純粹に象徴的なものでしかない。首飾りのような山々に粹取られた果てしなきステップには、冬になると一面に白い雪の覆いがかかり、それを脱ぎ去る春になると、太陽の光に照らされたエメラルドのような緑で溢れかえるのだ。

異様な光景が私の目を捉えた：村のうらぶれた街道を、馬と雄牛が最小限の家財道具を積んだ荷車を引いていた。荷車には、老人、子供、病人たちも乗っており、大勢の男女がその後を歩いていた。

これは、アブラリ郡とアバイ郡にある二つの村の住民だった。大地における生活の永遠のシンボルであるかまどの火を消し、一時的に自宅を捨ててきた人々であった。生まれ故郷からの旅路についてはいたが、自分たちの移住の理由をはっきりとは知らなかった。彼らが聞いた噂では、どこか近くで爆弾を爆発させるということだった。彼らの前途に待ち受けるものは何か？先祖の大地にはいつ戻れるのか？これらの質問に対し、具体的な答えはなかった。

「強制避難」。人生初めてこの苦い言葉が胸を切り裂いた - 平和時に天災でもないのに…。山やステップの震えや爆発、それに結びついた人々の悲劇が日常的なものになり、強制避難は住民に定期的にふりかかる抵抗するすべのない災厄として認識されるようになったのは、何年も後のことであった。

アブラリ郡の住民たちには、彼らの郡が1～2年後には消滅し、ほとんどの住民が先祖の土地を永久に捨てることになるとうちは、未だ思いもよらなかった。

私もまた、これが長く劇的な40年間の大きな人類的悲劇の始まりだったとは思っても及ばなかった。多くの年月を経た後に、その悲劇の終焉に積極的に関与する一人になるとは、また、その関与が重い天命となって私の心にのしかかることになるとは、知る由もなかった。

忘れえぬ学生時代の年月は過ぎ去っていた。毎年数千の若者が専門知識を得て大学を出て社会を作り上げるしくみの中に自分の場所を見いだす。ありきたりの出来事に過ぎないと思えても仕方がない。しかし、大学の卒業証書をもらったときが、各人の運命の始まりなのではないか。自分の運命はどう積み重なり、どのような明日が訪れるのだろうか？人生という道のりの始まりに立ったとき、その道がどこに続く道かを知るものはない。それがどこに続くかを決めるのは、さまざまな環境次第でもあるが、自分次第の部分も多くある。勤労への敷居をまたごうとしていた私が確信していたことは一つであった。今や私は非鉄、稀金属、貴金属の冶金技術者であり、生産現場で

頼られる技術者になるという目的としか将来を結びつけて考えることはできなかった。

卒業後、私は7月の熱気の下でそよとも動かないステップを抜け故郷のアクチャタウへと続く道中にいた。故郷では、両親、友人と村民が私を待っていてくれた。

生れた家から遠く離れ、様々な顔を持つ首都アルマ・アタの喧噪の中で快活な学生仲間たちに囲まれていた私にとって、なぜかステップの広がり光彩は褪せてしまっていた。しかし故郷に来てようやく思い出すのだ、我々の地方はなんと美しいのかと。特に、草原の花々が絢爛と咲き乱れる夏は。なだらかな丘が緩やかに続くステップは、独自の悠久の法則の下に生きていた。放牧地では羊飼いが羊の大群を引き連れ、うっすらと緑の際限なく続くステップはモノトーンに見えるが、点在するパオと馬の群れがアクセントとなっている。極まれに道を小川のにぎやかなせせらぎが横切る。なにも陰りになるものがないいつもの生活が然るべき流れで流れていた。そしてこの静穏な流れと平行し、生命の恒久性と唯一無二という二つの性質についての思索が次から次へと流れてきていた。大地、空、大気のように永遠なものは我々のルーツであり、唯一無二なものは各人の生誕である、という思いが私をとらえていた。

技術者としての学位を持ってアクチャタウに戻った日の記憶は生涯持ち続けている。祝福してくれる村人たちのあたたかい微笑み。家の敷居をまたがないうちに、客が押し寄せていた。その私にとっての忘れられぬ日、多くのあたたかい言葉と激励をいただいた。それらはみな、純粹に真心から出ていたありがたい言葉だった。

喜んでくれたのは両親と近親者だけではなく、多くの同郷者、おそらく、アウル全体であった。私の卒業祝賀会は二日続いた。アウルの長老たちは、「このアウル出身で大学卒業まで勉強し通した者は今まで 2-3 人しかおらず、ケシリムはそのうちの一人である」と特別に強調してくれた。

戦後の数年は、困難な時代だった。家に残った者、私を含め子供たちに、遊牧や家畜の世話などの作業という重い負担がかかった。他に誰も居なかったのだ。戦後の数年間、我々のアウルから大学や専門学校に入れたのはほんの数人であり、しかもその全員が卒業できた訳ではなかった。私は、難題を克服できた中の一人だったのだ。どれだけ長老たちが私を誇りに思ってくれたかがおわかりいただけるだろう。彼らの心からの激励を聞き、如何に多くのアウル村民の期待が私にかけられているのかを身体中の細胞で感じた。そして、これからはありがたい激励に応えるために全力を尽くさなければならないことを理解した。その後の私の人生は、如何なる困難に直面しよう

とも、いつもこの記念すべき日に肝に銘じた責任感によって支えられていた。

技術者としての最初の配属先はウスチ・カメノゴルスク市の鉛・亜鉛コンビナートであった。人事部により鉛工場の精製班の主任の任命を受けた。班長は私を、おとなしい表現で言えば、歓迎しなかった。

- 「ボズターエフ、君のためには主任という肩書は用意していないよ」と、ぶっきらぼうに言った。
- 「ではなにをさせてもらえるのでしょうか？」、私は遠慮がちに尋ねた。
- 「ヒラの溶鋳工から始めるんだな。」

同意せざるを得なかった。班長は、どうも私の性格を試そうとしたようだった。原始的技術しかなく有毒ガスが充満する工場で、溶鋳工として3年間を耐えた。鉛工場は3年前に操業したばかりで本格的運用への準備期間であった。普通、2～3ヶ月以上耐えられる空間ではなかった。鉛中毒は、その頃はありきたりの現象だった。

しかし、ここで働くことを希望する人々は少なくなかった。高給が魅力的だったのだ。私はこの非常に困難な工場で溶鋳工として、後に上級溶鋳工として、3年間勤めることとなってしまったが、それでもなんとか辛抱しぬいた。当時もその後も、血中にも体内にも鉛は検出されなかった。貧苦の子供時代に鍛えられた健康と広大なステップの新鮮な空気のおかげだと思っているが、勿論、若く身体が頑強だったこともあった。

ウスチ・カメノゴルスクの鉛・亜鉛コンビナートでの仕事が如何に困難であろうと、私には自分が冶金生産現場での専門職に従事していることが誇りだった。生活上の様々な問題でも助け合える職場の同僚たちの間での団結、そして常に一時も気を許せないリスクが、当たり前の日常になっていた。燃焼炉の口が破れ灼熱の熔融金属や灼熱のガスがいつ何どき放出されるかもしれない危険といつも隣合わせで、それが起きれば災害は免れない。「熱い」現場においては、安全規則の厳格な遵守が要求されるのには当然それなりの理由があるのだ。にもかかわらず、現場でのケガや火傷は頻繁に起こっていた。

この災難は私をも避けて通らなかった。ある日、いつもと同じように、ドロス（不純物を含む状態）から亜鉛を精製する試験用真空炉を開いた。灼熱の亜鉛の微粉に空気が触れた瞬間爆発が起きた。私は爆圧で飛ばされた。命は取り留めたが、顔に火傷を負い、まつ毛が焦げ、数日後には顔の皮がはがれた。助かったのは、安全規則に従

い、炉を開く前に不燃布製の作業着 - ズボン、短上衣、帽子、手袋 - を着て、更に顔を作業マスクで覆っていたからだ。

結果的には、軽い驚きですんだとも言えよう。作業員や技術者たちは、冶金現場で培った経験で私をなぐさめてくれた：「戦火の洗礼だよ、これでお前も本当に俺たちの仲間だな」と。

冶金工場で仕事をしている者はみな知っているが、液体の鉛と亜鉛は炉から銀色の小川となって流れ出し、インゴット(鑄塊)となる。絶え間なく、何日も、何ヶ月も、何年も流れ出す。これがわが国の富だ。

この見とれるような光景を前に伝えようのない感動にとらわれながら、我々の祖国がどれだけの無尽蔵の富を有しているのかに、よく思いをはせたものだ。なぜこれだけの富を有していながら、国民生活をまっとうな水準に引き上げられず貧困な暮らしをしているのだろうか？自分たちの富を合理的に活用する能力がなかったのだ、という理解に達したのは、かなり後のことである。

コンビナートは、数十の非鉄金属及び貴金属、稀金属希土類を生産し、それらを世界各国に供給していた。それらを生産する技術は複雑なものだ。しかし仕事は大いに面白かった。私は、新たな技術の開発に打ち込んだ。多くの自分のアイデアの実用化に成功し、それらには大きな経済的及び生産性効率面での効果を上げた。

私に、工場内で技術改善会を指導するよう提案があった。同志が現れ、時間を忘れて仕事に打ち込み、少なからず生産性を改善できた。この業績に対し私には名誉ある称号「カザフスタン社会主義共和国合理化功労者」が与えられた。

工場で働きながら、階級を順次上がっていった。ヒラの溶鉱工から技師へ、そして工場長へと。専門性の高い職務に心底没頭してしまい、この仕事を完全に離れることなど思いの端にもものぼらなかった。しかし、我々は自分の将来を好きなように推測するが、運命はそれとは関係なく人々の人生を定めていく。巷で言われている通りだ。ソ連共産党に入党すると、すぐに工場の党組織の書記に選任された。上級溶鉱工としての職責に関しては、私は工場長の管理下にいたが、党組織の中では工場長から独立していた。ここに矛盾は感じなかった。良心に基づいて働き、業務に自分の持ち得る知識・力を注ぎ、工場長の全ての命令を遂行した。これが工場内の秩序だった。同時に、ある特別の責任感、工場の集団生活に対する個人的責任感が、私を支配していた。隠さず言えば、工場を個人所有物のようにみなすことに慣れていた班長とはしばしば

対立していたのだ。

1967年12月、鉛工場での11年間にわたる継続勤務の後、私は市の党委員会（市役所にあたる）第一書記コイチュバーエフに呼び出された。彼は権威も経験もある労働者であり、鉱山技師であり、製造現場をよく知る人間であった。彼は、私の家族、私の意見や人生観について多くの質問をした。面談の最後になって漸くこう言った：

- 「君を党の鉛・亜鉛コンビナート委員会書記に推薦したい」

そしてきっぱりと付け加えた：

- 「受けねばならない。我々の援助と支援を期待していいから ...」

彼の声には、好意的なトーンを感じた。

党委員会書記の職務は私にとって容易ならざるものではないことは理解できた。それに、工場では毎月750 - 800ルーブル稼いでいたのに、党委員会書記の給料は... 180ルーブルだけだった。それに私には三人の子供がいた。しかし、この生活の上で重要な問題について当時の私はなぜかそれほど心配しなかった。おそらく、我々の世代はそのように育てられていたのだろう。私は同意した。

コンビナート全体の党会議で私は党委員会書記に選任された。私は頭の先まで仕事漬けになり、しばしば夜遅くまで働いた。常に市民に対する義務感を持って生きた。市民にとって、党委員会は自らの問題や考えや質問をいただきその回答を求める場所だった。

レーニン記念ウスチ・カメノゴルスク鉛・亜鉛コンビナートは、当時高度な経済的及び生産性の指標を達成しており、その製品は世界標準レベルに達していた。おかげで地域の社会的問題も多く解決されていた。

コンビナートはレーニン勲章を授与され、後には十月革命勲章も授与された。ソ連邦の非鉄金属業の旗頭となった。やがて我々の所に、国内の様々な地域から同業者が研修のために訪れるようになった。

コンビナートで働いた年月は、人生という茂みに確固とした足取りで入るための足場となった。それは私の経験を業務上でも日常生活の面でも豊かにし、起きた事を入念に分析すること、それらを客観的に評価することの大切さを教え、創造的な仕事の味というものを教えてくれた。

私は、レーニン記念コンビナートの素晴らしい同僚たちに多くの面で感謝している。

けっして楽ではないが、面白かった時代を思い出すと、労働者たちの只中で本当の人生の鍛錬を受けられたことを実感する。まさにこの注文は多いが勇敢で善良な同僚たちとともに過ごした環境で、私は一人前の人間として確立していった。確固として客観性と真実の立場に立つ人々に常に関わっていたことが、その後の私の人生を決定づけた。この時代に得た判断基準は当時も今も私にとって人との関係における確実な指針として役立っている。

一年後の1937年、私は東カザフスタン州党委員会書記に選出された。後には第二書記に選任された。

私は産業とインフラ建設の担当となった。この分野は過去においても東カザフスタンの牽引的役割を担う分野であったし、今でもそうである。当地には様々な有用な地下資源が多く、化学元素周期表のほぼ全ての元素が眠っていることは、周知の事実であった。その環境を生かすために、産業開発の方向は、製造拠点の建設とインフラの整備、要するに莫大な設備投資を必要とする重工業を中心とする産業開発を進めることが決められた。

当時、アルタイ鉱床地帯（東カザフスタン州内）は、非鉄冶金、機械製造、食品加工を始めとするコンビナートの建設ラッシュの真っただ中であつた。当然私自身も重工業の大きな課題の解決に直接取り組むことになった。それには、専門的知識だけでなく、生産工場の状況を理解し、その将来を予測する能力も要求された。

それぞれの地域には浮き沈みがあることは仕方がない。多くの要因が存在するが、指導者の質もその要因のひとつである。

私の新しい役職への任命は、東カザフスタンの運命の転換点と重なった。60年代から70年代初めにかけて、アルタイ鉱床地帯の資源は掘り尽くされたという意見が支配的となっていた。つまり、非鉄鉱石の産地の中心は中部カザフスタンに移っていくというのだ。こうした背景の中、地質探査活動の認可が急速に大幅に削減された。稼働中の鉱山には8～10年分の資源しか残っていないとみなされた。大規模の精製工場や冶金コンビナートが建設されていた東カザフスタンにとって、これは破滅的だった。豊かな鉱山資源のないアルタイ鉱床地帯は、想像することさえ不可能であった。

エネルギーで激しやすい性格で知られた新しい州党委員会第一書記プロタザーノフ氏の執拗な要請により、ソ連地質調査省とソ連国家計画局の管轄下に、アルタイ鉱床地帯の資源埋蔵量の見直し探査に関する専門委員会が設けられた。

私の州党委員会書記への任命は、まさにこの専門委員会が当州を訪問するタイミングであった。当州からは私の他に、新任の東カザフスタン工業・地質管理部長トルーブニコフも委員会の構成員として選任された。彼は、地質探査分野に於ける著名な専門家であり組織管理にも長けていた。

専門委員会は明確な結論を出した。東カザフスタンの資源埋蔵量は枯渇とはほど遠く、地質探査を大幅に強化する必要があるというものであった。我々はほぼ不可能と思えた結論を導き出したのだ。以降、地質探査のための予算は、3倍以上増額された。その後の数年は、委員会の結論が正しかったことを実証した。新しい巨大鉱山と各種金属の鉱床が開発された。アルタイ鉱床地帯は、息を吹き返したのだった。

州党委員会の書記の職務もこなしながら、この高レベルの委員会の一員として調査に携わったことから私は多くのことを学んだ。さまざまな問題に対するアプローチと考え方を改変できたことは、なによりも大きかった。

豊富な埋蔵資源をベースに建設された巨大な産業の下に優秀な人材基盤が形成された。高度の創造性と組織的思考の面において際立つ人材ポテンシャルであった。

私も、仕事をしながら自身を改変していくこととなった。有能な人材の知性に釣り合うレベルとスケールで考え、生きる。以下のような優秀な産業開発専門家たちともに開発に携わることが出来た：S・タケジャーノフ、I・ドゥマーノフ、N・ジャクシバーエフ、M・バイペーコフ、I・ポローニン、L・パルフェーノフ、S・ファブリーチノエ、L・ポノマリョーフ、A・タラーソフ、V・チューリン、A・クレーフ、L・スロポートキン、N・キム他、大勢である。これらの人々は、アルタイ鉱床地帯全体の脈動を管理していたと言えよう。産業開発管理の偉人達である。

東カザフスタンに私はほぼ31年という自分の困難に満ちた人生の長い年月を捧げた。最後の一年半は、州執行委員会議長を務めた。この30年以上の年月は、私にとってまるで全人生が凝縮された年月のようだった。それほどいつものっぴきらない要件が次から次へと降りかかった時期であった。私は、この無尽蔵の資源を有する辺境とそこに働き共に思想的・道徳的な鍛錬を受けた素晴らしい人々に感謝してやまない。人生の試練が厳しければ厳しいほど、得られる経験と業務上の教訓も大きいと確信している。大洋の波が小舟を翻弄するように、急速に流れる時間と嵐のような政治的出来事は我々の運命共同体という船を大時化にさらし、心配事や大きな人生の変動などという個人的なことを頭の隅に追いやり、多くの出来事の記憶を運び去っていった。

しかしコンビナートの労働者たちと働いた日々は、決して忘れられることはあるまい。まさにそこで、私は道徳的価値観で人生を評価することを学んだ。この一つの教訓を得るためにだけでも、激しい生産現場での困難をくぐりぬける価値はあった。冶金工、鉦山労働者、掘進夫の間で団結が強いのも全く偶然のことではない。セミパラチンスク州の予測不可能な現実が時折もたらず複雑な運命の転換点において、私の思考はしばしば、労働者たちと共に働く不屈な精神が鍛え上げられていった時代に戻っていたものだ。計り知れない価値がある贈り物を授けてくれた運命に感謝している。

1987年2月、私はセミパラチンスク州に州党委員会第一書記として赴任した。

セミパラチンスクには、当時のカザフスタン共産党中央委員会第一書記のコルビン氏と共に到着した。さっと町を見て回った後、私たちは、食料品店「セントラル」に立ち寄った。店の商品棚はスカスカであった。乳製品の入荷を期待していた人々が多く店の中に群がっていた。店から出ると、そこには人の輪ができていた。そのうちの一人がコルビン氏に聞いた。

- 「いつ我々の州の第一書記が任命されるんですか？」

- 「この人だよ、君たちの目の前にいる。」と、コルビン氏は私を指して言った - 「君たちと同郷で、アヤグズから来た。勿論、受け入れてくれるのならだが。」

- 「新しい第一書記はどこに住むことになるのですか？」と聞く女性の声があった。後で私も知ることとなったのだが、この質問には背景があった。市の中心に来賓の要人のために建てられたいわゆる「小ホテル」を、これまでは州党委員会第一書記が家族と共に占拠していたのだ。彼には3階の一戸建てを占有するもっともらしい家庭上の理由があったそうだが、この事実が新しい書記に関する風説の原因になっていたようだ。

私は、私邸に住んだことはなかった。普通の集合住宅に住み、それを快適なものだと感じていた。セミパラチンスクでは、普通の五階建ての集合住宅の3DKのアパートに入った。私の3人の子供は、全員成人し、自分たちの家族を持ち、ウスチ・カメノゴルスクに残っていた。私と妻にとってこのアパートは十分すぎるほどだった。確かに我々の所に子供が孫を連れてよくやってきたので、その時はアパート内は手狭で喧しくなる。しかし、これについて文句を言うのは筋違いであろう。生活にはいろいろな側面があるものだ…。

「小ホテル」について言えば、この建物は保健部門に移管され、児童健康回復セン

ターの支部となった。

州党委員会の総会で、コルビン氏は、「みなさんの地域の人間を地元に戻すことにいたしました」と私を紹介した。

公式に新任者を紹介するこのプロセスは何の変哲もないやりかたにも見受けられる。しかしながら、コルビンはこの機会を利用し、1986年のアルマ・アタでの十二月事件（訳注：カザフスタン人でなく、カザフスタンでの政治経歴を持たぬコルビンのカザフスタン第一書記任命に対する反対デモが抑圧された）に対する自分の姿勢の正当性を州の党活動家にアピールしていたのだ、この総会において登壇したコルビンは、民族問題を逆手にとりクナーエフ前第一書記を批判した。

私は自分の内側の用心深さに打ち克つことが出来なかった。我々の間に起こった十二月事件からまだ1ヶ月半しか経っていなかった。

アルマ・アタで12月に起こったことの真の内情はどういうことだったのか？多くの人と同じように、私はこれを、ペレストロイカが進められる間もノーメンクラトゥーラ（党高官）の原則 - 各共和国幹部には中央の人間を送り込む - が維持される中で「中央」により下されたお定まりのものとなった決定であると理解していた。

セミパラチンスクで総会が行われた日々の共和国内の状況は、限界まで引き伸ばされたバネのようだった。「魔女狩り」の真っ只中だった - 十二月事件のデモ参加者だけでなく、理解を示した人々も含めて弾圧されていた。

総会は静かに滞りなく進み、セミパラチンスクの人々は非常に温かく私を迎えてくれた。こうして私の職歴の新しい一頁が始まった。

その直後より、際限なく次々立ち上がる州の問題の渦に頭から突っ込んでいかねばならなかった。

私は少し詳しく党組織における自分の仕事について記してみた。これは私の過去であり、その自分が通り過ぎた長くウソのない道を客観的分析なしに抹消することは正当ではないと思われたのだ。批判好きな人々によって、多くの厄災の元凶だったと今日言われる共産党の権益擁護者の一味の中に私の名が列記されることもあろう。

大地に根付いた人間である私は、運命のいたずらによって党のキャリアという険しい階段を歩まされてきたおかげで、共産主義の理想に誠実に身を捧げてきた多くの党員が存在することを知っている。私の職歴は党の下流組織を出発点としているので、けっして誇張せずに言える。数千の共産党員にとって、党は人間形成のために通過す

る困難な学校であったのだ。

今、ヒラの黨員たちは上層部が犯した犯罪行為に対して罰を受けているのだ。私も十分非難されうる：「あなたはどこに居たのか？」、「なぜ黙っていたのか？」と。これらの問いに対して私はこう答えよう：「当時の中央統制システムでは、グラスノスチ（情報公開すること）は存在しなかった。党の州党委員会、市委員会、郡委員会、その他末端組織は、多くのことを知らされていなかったのだ。」と。仮に何らかの情報が漏れはじめても、それらは直ぐに遮断されたのだ。この隠蔽のしくみ、「上層部」を信仰し献身するシステムが破壊されたのは、後になってからのことだ。それまでは、党の中間及び下級職位の長を務める人間には困難な仕事だけが回されていた。彼らは、経済、社会、教育など、全てに対して責任を負わされていたのだ。

この本の執筆を始めるに当たり、私は自らについて語るという目的は設定しなかったが、自分の過去を概観することになってしまった。それは、遠いステップのアウル出身の恥ずかしがりの若者が、労働者集団に囲まれ、主要産業と深く関わる中で、どのように人間形成のプロセスをくぐり抜けてきたかを、自分を例にとって解明したかったからである。この人間形成のプロセスそのものが、私が党組織に入った最大の要因である。

ウスチ・カメノゴルスクで働きながらも、噂であっても、核実験が行われていることについて聞いたことはなかった。核爆発は数百 km 向こうからでも、大地の震動によりその存在を示していた。しかし、私も、多くの者と同じように、その振動について特別の意味を見いだせないでいたのだ。

邂逅

1987年は、私が職歴においてセミパラチンスク・ポリゴン（核実験場）と出会った年であった。当然、以前にも私は原子力の街、地図にも載っていない街、を訪れたことはあった。この隠された街セミパラチンスク 21 は関係者以外立ち入り禁止の街であった。また、この街は「クルチャートフ」という第二の名前をもっていた。

我が国の科学の発展に莫大な貢献をした優秀な物理学者クルチャートフについてくどく説明する必要はないであろう。彼については、本や映画がつくられ、十分多くのことが現在にいたるまでなお語られてきた。

クルチャートフと共に最初の原爆を開発した人々によると、クルチャートフは驚く

ほど快活な人で、会う人すべてに忘れがたい印象を残したそうだ。多才で卓越した学者、有能な指導者、永久に動き回るかのような、疲れという概念を知らないエネルギーな魅力あふれる人物、それがクルチャートフであった。

クルチャートフの長く美しいあごひげは皆の目を引き、蔭では「ヒゲ」と呼ばれていた、中には「ヤギ」(訳注：ロシア語のスラングでは「野郎」などを意味する)と呼ぶ人々すらいた。これは大変失礼なあだ名のように聞こえるかもしれないが、彼に対して用いられるとき、この二つのあだ名は、ほぼ笑ましいものとして受け止められていた。

夜中の2～3時まで続くことは稀ではなかった技術会議で、クルチャートフが突然会議の中断を宣言し、参加者にはよく眠って明朝8時からリフレッシュされた頭で未解決の問題の討議を続けることを提案することもよくあったという。

クルチャートフ市ではこの偉大な学者の名前がほぼ全てのものと結びついていることを明確に知っているのは、おそらく研究に献身した者だけだろう。目抜き通りの「クルチャートフ通り」、街のシンボルであり誇りともいえる花崗岩で覆われたクルチャートフの巨大な銅像。この偉大なる人物なくしては、この街は形成されることがなかったのである。

そしてその時が訪れた。私は、セミパラチンスク州の共産党第一書記として、職務でこの州内にあるクルチャートフ市の視察に訪れた。

率直に言って、遠くステップの真只中に、通信設備や広い道路や広場が整った立派な近代的な街があるとは予想だにしていなかった。イルティシ川に沿って建設された街はコンパクトで快適そうに見えた。ここには生産的な仕事と人間らしい生活のために必要なものはほぼ全て揃っていた。規模が大きく内装もきれいな店、文化会館、博物館、学校、ホテル、レストラン、幼稚園、託児所や大きな別荘まで揃っていた。全ての施設が居住区域内にある近代的な街であった。その街外れには最新医学水準の設備を擁する総合病院もあった。

街の北東端、イルティシ川近くにある二階建ての邸宅は、1949年の最初の核実験を視察するために訪れたベリヤを迎えるために建てられたものだ。ベリヤはここに2日間滞在した。その時以来、この邸宅は核実験場所長の住宅となった。イルティシ川の沿岸には、別荘と菜園が並んでいた。多くのクルチャートフ住民は余暇にここで野菜作りにいそしんでいた。

街には厳しい歴史がある。それについては、このステップの街に最初に移住してきた原子力関係者が語っている。

1974年、最初にここに来たのは軍隊の建設部隊だった。当時は、駐屯部隊の派遣のみで、街の建設など計画されていなかった。駐屯部隊は、モスクワ - 400と呼ばれていた。建設隊とほぼ同時にここに来たのが学者たちだった。彼らはテントや仮設住宅に住み、不便な生活を余儀なくされていた。

時が経るにしたがい、核実験場での仕事量は拡大し、新しい人が次々ここに動員された。居住区域も拡大していった。居住のための住宅は仮設ではなく、常設でなければならなくなった。急ピッチで建設された本部ビルと集合住宅の横には、文化・社会関連の諸施設が建てられ稼働しはじめた。

今やもうここは当初計画されていたような軍隊の駐屯地ではなく、文化・社会的生活を営むに必要なもの全てを備えた「街」といってもよいほどであった。1974年、居住地には市制が布かれた。これ以来、「セミパラチンスク - 21」という番号表示から、クルチャートフという表記に変わった。

クルチャートフ市の中心部には二階建てのホテルが建っている。それは、50年代初めに職員寮として建設された建物である。そこにはクルチャートフ、ハリトン、シエルキン、ゼリドビチ、ヨッフエ、サハロフ等といった偉大な学者たちが住んでいた。すべて単身赴任であった。

この街の主な働き手は若い学者・建設者であった。極めて戒律の厳しい生活で、仕事の他、余分なものは何もなかった。ここでは各人は自分の仕事の領域の知識だけしか知らされなかった。彼らは若く、若さの本質として、何にでも好奇心を持った。しかし、厳格な秩序が設定され、何ら気晴らしは許されなかった。唯一許されていたことは、時々たまジャナ・セメイ（セミパラチンスクのイルティシ川左岸部）に行くことだった。そこに行くときには先立っていつも、現地住民と関わらないよう厳格な指示を受け、「目立つ行動はするな」との門出の言葉をもらった。

最初にやってきた原子力関係者は、禁欲者のような生活を送っていた。仕事、ただ仕事のための仕事だった。

ヤーコフ・ゼリドビチ。理論家、核物理学の第一人者の一人で、極めて有能で快活な人物として知られる彼は、この厳格な条件に憤慨したそうだ：「何という生活だ。散歩もできず、飲むことできないとは...」。

と言いながら、ゼリドビチは、夜になると窓から忍び出て（一階に住んでいた）、デートにいそしんでいたこともあったようだ。

ポリゴン博物館で、私はこれらの人々の写真を目にした。彼らは我が国の原子力産業創設にたずさわった偉大な人々である。彼らの名前は我々の現代史と不可分に結びついている。

しかし我々、今日の世代は、これらの人物についてほとんど何も知らない。まったく残念なことである。

彼らの大半は既にこの世におらず、その生涯と同様、いまだに秘密の谷間に埋もれた存在である。それが機密厳守を宣言したもたちの運命であった。しかし、もうその運命に穴をあける時期が訪れているのではないであろうか。これら我を忘れて職務に没頭し、困難な課題の克服のためにチームを率いた学者、技師、指導者、教育者など、優秀な人物たちについて、世界に向かって語るべきではないだろうか。

彼らは、職場内に友好的でポジティブな雰囲気を作るのに長けた人々であった。また、緊迫し、時には心身を消耗させる仕事からも満足感を得るべく、献身的に職務にあたっていた。

彼らは、困難な課題との格闘の中でこそ、強い意思と目的をやりとげる忍耐力が鍛えられ、研究者に必要不可欠な組織力と強い精神力が高められることを、わが身をもって証明することのできた人物たちである。

今、彼ら若い研究者について思いを馳せながら、彼らの献身的な姿勢について考えている。何が彼らをポリゴンに留めたのか？高収入であろうか？しかし給料はひときわ高額ということはなかったし、囚われ人のような生活に対する補償として十分ではなかったであろう。彼ら有能な人々は、希望しさえすれば、より収入の高くより快適な生活を送ることができたはずである。

彼らを留めたものは、精鋭たちを必要とする課題であり、それは自分たちが没頭するに値するものであったのだ。本物の学問狂であったのだ。

当時、セミパラチンスクのステップには核物理分野における我が国のトップクラスの頭脳が集結していた。

我々のステップは、運命を決定する重要な役割を演じるよう定められているかのようである。

前世紀、このステップは歴史家、民俗学者、地理学者など数多くの流刑に処せられ

た啓蒙家たちをそのあたたかい懐に受け入れた。彼らと親交を交わしたのが、将来の偉大な詩人、セミパラチンスク出身のアバイ・クナンバーエフであった。様々な力や前向きの明るい姿勢を汲み取りえた進歩的な考え持ち主たちに囲まれて多くの時間を過ごせたことが、この詩人の将来を運命付けていたのであろう。

また、偉大な啓蒙家E．ミハエリスも、この地方の文化と教育の発展に大きな貢献をした。

偉大なロシアの作家ドストエフスキーが流刑されたことも、セミパラチンスクのステップの歴史の頁に永遠に残る記憶である。シベリアのオムスクから護送されてきた作家は孤独ではなかった。チョカン・バリハーノフという啓蒙家との親交が、ドストエフスキーにとっては過酷な生活の中の慰みになり、精神的な支えともなったようだ。

社会に吹き荒れる政治的、経済的、社会的な嵐に翻弄されてふさぎこんでしまっている、この時代の代名詞のようであった顔には、この町の住民の中にはお目にかかれなかった。そんな住民と、かれらの町を知るにしたがって、私は満足感を深めていった。この時代の激しい疾風を、クルチャートフ市も免れることはできなかった。市内の店も以前ほど商品で満たされているわけではなかったし、市政の問題も解決策が見いだされず山積していた。そうは言っても、周囲の村々や、州都に比してさえ、ここでの生活は独特の平穏さが流れていた。ソ連邦に核の盾を提供した人々対してしかるべき環境は確保されるべきであろう。

しかしながら、どこか心の奥の深いところで、苦々しさと悔しさが蓄積していた。クルチャートフ市と近隣の村々の住民の生活条件があまりにも対照的だったからである。

クルチャートフ市を訪れる前、私は多くの時間を割いて州内の市町村を見て回った。そしてどこでも社会的インフラの欠如を目の当たりにした。地方の牧場では人々は10年前や20年前と同じように電気もガスも通っていない土壁小屋に住み、時には厳しい水不足にも苦しんでいた。

ポリゴンの関係者が住む町、クルチャートフ市には、ソ連の国防省、原子力産業省、製造機器省などの科学研究拠点や、掘削、坑道掘削、地質調査、据付工事の生産拠点が集結されていた。

ここでは、実験用のサル、犬、ネズミを収容する檻、動物病院を備え特別飼料も用意されている動物飼育場、電算センターを備えた理論研究棟と実験研究棟、鉄道駅と

空港など、すべてのものが研究者たちのために用意されていた。

原子力の町、ここからステップの中を数百 kmにもわたって目に見えない極秘の通信網が張られていたのだ。

簡単な町の視察の後、ポリゴン司令部は親切なことにステップに展開されている主な施設の視察を提案してくれた。

我々は軍用ヘリコプターで各施設毎に滑らかに高度を下げながら回った。上空からは研究・実験区画が良く見えた。途中車に乗って施設を訪れたりもした。

むき出しのステップの地平線に、羊飼いのパオや馬や山羊の群れなどの見慣れた生活の光景ではなく、突如として巨大な穴や、風変わりな構築物や、鉄骨の塔が目の前に現れるのは不思議な感覚であった。

研究用区画「バラパン」は、その寸法と実施される実験の規模において最大級のものであった。この第一の用途は、最大爆発力限度 150 キロトンまでの核兵器の地下実験であった。主要課題と並行してこの区画では、機械構造、燃焼物理、地震のモデル化、建築物の耐震性、油井消火法開発など一連の実践的な軍事技術研究が行われていた。

研究区画「G」(「デゲレン」)は、中小規模の核実験に用いられていた。平坦な台地の区画「バラパン」と異なり、「G」は山の中にあった。核実験施設は、水平の坑道中に据え付けられることにより、物理的及び生物学的対象に対する放射線の作用に関する研究という付随研究の範囲の拡大が期待できる。ここでは基礎及び応用核物理分野における大量の情報が得られていた。

区画「10」は巨大な研究技術基地の一つで、二つの原子炉がおかれていた。この区画の主な目的は、高温燃料材用の実験、および、核分裂生成物物理、熱物理、流体力学の分野における基礎研究の遂行であった。

区画「Sh」と「10」のラボは、核物理、および核反応に伴うプロセスのモデル化の分野における研究であった。

区画「M」のラボは、放射化学、放射線学及び生物学的な研究で、液体窒素と液体酸素の製造のため空気分離機が稼働していた。

原子炉の研究センターについて詳細に説明してもらった。ここでの研究は研究開発公団「ルーチ」(訳注:「光線」)によって運営されていた。

黒鉛減速パルス出力炉が建設された区画「Sh」は30年以上稼働している。この

世界に類をみない設備を擁して、超高温領域における様々な課題の解決にあたっていた。ここではまた、原子炉用の新しい素材とその配合に関する研究も行われていた。

この半分砂漠のような広大な土地に、研究と、多用途の原子力設備の開発を目的とする巨大な実験基地が創設されていたのだ。

ここでは原子力の安全性に関する総合的な研究や、経済の様々な分野にかかわる超高温素材に関する研究が行われていた。研究結果は稼働中の原子炉施設の改善や、新型原子炉の開発に生かされた。

ソ連邦一般機械製作省はポリゴン領内に独自の実験基地を有しており、そこでは1972年から研究と実験を行っていた。同省は、このポリゴンで火星飛行用のエンジンの仕様を開発した省でもある（ただし、開発は道半ばで中断されエンジンそのものの製造には至らなかった）。核爆発用の軍用施設の耐久性も研究され、また土壌中の様々な反応プロセスの気体力学的特性についての研究も行われていた。全ての区画には、労働と休息のための適切な条件が整えられていた。

ポリゴンは莫大な科学的・技術的な設備を備えていた：31の軍事開発関連の科学研究所及びエンジニアリング研究所に加え、他分野の同様の研究所を29も備えていた。

軍事力の均衡維持という絶対条件の環境の下、これらの研究所の設備能力によって核兵器製造に伴う科学技術上の重要問題が解決されていったのである。

ざっと説明したこのクルチャートフ市とその実験施設の概要を知っていただければ、ポリゴンにおける研究のとてつもない規模をご想像いただけるであろう。ここまで列挙した壮大なる施設・設備群の本質的な目的はただ一つ - リズミカルに乱れなくポリゴンを稼働させることであった

その敷地は莫大な面積を有していた。これは40年前にソフホーズ（国営農場）やコルホーズ（集団農場）から収用したものだ。放牧地や農地を失うことを余儀なくされたことは、この地の経済的及び社会的発展にマイナスの影響を与えてしまったようであった。

ポリゴンは、莫大な研究、技術、生産の潜在能力をもってすれば、環境調査、生産の自動化や近代化、経済のニーズにそった人材育成などの面において、地域の発展にとっての大きな貢献を果たすこともできたはずであった。

ポリゴン内の企業は、生産工程の自動化と機械化、高温の核技術、原子力冶金学、

原子炉素材研究、これらから派生する核以外の様々なエネルギー資源に関する技術(基礎・応用研究のための低温プラズマの生成、強力なレーザー光線技術、放射線誘起の化学反応の発生条件創造技術など)に関心を示す諸企業・公団を誘致し提携することができるようになるはずであったようだ。そういった企業は地元の農業にも大きな貢献ができたはずである。しかし、特別な機密体制はそのような交流を禁じ続けた。

坑道掘進部隊という秘密部門の職員にはさらに詳しく話をきけた。

仕事の特性および部門の秘密体制のフィルターによって、極めて有能で高度に規律を重んじる強靱な人材が養成されていた。掘進工は、地下核実験の準備のための地下掘削を行うという国家的課題を非の打ちどころなく遂行した。実験のための施設準備は掘進部隊によって開始され、完了するのも掘進部隊であった。あらゆる種類の地下作業を遂行するための専門スタッフを擁していた。

各分野における最高の専門家と作業員がクルチャートフのために選抜された。この閉じられた町では、近親者の立ち入りも制限されていたため、生活は決して容易なものではなかった。人々は、何ヶ月も家族から別れて生活し、何十年も父母や近親者を自分の住む町に招くことを許されなかった。

人々はこのことを納得するため、仕事の特別な重要性を自分に言い聞かせた。祖国の国境の防衛は、常にわが民族の名誉ある伝統の一つであり、それは世代から世代へと母乳によって受け継がれている。

坑道と長孔(穴)での核爆発の技術としくみを記載しているパネルを見せていただいたとき、真っ先に頭の中を心配な考えがよぎった。しかし同時に、この創造物 - 科学的論理を現実化した人類の勝利ともいえるポリゴン - を造り上げた人々に対する尊敬と誇りも自然に感じられた。

実験区画を訪れたとき、何回もの地下爆発が美しい大地の輪郭をどんなに歪めてしまったかを目の当たりにした。ひび割れだらけのその地表は、空虚で生気がなく、そこには我々人類が大地を裏切り、絶滅の危機に対して身体を張れなかったことに対する大いなる傷跡が秘められているように見えた。

これは地表面だ。では、その下、地下はどうなっているのか？

実際、核兵器とその実験は、非常に複雑で計算が困難な物理現象に基づいている。核爆発時には、数億度という温度と数億気圧という圧力における物質と空間が発生するのである。

そして、核分裂生成物が地層内に残されてしまうのだ。こうして傷つけられた地殻は、おそらく数百年間は治癒されることはないであろう。

私には、この大地自身が余りにも壮麗で果てしないため、罰を受けているように思われた。

果たしてこれが私の先祖の広大で邪気のない大地なのだろうか？

これが、かつてその懐に偉大なステップの賢人アパイを抱き、数百年間絶えず語り続けたらしめるミューズ[美神]を吹き込んだ大地であろうか？優しく気前のよいステップは、ロシアからも著名な客人を受け入れ、息子や娘を育み世に送り出した。多くのステップ出身の若者は後にカザフ民族の名誉と誇りになった。しかし、文明は大地の相に良い痕跡だけを残したと言い切れる人間にはいまや出会えないであろう…。

実験者の頭の中では毎回の爆発毎に長く入念な精査された準備と計算があり、事前に予測された結果を待つだけだったかもしれない。しかし、住民にとっては、どの爆発にも思いもよらない悲劇が隠されていたのだった。大地は、まるで足元から逃げ去っていくかのごとく、慄き震え、揺れた。それは40年間にわたって続いたのだ。

人間の心理 - 感受性をつかさどる繊細なインストルメント - は、このような尋常ならぬ過大な負荷をどう持ちこたえることができるのだろうか？

忘れえぬ初めての核実験場訪問の際、このような不快な考えが私を捉えていた。

強烈な印象を残した街、ラボ、実験区画の視察の後、核実験場司令部はあるドキュメンタリー映画を見せてくれた。「厳秘」の刻印がついた「最初の大気中水爆実験。1955年」という無味乾燥なタイトルの映画だった。

生涯の後にも先にも - 私の人生は決してバラ色に満ちていた訳ではなかったが - 語り手の冷徹なまでに冷たいトーンで語られたこの45分間の「見世物」ほど強烈な戦慄を走らせた体験はない。人類は進歩の過程で科学技術のありとあらゆる分野でその発展を極めてきた。映画は、敵の侵略からの防衛のために極めて巨大な知的及び物質的資源が投入されていることを確信させるものであった。米国や他の「核クラブ」の諸国と同じように、ソ連邦の核の盾も作られていた。しかし、人類は静穏に安心して生きていくことができるだろうか？この小さく脆い惑星のどこかの片隅で、いかなる瞬間にも、権力を獲得した狂った政治家の気まぐれによって、核の盾というコンセプトが地上の全ての生命の殲滅という破壊的な考えに転化し得ることを知りながら…。

映画が語っていることを述べよう。

かつてコルホーズ（集団農場）に属していた 1,800 万平方キロの放牧地、草原、山が収奪され核実験場として使われた。様々な実験施設がこの広大な土地の各所に配置されていた。ここは、何よりも先ず、製造業の町であり、もちろん人も住んでいる。その町は爆心から 16 km 離れていた。もちろん、この町では工場は稼働せず、家々にも人は住んでいない。それら空き家の太陽に輝く窓は盲人の眼孔のように見え、その各種設備が仕込まれた住宅に兵士たちが実験用動物を運び込む光景は奇妙である。実験動物になったのは羊であり、その体には測定器具が取り付けられている。床の上、ベッドの近くに干し草と水がおかれ、ドアには鍵がかけられる。同じ作業がこの五階建ての建物の全部の階に対し行われた…。

平和なステップのいたるところに装甲輸送車や飛行機用の遮蔽物がおかれ、地表から地中の 6 から 50 メートルの深さにいたるまで、単純な塹壕から地下鉄のような坑道まで様々な設備が配置された。爆発計画地点のすぐ近くに、あるいは爆心からの様々な距離に。そういった地点には測定者が身を隠していた。

地下にはラボが設置されていた。ラボ自体が最新設備が装備されたひとつの街のようであった。爆発時には毎秒 50 万コマで高速撮影できる撮影機があるという例ひとつだけでそのレベルを想像するに十分であろう。

機器の最終調整が行われていた。半径数 km 内の集落の住民は避難し、軍用機で放射線レベルの観測が行われた。

そして実験当日が訪れる。セミパラチンスク空港から重爆撃機が飛び立つ。水爆を積んだ爆撃機だ。その後を他の数機が追っていく。

司令室。発射ボタン前には士官が待機している。その若々しい顔は険しく、集中力が高まっている。爆撃機から信号が発信される。飛行機は爆撃進路に入る。爆発まで 3 分。そこに信号：「ターゲットが雲で見えない」…。飛行機が濃い雲を抜け出す。盤上で計器が記録：「爆弾は投下された」。士官の抑えた声が静かに響く。

- 「爆発 30 秒前」
- 「20 秒」
- 「10 秒」

そして千個の鐘が鳴るように警鐘が鳴り響く。水爆が高度 1500 メートルで爆発。スクリーンは白い雲で一杯に。それは数秒で層状のきのこ雲に転化する。その赤紫色の幹の上に毛が生い茂ったような灰色の帽子が形成され、それに後光が宿る。光景は

衝撃的だ。そして最も恐ろしいのは、この人間の知恵と手によって生み出された魅惑的で美しいきのこ雲は不吉な死の象徴であったということである。

甚大な破壊力の衝撃波が、想像だにできない速度で進み、その進路にあるもの全てを消し去る。強力な放射線の影響下にステップが燃え上がり、火が全てを焼き尽くした。

司令官の落ち着いた声を確認する：

- 「爆心から 9 キロで石造建物が大破。上層階に収容されていた動物は死亡、下層階では打撲傷。ステップでは飛行機が燃焼中。」
- 「距離 8 キロで動物が死亡。重度の火傷あり。」
- 「7 キロ、工場建屋が完全に破壊されている。」
- 「6 キロ、住宅が廃墟と化す。巨大な空間がほぼ残らず破壊。」
- 「5 キロ、衝撃波により数十トンの重さの戦車が吹き飛ばされる。」
- 「4 キロ、三階建て石像建屋が破壊され、破片が 1 キロ四方に散乱。」

爆心地区。地表に割れ目がぱっくり口を空け、土壌がずれ、周囲のあらゆるものが吹き飛ばされている…。地下鉄のようなトンネルは破壊を免れ、ここにいた動物は特に被害を受けなかった。地表では、3 キロ地点に配置されていた鉄筋コンクリートの避難所が損害を受けずに残っていた。16 キロ地点の町モデルは半壊、割れた窓が虚ろな目のようだった。宙に浮いているかのように階段がゆらゆら揺れていた。

全体的まとめ：爆心から 80 キロ地点で、家の屋根、ドア、窓の棧が壊れ、しっくい壁が崩れた。同じことが 120 ~ 220 キロの距離にあった居住区でも発生した：爆発の瞬間、その方向に風が吹いていたのだ。

この映画を私は 3 回見た。そしてその度に、私は矛盾した感覚に捕らわれた。莫大なエネルギーの源を発見した学者たちの叡智に感服したが、その反面…。国の核の威力が増幅された今日でも、昨日と同じように、ポリゴンにおける実験の 40 年の歴史と同様に、核には人間の悲劇が伴う。そのルーツをたどれば何世紀も遡る、この広大なステップの真の住人である人々が、なぜこの実験のために自分の死活的な利益を取り上げられなければならないのか？人々だけではない；カザフ人の聖なる旗印となった偉大な賢人、予言者、詩人、作家らを生み育んだ古の大地が、なぜにこのような運命を背負わねばならないのか？

クルチャートフ市は核開発の町として生まれた町だ。その使命は核実験場を稼働さ

せることであり、この町はまさにこの使命を確実に遂行していた。しかし、この町と核実験場が横たわる大地は、我が州の幾世紀にも及ぶ拭い去りがたい歴史の痕跡が刻まれている。ここはカザフ人が住み続けた土地であり、カザフ人のルーツである。この我々の町の上を核実験の疾風がざわめきと共に通り過ぎても、ここの生活の日常的な平和な流れを取り戻す。普通の町にもどるのだ。

核実験場の印象は文字通り私の胸を一杯にし、あらゆる考えが次から次へと頭に流れ込んできた。この驚嘆に値するほど壮大な核実験場で祖国の核の盾が鍛えられている。しかし、核実験場を建設した国家は、その一面的なアプローチの陰で、地方をないがしろにしてしまった - そこに住む住民の運命とともに。

私は、クルチャートフ市と核実験場に対するそういった相反する思いを抱き、核実験場を後にした。私の内面は、核爆発は中止されねばならないという確信で満ちていた。ステップはその傷から癒されなければならない。

核実験場の幹部たちは、私には非常に礼儀正しく、多くを見せ、また多くを語った。我々は対外的にはあらゆる面で親善的な関係だったとは言え、私と幹部たちの間には大きな距離があり続けた。

対立

核開発の町の生活を目の当たりにし、核実験場に隣接する村や集落を訪れ、ドキュメンタリー映画を見るという初めてのポリゴンとの邂逅をへて、衝撃を受けた私の頭には、多くの矛盾する考えが流れ込んでいた。しかしながら、それに集中する暇はなかった - 住民の生活にかかわる急務が目白押しであった。それらを毎日のように解決するために全ての時間が使われた：働く時間はもちろん、休息する時間も、そして時折夢の中でも・・・。

核実験モラトリウムの表明により、人々の心配が収まった。核実験場は沈黙した。しかしこれは偽りの沈黙で、新しい爆発のための準備作業が一層強化されていたのだ。

1987年、核実験場は、居眠りから震い起こされたかのごとく、沈黙で過ぎ去った時間の埋め合わせを開始した、爆発力20から150キロトンの爆発が18回行われた。自分の執務室の振動から、私は殆ど正確に爆発力を言い当てることができた。州党委員会書記局の会議中に、偶然実験が行われた時、私は言った。「30 - 40キロトン」。まさにその通りであった。

1989年2月12日、核実験場の閉鎖を求める緊迫した戦いのきっかけとなるある出来事が起こった。この日、実験場では爆発力70キロトン以上の地下核爆発実験が行われた。製作者と実験者にとっては平均的な威力の爆発である。

テレビのニュース番組「ブレイマ[時]」が、通常通りにこう報道した。「セミパラチンスク州核実験場で、爆発力20から150キロトンの地下核爆発が行われました。放射能レベルは正常です」。しかし20と150の間には大きな違いがある。実験に携わった者だけにこの差の意味がわかる。もし予測不能な事態が起こらなければ、おそらくこの爆発は一連の他の爆発のひとつとして片づけられていたであろう。

この日の爆発で、すでに多年に及ぶ核爆発により変形した地表に巨大な割れ目が形成され、そこから放射性ガスが二昼夜にわたって放出された。

実験準備に際して、実験者は普段同様に核実験場のモニタリング施設以外にはモニタリング施設のない方向に風が吹く瞬間を選んで爆発ボタンを押した。これは秘密施設の狡猾な秘密の一つだ。しかしながら2日の間に風向が変わり、ガスの帯は爆心から120キロ離れた村落チャガンに核実験場とは関係なく配置されている軍隊を覆った。

私はこれについてチャガン軍隊司令官ブレディーヒン陸軍少将からの公式通報により知った。しかし、客観的な計器の指標が示されたにも拘わらず、核実験場司令部は放射性ガスの地上放出をきっぱりと否定した。

後に以下のことが解明された。放射性ガスの帯の幅と深さは数十kmで、3万人以上が居住する地域を覆っていた。放射能レベルは、自然界レベルが15から20マイクロレントゲンのところが、3,000 - 4,000 という高さに達した。ちなみにこの時は、風向のおかげで放射性ガスはセミパラチンスク市を通らなかった。

同じような流出は、ほぼ核実験3回につき1回の割合で起きていた。1987年に放射性ガス流は一度ならずセミパラチンスク市に到達し、放射能レベルが450マイクロレントゲンまで上がった。核実験場からより近い地区については、さらにひどい状況であったことは言うに及ぶまい。1988年には、同様の事態が二度起こった。

2月12日の爆発による放射性降下物はまだ広範囲に散乱せず、この日に起きたこともまだ分析されていない2月18日、第二の核爆発が轟いた。今度の風向きは一体どこへ...?

今や核の均衡は達成されていた。均衡を目指すこれ以上の軍拡は、出口のない閉じ

られた道に行く終わりのない歩みで、果てしない消耗運動だ。これは袋小路だ。行き場のない閉じられた空間に、管理できないエネルギーと兵器が蓄積されるのは、非常に危険である。際限なく核の均衡を求めるイデオロギーそのもの、哲学そのものが、核爆弾そのものに劣らず危険となってしまったのだ。

均衡とは何か？ これは、同じ体重でボクシングの技法を完璧に習得した二人のボクサーの試合のようなもので、どちらか一方が不用意な動きをすればロックダウンされてしまうのだ。

今日の均衡は現状を合理的に考察するターニング・ポイントにならなければならないのではないのか。

今日「核クラブ」諸国家間の競争で操縦桿を握っている者にとって、50年間にわたって蓄積され固定化された核兵器とその均衡についての考えを否定するのが困難なのは理解できる。「いかなる対価を払っても」とか「勝利するまで」という国家ドクトリンを否定するのも困難であろう。

2月の実験で住民の我慢の緒が切れた。感情と怒りが外に放たれ、かなり活発な行動もとられた。州首脳は極度に繊細さが要求される状況に陥った。誤りを犯さないために、正しい姿勢を選択するために、どのような策を講じるか、その実行の瞬間を逃さないためにはどうすべきか、多くの決断を迫られた。

党の州党委員会書記局員との会議の後、ナザルバーエフ書記長と当時の共和国閣僚会議議長の同意を得て、私は中央に以下のような暗号電報を打った。

「ソ連共産党中央委。セミパラチンスク州における核実験場について。

カザフスタン共産党セミパラチンスク州党委員会は、1949年から人口約34万人のセミパラチンスク市に近い核実験場において、最初の時期は大気中で、1963年から地下で行われている核実験についてソ連共産党中央委に通報する。

40年が過ぎた現在、核実験場を取り巻く状況は変わり、住民の数は3倍に、また家畜の頭数も何倍にも増えた。核実験場は人口密集地にあることになった。しかしながら核実験場の運用ではこのことは全く考慮されていない。毎年14から18回もの、核爆発が行われ、それは住居や製造インフラに対する地震の影響を伴い、居住村落や畜産に水を供給している数百の井戸が使えなくなった。

市は耐震性の考慮なく建設された。その他、核実験場地域では25年間に渡る地下爆発で地殻が変形し、3回に1回の頻度で事実上対策不可能な放射性ガスの地表流出

が発生している。1987年、セミパラチンスクを一時間あたり350 - 450マイクロレントゲンの放射能レベルのガスが通過。また、今年2月12日の実験の際には、核実験場境界外で一時間あたり4000マイクロレントゲンの放射能が記録された。風向が変わったため、これらのガスは州都に到達しなかった。しかし、ガスはセミパラチンスク - 21やチャガンの町他多くの居住地に拡がった。

核実験は、当然ながら、社会的に様々に解釈され、住民の間で精神的・心理的な緊張を引き起こす。住民が健康状態やさまざまな社会的問題を核実験と結びつけるのも根拠のないことではない。

州党委員会は住民の間で大規模な説明活動を実施した。

州党委員会は複雑化しつつある状況への懸念を表明し、ソ連共産党中央委に対し、一時的な核爆発の中断、あるいは頻度と爆発力を相当数減少、将来的には核実験場のより容認できる別の場所への移設を担当省庁に命じることを請願する。」

この電報は災厄に対する不安をのせた警鐘であり、苦しむステップの声だった。直ぐに、詩人オルジャス・スレイメーノフの呼びかけで、セミパラチンスク実験場における核実験の中止を求める運動が組織された。2月28日のカザフスタンのテレビ番組における彼の出演はその呼びかけとなったものとして多くの人に記憶されている。

生命はその平和を愛する本質の創造者を見つけ出すものだ。ありがたいことに私はその一人になることができた。

私は前任者たちの核実験場に対する姿勢や当時の核実験場を取り巻く状況について当然のごとく関心をもった。50 - 70年代の保管文書を紐解き、一つだけそれに関する文書を見つけることができた。50年代末、セミパラチンスク党州党委員会と州執行委員会（訳注：州政府）はフルシチョフ書記長に書簡を送り、その中で放射線状況を引き合いに出し、肉などの食品や集合住宅建設に充当するため追加資金の割当てを請願していた。実際、州に5000平方メートルの集合住宅と1000トンの肉が割り当てられたことを証明する文書もあった…。

知られているように、初めてセミパラチンスク核実験場の諸問題についてナザルバエフ書記長が表明したのは、第19回全ソ党会議においてである。彼はその時、人口密集地域において核実験が継続されることについての深刻な不安を表明した。

州党委からクレムリンへの暗号電報は、セミパラチンスク核実験場における核実験の中止を要求した初めての公文書だった。

電報についてはソ連共産党中央委員に知らされた。それは軍産共同体にとっては青天の霹靂であった。

二日後、カザフスタン共産党中央委第一書記コルビン氏から私に電話があり、こう言われた。「君の手紙はゴルバチョフ書記長に届けられた。ゴルバチョフと面会したヤゾフ国防相は『ボズターエフは状況を歪めている、核実験場はクリーンで心配する根拠はない』と言ったそうだ。」

この時点から、非公式の私を貶めるキャンペーンが始まった。後にクルチャートフ市党委第一書記サフロノフとクルチャートフ市執行委員長チャイコフスキーが語ってくれたところによると、軍産共同体の幹部たちは私を「軍司令部に対し立ち上がった最初の人間」、「危険な人物」等々と呼んでいたそうだ。

2年経った今、私に明らかになったのは、私はこの暗号電報によって自分自身に予測できない道を開いてしまっていたことだ。対立の道には、単にイバラの道であっただけでなく、危険、緊張、不快に満ちていた。

暗号電報が私からソ連共産党中央委に送られたのは2月20日、そして2月28日にはクルチャートフ市に政府調査委員会がやってきた。そのメンバーは、ブカートフ閣僚会議付属軍事産業委員会副議長であり調査委員長、ミハイロフ原子力産業省次官（核兵器製造と実験問題を管轄）、ゲラーシモフ陸軍大佐およびソ連国防省第十二主管部長（核兵器製造と実験問題を管轄）、ダダヤンソ連自然保護委員会副議長、ストレフニン共産党中央委国防産業部代表、シュリジェンコ保健省第三主管部長（保健省内秘密機関管轄）、ブルガーコフ医学アカデミー会員。

これは核実験場が稼働していた40年間で初めての調査委員会だった。二日間、彼らは核実験場で調査した。我々は労働者集団と調査委員会との面会をアレンジした。彼らは自分たち自身で労働者の考えや気持ちについて確認した。3月3日、州党委書記局と調査委員会との会談が行われた。その速記録の幾つかの部分を引用する：

ブカートフ：この調査委員会は、ソ連共産党中央委書記長の委任と州党委の電報により、現地で起こっている問題を研究する目的で、ここに来ました。この段階での基本目的は、核兵器実験とそれに関連するあらゆる総合的な課題の改善策の策定です。分野毎の専門家が全て視察いたしました。安全性と放射能レベル、および調査委員会の作業の総括に関しては、提案と勧告が州党委、ソ連共産党中央委首脳と政府に与えられることとなります。

核実験毎に、また毎年、ソ連共産党中央委とソ連政府の実験実施決議が採択されております。決議に基づいてのみ、イリエンコ核実験場所長、ゲラーシモフ国防省第十二主管部長、およびミハイロフ中型機械製作省副大臣が核実験実施裁可の権限を有しています。核実験に関する公式文書も保管されております。

厳密にこの文書に従って判断すれば、イリエンコ所長は何一つ違反は犯しておりません。2月12日の実験に関しても違反はありません。87年の5月の実験に関しては例外ですが。

現在の主要な方向性は、実験の頻度と爆発力を最小限に抑えることです。安全性と環境の改善を検討し、好ましくない事態の防止のために必要な組織的かつ技術的措置を採ります。指示書及び基準文書に数々の変更と修正を加えます。そうすることによりイリエンコ所長の業務のやり方も変わってくるはずで

す。セミパラチンスク地域に放射線許容基準「B」を設定することを検討する必要もあります。

ボズターエフ：しかしセミパラチンスク州はカテゴリー「B」に属したことはありません。州にはグループ「B」に対し設定されている優遇措置や補償はありません。過去40年間に渡って一切ありませんでした。今、災難が起こってから、思い付いたようにその設定をするのはいかなものか。

イリエンコ：核爆弾の実験準備作業は、全て設計・実施に関わる研究所や諸機関により行われている。問題に責任があるのはそれらの機関です。私は核実験場所長として住民と実験参加者の安全に対し責任を負っています。従って、このように私に対してガス放出の罪を課せることは正しくありません。私は、配布された文書にのっとり実験を実施しました。

ボズターエフ：ガスが放出され、放射能レベルが基準の数千倍を超えたことに対して、責任を取る人がいない、ということはありません。張本人がいるはずで

す。その人たちが責任をとるべきです。
イリエンコ：私が責任を負わない問題でなく、責任を負う問題に対し、質問していただきたいと思います。しかるべき委員会が私には何の罪があるのか厳格に分析するよう望みます。それらの罪に対し私は責任を負います。当面、2月12日の出来事に対し私に罪を課すことは出来ません。ケシリム・ボズターエフさん、貴方には既に何度も説明したように、核実験場の外の出来事に対して責任を持つ諸機関が存在するの

です。核実験場外の状況に対しては、私に責任はありません。

ボズターエフ: 貴方に1987年5月に起こった事態を思い出していただきたい。あの時もガスの放出がありました。当時貴方は、相応の措置が取られるであろうから、同様の事態は繰り返されることはないと保証しました。我々はあの時貴方を信じました。もし1987年に、我々州党委書記局および省の担当職員が真剣に問いただしをしたら、放出は繰り返されなかった可能性もあると思います。ところが今、イリエンコ氏は我々を弄び、翻弄し続けているのです。

イリエンコ: ボズターエフ書記長、私は子供ではありませんよ。私は36年間の黨員としてこの道を歩んできました。私を脅す必要はありません。貴方は、正直な人々の前で「私が貴方がたを弄んでいる」と言われました。貴方が私に罰を与えるのは結構です。しかし、私が何かを弄んでいるかのような言い方をされるのはいただけません。

ボズターエフ: 誰も貴方を脅してはいません。貴方は職責のある人間で、貴方に委ねられた範疇に対しては責任を取らねばならないのです。貴方は世論を過小評価されていらっしゃる。どういう世論に我々が直面しているのか、ご存知なのですか？

イリエンコ: 私は、2月12日に対する責任者ではありません。

ボズターエフ: 貴方は核実験場の長です！ 貴方は全てに責任があるのです。

イリエンコ: 私はこのことに罪はありません。私は国家の人間であり、国家の課題を実行しただけです。

ボズターエフ: しかし、チャガンで記録されているように、放出は起こりました。国家は貴方に放射線安全性を確保するよう一任していたはずですが。

イリエンコ: それはありませんでした。問題は様々に設定できます。どの位のレベルだったのか、チャガンの司令官に報告していただきましょう。

ブレディヒン: 我々はピークには遭遇しなかった。得られた測定値は、毎時0.5および0.8レントゲンでした。

グラーシモフ: マイクロレントゲンでは幾らですか？

イリエンコ A. D.: 800です。

グラーシモフ: 2から4000マイクロレントゲンではなかったですか？

グーセフ: 2月13日に午後1時ごろにセミパラチンスク - チャガンのルートに沿って測定が行われた。チャガンまで40kmほどの地区で、毎時500-600から2

000マイクロレントゲンの線量が測定されました。

ブカートフ：我々の調査委員会によれば、これは許容値の3%にあたります。

ボズターエフ：セミパラチンスク州は、貴方がおっしゃっている地域には該当しません。

ミハイロフ：私は物心ついて以来全人生を核兵器の開発に捧げ、わが祖国の核の盾を作ったことを誇りに思っています。カザフスタンの大地に感謝しております。ここはクルチャートフ氏、アレクサンドロフ氏、サハロフ氏、ゼリドビッチ氏、スラーフスキー氏らが研究に携わった土地です。1957年以来、私も頻繁にここで仕事をしてきました。困難な戦後の時代に、国は兵器を開発したのです。

私自身ネバダに行き、共同実験を行いました。アメリカ側はネバダ核実験場の至る所で核兵器開発を行っていました。我が国は必死の努力を試みました。モラトリウムが表明し、第三核実験場での実験を停止しました。全面禁止も提案しました。21世紀を核兵器のない世界で迎えようとも提案しました。しかし、アメリカ人はのってきませんでした。今日、彼らは頭の先からつま先まで武装しています。彼らはどんな実験をしているかご存知ですか？我々と同様なのです。直径1 - 2メートル、深さ600 - 700メートルの垂直の井戸に核兵器が降ろされます。その後、井戸に碎石と砂が詰められ、爆発生成物を地下に閉じ込めるためのコンクリートの栓がされます。しかし揮発性の成分、つまりキセノン、ヘリウム、クリプトンなどの放射性稀ガスはほぼ何にも付着せず、土壌と結合もせず反応も起こさず、割れ目から徐々に外部に放出されるのです。

セミパラチンスク核実験場に於ける全ての爆発は、中央委と政府の決定にのっとつてのみ行われています。その決定では、安全性の確保、放射性生成物を国外へ放出しないこと、1963年の条約に違反しないことが規定されています。

ボズターエフ：それが適用されるのは、国境に近い場所でしょう。然るに我々の地域は国境から数千km離れているではないですか。

ミハイロフ：我々は良く理解しており、ガスの放出を無くすため可能なあらゆる措置を取っています。しかし、自然や土壌を相手にしていますので、ガスが放出されることもあるのです。各実験を執り行っているのは核実験場の司令部ではなく、実験にかかわる全ての分野の専門家を擁する国家委員会です。

テレビを見ていると数千マイクロレントゲンから約1レントゲンの線量を受けます。

胃のレントゲン写真は更に高い線量です。また、核実験を移設するという考えはおおよそ現実的ではありません。約100億ルーブルの費用と研究の10年の遅れが想定されるのです。

チャガンではどれだけの線量を受けたのでしょうか。テレビの前に10分間座ったのと同じ線量、2.4ミリレントゲンにすぎません。

チャイジュヌーフ:私は州党委のイデオロギー部門を率いています。審議されている問題は、単なる防衛の必要性への理解および献身という角度の下でのみ検討されてはなりません。州党委としては、住民への説明のためにあらゆることを行いました。私はここに座って核爆発を目撃した一人です。まだ学生だった1955年11月と1956年の秋でした。2月12日後の状況は、判断の枠を超えてしまいました。私は調査委員会に一つのことを理解していただきたい。核実験場があるアバイの大地は、我々カザフ人にとっては、ロシア人のためのヤースナヤ・ポリャーナ(訳注:トルストイの生誕地)のようなものなのです。我々はこの土地に心を痛めています。この大地は住民にとって近づけないものになってしまっています。

トクターロフ(州保健課長):医師たちがまず警鐘を鳴らしています。州内で疾病率が上昇しています。この地域では核爆発のガスは無害だと吹聴しようとされています。しかし、1949年から1963年まで地上・空中実験を行ったという事実はどうすればよいのでしょうか?特に心配なのは、精神疾病の二倍の増加、子供の免疫性低下、そして、妊婦の貧血です。

ブルガーコフ:日本とアメリカの学者が40年間行った研究に、我々の研究所も参加し、こういう結論が得られました。第一に、原爆投下時に受けた線量が100レム未満の場合です。100レム未満なら、被爆者にもその子孫にも、母親の胎内被爆者にも、なんら病変を引き起こしませんでした。奇形もなく、血液病もなく、子孫の知的発達にも影響は出ませんでした。100レム以上被ばくした人々にだけ血液病、白血病が最初の5-10年に現れ、20年後には、食道、女性の乳腺、胃や肺にがんが現れました。他の病気はありませんでした。

核実験場周辺の住民と核実験場の所員に現れる疾病を我々は非常に入念に研究しております。直接の関連性は見受けられません。

ゲラーシモフ:私にイリエンコ所長の弁護をさせていただきたい。イリエンコ所長は、自分に罪はないとおっしゃいました。なぜなら、すべての実験は設計施行機関に

より計画され、委員会により承認されているからだと。これはまったくその通りです。それでも責任を追及するのであれば、所長よりも、私又はここに座っている、省次官、教授、ミハイロフ博士に対して責任追及をすべきです。しかし、我々は完全なる根拠を持って12日の不活性ガスの放出は住民の健康に何ら損害をもたらしていないと表明いたします。なぜならこれは取るに足らぬ線量であり、この線量については単に事実のみを述べるだけで事足りるでしょう。その日の被ばく線量は、貴方がたがこの部屋で5日間会議をした場合に受ける線量を超えていません。または、モスクワへ飛行機で二往復したときに受ける線量と同量です。従って、これを大げさに語るべきではありません。核実験場には、核兵器を開発する課題が課せられています。私はセミパラチンスク州も我々と共にこの課題にたずさわってくれるものと考えています。イリエンコ所長を非難し圧力をかけるのではなく、支援する必要があるのです。私は所長が支援されていることは知っています。これについては貴方がたに感謝いたします。核実験禁止および核実験場閉鎖の決定が採択されるか否か、私は存じ上げません。しかし実験が継続されるとすれば、今のような条件ではイリエンコ所長が業務を続けることは、申し訳ないが、出来ないでしょう。なぜならば、今こうやって放射能状況を巡る問題、40年も前に行われた実験を巡る問題についての会話に時間を費やしていますが、これらはイリエンコ所長の問題ではないのです。コルホーズの女性労働者や大学生が訴えるのであれば、まだ私にも理解できます。しかし、州保健部の人間がマイクロやミリという単位の放射線を被ばくして血液の病気になったようなことを言うのは、無知な発言に聞こえます。

市民には正しく説明しなければなりません。私は全ての発言を聞き、多くを理解できました。ここに来る機会が生じたことに感謝します。ここで私は核実験場を取り囲む雰囲気を理解できました。これは、現実に深刻な問題です。しかし、核実験により人々が病気になっているという観点からではなく、人々が核実験と共に実際に住んでいる時の心理という観点からです。これは我々にとっても新しい観点です。私は市民と会い、そしてここ州党委書記局の会議においても、これが州にとっても新しい観点だということを理解しました。ひょっとすると、市民への補償、広報活動、医療などの問題が生じているのは当然なのかもしれません。更に深く考え抜かねばならないということです。しかも緊急に。

結論は、我々はガス流出の防止のため可能なことも不可能なことも含めて全ての対

策を取らねばなりません。しかし、物理法則には逆らえません。もっとも最近の実験は120キロトンで計画されたが、実際は70キロトンで実施されました。放出はほぼゼロであったはずですが、しかし、放出は起こりました。ただし、3時間後でした。ということは、それは濾過されれば正常なきれいなガスだったのです。それでも、流出が起きたのは確かです。地質を詳細に研究しなければならないのは明らかです。その研究は必ず行われます。そして、深く考えることです。ここではもっと多くの問題が生じるでしょうが、それらは解決されるはずですが。

ボズターエフ：ゲラーシモフさん、貴方は頑固にイリエンコ所長を擁護されるようですね。彼は、中将としては貴方の同志、共産主義者としては我々の同志です。共産主義者同志として、貴方にお伺いする機会を与えて欲しい。

ゲラーシモフ：貴方は彼を侮辱していないと、私は思っています。

トクターロフ：大気中核実験を行っていた時期、キノコにはどれだけの放射線量が計測されていたのでしょうか。

ゲラーシモフ：その時期には、私はここで働いていませんでした。州党委第一書記は2月12日には何ら住民に影響を与えませんでした。医療関係者に質問させていただきたい。最大4マイクロレントゲンだったという証言がありましたね。貴方はご存じないのでしょうか、4マイクロレントゲンが人体にどう影響するのかを？

エレメンコ：今の会話には満足できません。貴方がたは自分の官庁の利益擁護をしていらっしゃる。国家調査委員会の同志の皆さん、ご自身の部下になぜ自分の指示を隠れ蓑にするのか、聞いてみてください。年間14 - 18回の核実験にはなにか意味があるはずですが。2月12日には地域暖房網、水道管および下水管の事故が14件起きています。毎回同様の事態が生じています。結論は一つ。人々にも、またこの大地にも休息を与えなければならないということです。核実験場を閉鎖し、他の場所への移設を検討すべきです。

ボズターエフ：残念ながら、私たちは状況を単純化しすぎているようです。ブレデーヒン將軍からの連絡がなかったら、2月12日に何が起こったか、誰も知らなかったことでしょう。しかし、今までこんな事例はなかったと誰か保証できる者はいるのでしょうか。いままで常に、官庁の利益のほうが人間そのものへの配慮よりも優先されてきました。イリエンコ所長はまだ働かれるようだが、將軍待遇の年金を受け取れば一日たりともセミパラチンスクでは住まないでしょう。一日もです。しかしセミ

パラチンスクの住民は今までここで住んできましたし、今後も住み続けこの地で働くのです。ですので住民は誰よりも心配しているのです。

我々は中央に正規の通報をしました。我々は政府に補償問題の解決を請願し、および核爆発による損害評価のために第四予防診療センターの資料を開示するよう請願します。

我々は客観的にこの問題について述べております。ソ連共産党中央委に宛てた暗号電報に述べられた我々の立場は根本的なものです。これは我々の民族の立場です。ここからは一步も譲れません。

州党委書記局と調査委員会との会談をまとめると、軍事産業委員会は2月12日の事態に対し責任を取らなかった、と一言で言うことができます。(引用終わり)

調査委員会は、明確なことは何も言明せず、帰路についた。後に我々に調査委員会の結論が伝えられた。「追加の安全措置を採ること。爆弾設置深度を深くすること。地下核実験は継続される。2月12日に放出されたガスは不活性の希ガスで、人々の健康には影響しないものである。」

続けて、我々への指示 - 「説明活動を強化すること」。確かに、委員会は爆発の回数と爆発力を若干削減するよう提案した。これは初めて勝ち得た小さな勝利だった。残念ながら、委員会は中央から核実験場を指揮する人々で構成されていた。従って、我々は他の結論をあてにはしていなかった。しかし、初めて抗議が行われ、初めて客観性が認められた。

そもそも2月12日には何が起こったのか？コンクリート製気密栓が所定の場所になかったために、縦穴ピストン機が深いところで壊れた。建造中に困難な地質に遭遇し、栓が縦穴の高いところに設置されたせいで、確実な密封ができなかったのだ。爆発力は約100キロトンだった。割れ目が発生し、それが縦穴とつながり、放射性ガスの大量流出が発生した。

更に、爆発直後、線量モニタリングが中断されていた。二昼夜過ぎてようやくチャガンで放射能レベルの上昇が記録されたため、線量モニタリングが再開された。調査委員会は、これら全ての許しがたい事実を犯罪的な無責任さで隠し、違反はなかったという結論を発表した。誰も責任を取らなかった。

この状況をより詳細分析したのが、当時、カザフスタン共産党中央委員会書記だ

ったアサンバーエフ氏を長とするカザフ共和国調査委員会であった。アサンバーエフ氏は初めから爆発中止という固い姿勢をとっていた。

「対立」が始まり、それは2年半以上続いた。過去の犯罪的な遺産と業界の筋金入りの頑迷さを一つの極とし、民族の深い客観性と実験の即刻中止を求める合法的要求をもう一方の極とする対立である。

核実験場所長イリエンコ中將は、ローカルのテレビ、ラジオ、州新聞への出演、寄稿、労働者との面談などを余儀なくされた。

しかし中將の口からは真実は発せられなかった。彼は、希ガスまたは不活性ガスは完全に無害だという論を頑固に熱く擁護した。核実験中断、これは国の武装解除だと述べた。

これが巨大な影響力を持つ軍産共同体の公式的立場だった。

住民の立場はこうだ。「信じられない。第二のチェルノブイルを押しつけようとしている。私たちは生きたい。核実験場を閉鎖せよ!」。最初の間は、危険か危険でないかという軸を中心に全てが回っていた。クルチャートフ市の多くの住民は、私との面談で主張した。「私たちも私たちの子供も健康だ。核実験場で、10年、20年と住み続けても何ともない。「核の均衡」という神聖なバランスを壊してはならない。」

クルチャートフ市の住民について一言述べておこう。彼らの運命は核実験場と結びついている。実験場は彼らに仕事を与えている。その反対に立ち上がることは、自分が座る枝を刈り払うようなものだ。他の要因もある。核実験場の作業員には健康状態良好な人々が選抜されており、また、少なからず重要なことは、クルチャートフ市では医療、食料状況、生活施設は良好で、基本的に住宅問題も解決されていたことだ。

状況と意見の食い違いが続いたため、ある特定の人々がクルチャートフ市民と州の住民を対立させ始め、彼らの間に敵意の種を撒いた。核実験場から出てくる人々の跡がつけられているかのような悪評が徐々に広まった。

ある時、クルチャートフとセミパラチンスクを結ぶ幹線上で、核実験場の住民である将校とその家族が乗っている乗用車が何者かに止められ、身分証明書や現金が奪われ暴行を受けたという事件が起きた、と報告を受けた。この事件はクルチャートフ市民の間にパニックを引き起こした。

私は検察に本件を調査するよう命じた。判明したのは、身分証明書をなくした休暇中の将校が、それをごまかすためにそのような事件をでっち上げたということだった。

他にもこういう話がある。次のような公式情報が来た。「近くのソフホーズの型番K-700のトラクターに乗った二人の男性が、「ウルル」というバンを運転していた核実験場の地質学者を追い回した。」さすがに我々はこれは調査さえしなかった。明らかに馬鹿げている。巨大で小回りの利かないトラクターが自動車に追いつけるはずがない...

また次のようなことも起こった。セミパラチンスク公営事業部門の女性技師たちが夕方の当番をしていた。二人の男がやってきて身分証を提示し、検察で働く者だと述べた。「なぜ、貴方がたは核実験場では爆発の後配管が破裂したり通信が稼動しなくなると証言したのか。そのような誹謗に対して貴方がたは罪に問われますよ」。彼らは厳しい口調でこう詰め寄り、相応の書類を要求した。驚いた女性は「私は何も証言していません...」と弁明を始め、証明書を渡した。後で判ったことだが、これらの人々は検察とは何の関係もなく、そのときの書類は州の行政を非難するための文書として用いられた。

どれだけ状況が灼熱していたかを伝えるために、また、その先鋭化した状況のため人々が恐喝にまで走ったということを示すために、このような事例を語らせていただいた。我々は莫大な努力により対立する両者の間に信頼を回復するのに成功した。

核実験場を擁護する人々は、何よりも先ず、州行政の首脳陣を否定する活動を嵐のように繰り広げた。

我々は地域を指導する能力がないと非難された。核実験場を巡る状況はおおよそありえないレベルに達した。まるで我々が他の社会的問題から人々の目をそらすために核実験に関するキャンペーンを繰り広げているような言われ方をされるほどであった。

さらに州首脳はソ連国家を一方的な武装解除に向かわせ、そのため核の均衡が危機に瀕したという全く根拠のない非難もされた。ネバダで行われた核実験回数と、セミパラチンスクでの回数を示し、いかにわが国が米国より遅れているかを証明しようとする試みもあった。

イリエンコ所長と私が知り合ったのは1987年春、核実験場を私が始めて訪問した時だった。すぐに彼から自分の業務において高い能力を有する人物という印象を受けた。他の印象は持ち得るはずがなかった。イリエンコ所長は核実験場を、決して軽い運命どころではなく、自分の子供とみなしていた。まさしく文字通りに。自らの目でこのユニークな最新施設を見たものだけが、イリエンコ所長が来る日も来る日も、

10年以上担ってきたその莫大な責任を理解できる。これらの年月を通じ、彼は自分に規律、実行力、正確性、といった特質を磨き上げた。そして、部下に対しても厳格に同じ性質を要求した。核実験場に勤務する者に他にやりようがあったであろうか…。

核実験場に対し展開された闘いを、イリエンコ所長は個人的な悲劇として認識した。それゆえに、彼は核実験場擁護者たちが展開した嵐のようなキャンペーンのリーダーの一人となった。

しかしイリエンコ所長の2月12日の事件に関する公式声明は、擁護になったどころか、言わば火に油を注ぐようなことになった。人々は所長を信じなかった。労働者たちはますます声高に核実験中止の要求を叫んだ。

国内には民主主義とグラスノスチ（透明性）の力が充満し、社会は法治国家に変わろうとしていた。この状況が始められた闘いの正当性を確信させていた。我々は、オルジャス・スレイメーノフの主唱により発足した「ネバダ - セミパラチンスク」運動から強力な支援を得た。この運動は、目的が人々の願望に応じてたために、人々の間で急速に認知度を高めていた。核のない世界、核実験反対である。

ちょうどその時期にソ連人民代議員選挙の選挙運動が行われた。我々の州では、農村部の一つの選挙区が空白になった。必要とされる得票数を得た立候補者がいなかったのだ。しかしアルマティで立候補したスレイメーノフは問題にぶつかった。私にナザルバーエフ共和国閣僚会議議長から電話があった。スレイメーノフ氏を巡る困難な状況について簡単に説明があり、彼をソ連人民代議員候補としてセミパラチンスク州から推すことに対し我々の支援が要請された。

「スレイメーノフはあなたを助ける。彼は核実験反対運動の素晴らしい支援者となるだろう」と、ナザルバーエフ氏は言った。次の日、同じことを依頼する電話がコルビン氏からあった。私に明らかだったのは、スレイメーノフ氏が、共和国の一連の州から候補者になるよう提案を受けており、その中には我々の州の労働組合もあったことだった。彼は、セミパラチンスク州を選び、大きな票を得てソ連人民代議員に選任された。

私は、ソ連共産党中央委書記長に核実験場を巡る状況について報告するのを自分の義務とみなしていた。その時期、ソ連共産党中央委の4月総会（1989年）が開催され、私自身も参加した。モスクワに到着するとすぐ、私はゴルバチョフ書記長との面談の申し込み手続きを取った。

総会の後、ゴルバチョフ書記長は面談申込をしていた6人の共和国および州レベルの第一書記と一緒に招き入れた。会談はペレストロイカの進捗状況や各地の状況や問題に関するものでほぼ3時間続いた。その最後に、私に向かいゴルバチョフ書記長はこう語った。

「貴方からの現地の状況の顛末に関する情報を最後まで読み通しました。この問題は中央委政治局に提議します。その会議に貴方を召喚するので、そこで話していただきたい。」

私は考えた。政治局会議がいつ開催されるのかもわからないし、そこで我々の問題が討議されるかどうかさえ怪しい。

「書記長、少々お時間を頂くことにして、今、話させていたいただきたいと思います。」と、彼に言った。

彼は同意してくれた。我々二人だけが残り、私は核実験の状況と周辺住民の健康と環境に対する影響について知っていること全てを述べた。

ゴルバチョフ書記長は、私の話を口を挟まずに最後まで聞いた後、言った。

「この問題を検討します」

以後の事態は次のような展開を見せた。

1989年4月21日、核実験場でまたも爆発力50キロトンの爆発が轟いた。これが核実験中止と核実験場閉鎖を求め盛り上がっていた運動に対する、軍産共同体の答えだった。この実験により実験は継続するというその硬い意思を表明したのだ。全能の官庁が我々に「これからはせいぜい気を付けるように」と書かれた挑戦状を投げつけたかのようだった。

その頃、私はモスクワで会議に出席していた。

モスクワに到着の翌日、夜半近くホテル「オクチャープリスカヤ」の私の部屋の電話のベルが鳴った。それはソ連共産党中央委書記の防衛問題担当のバクラーノフ氏からの電話だった。彼から面会を要請された。ちょうど私の方も、彼に面会を申し入れるつもりだった。我々は翌日会う約束をした。

しかしバクラーノフ氏と会う前に、セミパラチンスク核実験場に関する中央委政治局決議案を読んだ。このような決議案が準備されていることについては、私も知っていた。私にはこれは状況が明確になる希望と思えた。

セミパラチンスク核実験場に関する中央委政治局決議の準備段階においては、我々

の意見は考慮されなかった。別の言い方をすれば、我々はこの準備には参加していなかった。この文書に、カザフスタン共産党中央委第一書記コルビンは承認したが、カザフ共和国閣僚会議議長ナザルバーエフは承認を拒否し、被災民の健康診断に関する項目を追加し、その後セミパラチンスクで広域学術会議を開催するよう要求した。彼の確固たる姿勢のお陰でこの項目が決議案に含まれた。

しかし、私を深い絶望が待っていた。決議案は、義務化の文言がなかった。そこには、一般的な政治的性格の、「住人の間で説明活動を強化する」のようなお決まりの常套フレーズが散りばめられているだけで、核爆発中止、州への支援、補償などの主要な問題については触れられていなかった。唯一明記されたのは、ナザルバーエフ氏の住民健康診断とセミパラチンスクでの広域学術会議に関する貴重な提案のみであった。

この法案に対するこれら私の思いをバクラーノフ氏との面談において口にした。彼はもう修正には遅すぎると言った。決議案は政治局員全員の承認サインを受け、書記長の署名を待つばかりだと。その通りに間もなく署名された。

この間、軍産共同体はその意図を守り続けた。時が過ぎた、多くの日、週、月が過ぎた。爆発は次々と鳴り響いていた。年に7回の実験があった。しかし、社会的抗議運動の盛り上がりは我々の州だけでなく、隣のカラガンダ州、パプロダール州や他の地域も巻き込んだので、軍産共同体はその厳しい姿勢を転換せざるを得なくなった。実験の回数が計画されていた18回でなく、7回になったのだ。7回の実験は制限された爆発力のものであった。それ以外の大きな爆発力で計画されていた11回の実験は行われなかった。

1989年9月末、ソ連共産党中央委治安部門責任者から特別回線で電話があった。セミパラチンスク核実験場に関する決議案が完成したとのことだった。また、そこで規定される実験中止開始期日は1995年1月1日だとも言われた。決議案には全員が同意し、承認を待っている。これが我々の請願と提案に対する回答であった。

この通報に私はショックを受けた。私はまとわりつく不安と精神的動揺から我ここにあらずといった状態に陥った。背筋に強力な一撃を受けたようだった…。まだ丸5年も核爆発とは！その間に、住民や、自然や、多くの被害に苦しみぬいた我々の地域はどうなってしまうのか？この期間について市民にどう言えばよいのか。この無慈悲な決定を、この「中央」の決定を、どう正当化できるというのか。革新的で人間的な社会主義を建設するというスローガンと、この決議はどう符合するのか？実際、それ

はペレストロイカの人道的目的を本質的に否定していた。

後に決議案の内容を知り、セミパラチンスクにおける核実験の結果苦しめられた人々の運命と「中央」が如何に遠く離れているか、私は決定的に確認するにいたった。決議案の中には、住民への補償については一行も無かった。毎年、14～18回もの爆発が行われているというのに。

州の書記局員を集め協議を始めた。彼らのサポートのおかげで、また核実験場問題についての考えの完全な一致のおかげで、私の考えは正当なものであり、我々指導者は如何なる困難な状況においても良心に反して - つまり市民の利益に反して - 行動する権利はないという確信を一層強めることができた。

ソ連共産党中央委からの電話の翌日、9月23日にゴルバチョフ書記長個人宛てに以下のような手紙を送った。

「ソ連共産党中央委 同志ゴルバチョフ殿

尊敬するゴルバチョフ書記長

私はソ連共産党中央委にカザフ共和国セミパラチンスク州での核実験継続に関連し以下の状況を報告する義務があると考えます。

知られているように、セミパラチンスク地域の核実験場は40年以上稼動しています。この間、同州は核兵器開発と防衛力強化に必要な支援を提供してまいりました。

以前は核実験場の問題は一連の周知の理由により取り上げられませんでした。今日、状況は変わっています。我々はますます市民に情報を公開するようになり、物事を隠し立てしなくなりました。

本年7月17 - 19日付けのソ連共産党中央委政治局決議に則り、学術会議が開催され「カザフ共和国セミパラチンスク市およびセミパラチンスク州住民の健康と環境状況」というテーマが審議されました。

会議では、以前は市民や現地官庁に知られていなかった状況が多く明らかになりました。

1949年から63年までの14年間と1965年に、地上および空中核実験が数百回行われたことにより隣接地域の住民は放射線の影響を被り、それにより大きな健康被害を受けました。

被ばくした人々からすでに第二世代の子供たちが産まれており、その世代は免疫機能の低下により疾病率が高まっていることが確認されています。

州全体として、特に核実験場に隣接する地域では、死亡率と子供と母親の疾病率の上昇が続いております。疾病率、先天性奇形、知的障害児の数が増えています。

地下核爆発を官公庁は無害と見なしておりますが、慢性病の悪化とストレスを引き起こしています。実験直後から、住民は頭痛、動悸、睡眠不足、疲れ、不安感増強を訴え、医療機関にかかる住民が急増しているのです。

特に我々を不安にさせるのは、地下核爆発により住民の間で増加している神経症です。これは明らかに考慮しない訳にはいきません。精神の健康は、健康な人々が生まれ育つ基本です。

カザフスタンの人民に知恵を与え民族的な聖地となった大地に核実験場は配置されています。

核実験は、耐震性を考慮せず建設されたセミパラチンスク市に爆発力によるマグニチュード3～5までの地震を引き起こしています。核実験がある度に、上下水道網が破壊され、住宅にヒビが入り、村落や家畜に給水している数百の井戸の水が枯れます。

これらの全てについて省庁は知っております。しかし、彼らは核実験場の発展には熱心に取り組みますが、住民を心配し支援の手を差し出すことは決してありません。40年間を通じ、住民のための社会施設は一つも建設されませんでした。人々の健康や州の経済にもたらされた被害に対し何ら補償もありませんでした。

これら全てが国民に侮辱されているという感覚を生むのです。

本年、州党委に核実験場閉鎖を要求する三千を超える手紙や電報や請願書が寄せられました。

実験場即時閉鎖は、セミパラチンスク州、東カザフスタン州、パプロダール州、カラガンダ州、アルマティ市、ロシア連邦アルタイ地方を対象に開かれた広域学術会議の参加者も声を一つにして表明しています：

こういった状況が住民の社会的抗議の爆発を呼び起こしています。

しかし官庁は市民の声に耳を貸そうとしません。彼らは前と同様に核実験場を軍事施設として扱っています。そうしている間にこの問題は緊急を要する国家的問題になっていました。

重職にある方々の「クリーンな核実験場」、「不活性ガス」、「放射線安全管理」という発言は、全て官庁の利益の擁護です。核実験場がクリーンだったことは決してなく、そうなるはずもありません。

27年間の地下爆発により地殻は大きな変形を受けました。山塊の地割れ増加を理由とした実験場移設の必要性については、新敷地の選定が困難であるという状況下ではありますが、既に1986年に問題視されています。

残念ながら、ソ連共産党中央委の関係部局は官庁の立場を堅持し、州政府の参加なしで、党首脳のための資料を準備しました。我々の参加なしに、セミパラチンスク核実験場における核実験を継続する方針をうたう決議案が準備されたことが、我々の知るところとなりました。

州党委は、近隣に大きな心配の種があるという辛い事実を知った住民の要求を根拠あるものと見なしています。住民が自らの将来と社会正義に対する信頼をもてるようにするためにも、セミパラチンスク州の複雑化した状況の正常化措置を採らねばなりません。

住民は40年にわたる核実験場の活動によりもたらされた被害に対する補償を求めています。この要求は極めて客観的かつ人間的で、実現されれば、社会的緊張の緩和に役立つでしょう。

尊敬するゴルバチョフ書記長、以上述べさせていただいたセミパラチンスク州に於ける状況について、貴殿の聡明さと理解力に委ねます。

9月28日、この請願にゴルバチョフ書記長の承認が押され、次のように記された。「同志ザイコフへ、同志ヤゾフへ、同志バクラーノフへ」。

この承認について私に直ぐに連絡があった。私は州党委総務部を通じこの手紙についての状況を把握していた。

ザイコフ氏は、当時モスクワ市委員会の第一書記で、ソ連共産党中央委書記を兼任し、防衛分野の問題を担当していた。私は直ちに彼に会いに行くことに決めた。我々の会談はザイコフ氏の執務室で行われ、一時間以上続いた。

ザイコフは相手を理解できる人物で、私に好印象を残した。彼は防衛分野を35年間担当していると言った。ザイコフはモスクワの諸問題、特に彼を悩ませている諸問題について話し始めた。

「今」、彼は言った、「肉は2日分しか残っていない」

「毎週、私自身が荷下ろしを指示している。」

だんだん、会話は佳境に入り私に必要なテーマに切り変わっていった。私は、核実験場について、実験が各家族に、そして国民経済と環境にもたらした災厄について、

知っていたことを全て話した。ザイコフは決議案を再読し、実験停止開始期日1995年1月1日は先過ぎることに同意した。彼は折衷案を見だし、双方を満足させようとしているように感じられた。彼は核実験場閉鎖の時期を1995年1月1日から1993年1月1日に前倒しする提案をした。私はより近い時期に固執した。

「1993年1月までの期間が最短だ。新しい場所に対する準備作業が必要です。」と、ザイコフは私を説得した。

「そうであれば」と私は言った、「当面の期間、セミパラチンスク実験場ではモラトリウムを表明しなければならないのではないのでしょうか」

「そんなことをしてはいけません」とザイコフは答えた。「すでに行われた一年半のモラトリウムは私の発案でした」

当時、米国では強力な核兵器が実験され、我々は米国に大きく遅れていた。

しかし、彼はこう約束した。

「もしモスクワの状況が許すなら、ノーバヤ・ゼムリヤ（訳注：北極圏の島、セミパラチンスクに並ぶ主要な核実験場）に赴いてから、セミパラチンスクに行きます。」

お互いの信頼に基づいた会話は、ザイコフ氏が核実験場に於ける実験の中止開始期日を二年前倒しにすることに合意したことで終わった。つまり、1993年1月1日までだ。しかし、この期日も我々にとっては容認できるものでなかった。我々の立場は核爆発の即時停止だった。しかし、ここで達成したことは、最終的な成功の始まりであった。

10月11日、セミパラチンスクに帰着後、私はザイコフ氏に手紙を出すことに決めた。ザイコフ氏に、執拗さに気を悪くしないようお願いし、我々の姿勢を再度述べた。つまり、「核実験場における実験中止の開始時期1993年は全く受け入れられず、核実験場は即時閉鎖されなければならない」と。

以後、事態は緊迫した進展をみせた。軍産共同体が強く反対した。しかしザイコフ氏は羨むほどの頑固さを示し自分の姿勢を貫いた。

これは我々に翼を与えるかのような重要な勝利だった。以前の決議案が棚上げされ、新案の準備が始まったが、我々の主張によりセミパラチンスク州の参加の下に進められたことは、特筆すべきことである。州により編成されたグループのメンバーとなったのは、当時の州党委産業輸送部担当ベレジン、党クルチャートフ鉱山委第一書記サフラーノフ、州保健課長トクターロフ、州商業管理部長カラバーエフだった。二ヶ月

以上、決議案中の40年間に及ぶ核実験に起因する住民の健康と国民経済全体への損害に対する補償の項目について作業した。補償として供給されるべき項目としてあげられたのは、金属圧延、配管と医療施設、薬剤、建設設備、製作機械、食糧であった。

ザイコフ氏の圧力の下で、軍産共同体は核実験場の閉鎖時期について譲歩し1995年1月1日でなく二年先倒しの1993年1月1日となった。しかしそれ以上は、軍産共同体は硬く自分の立場を固守し一日たりとも譲る気配は無かった。我々の方も即時実験中止に固執し、同様に堅固に立場を維持した。更に、決議案に我々独自の意見を書き込んだ。両者ともこうして合意には至らず、決議は準備された形では光を見るところは思われなかった。しかし我々の努力が跡形も無く消えてしまった訳ではない。この決議に基づきソ連閣僚会議命令が採択されたのだ。これについては、別途「社会的刷新への道」の章で語らせていただく。

対立は新しい段階に入った。

産軍共同体とクルチャートフ市の住民の側からの攻撃対象になったのは、オルジャス・スレイメーノフと私だった。しかしスレイメーノフ氏は芸術家であり、自由人であった。ゆえにアルマティ又はモスクワに住み、連日ストレスを受ける状況からは若干距離をおいていた。私の方はより困難だった。誹謗中傷の嵐を受け、我慢するか、跳ね返すかしなければならなかった。

核実験場の首脳とその専門家たちにより開始され、国の上層部からの支援を受けたキャンペーンからの圧力にはくじけそうになることもあった。強力な官庁を相手に、いつ押しつぶされ踏み潰されるか判らないことを理解し、無力感を感じることもままあった。絶望感と孤独感に襲われた時もあった。それでも、後退しようとしたという記憶はない。私は固い信念に支えられていた。この過酷な対立を生き抜くか、州党委第一書記の職から去るか、どちらかだと腹を決めていた。自分の将来におびえることはなかった。何とか冶金技師として生産現場に職を見つけることはできると思っていた。

州執行委第一副議長ロムテフはこの圧力を「将軍の謀議」と名付けていた。クルチャートフ市執行委議長フィリモーノフからは、一度、こう聞かれたことがある。

「ボズターエフ書記、一体どうしてモスクワに貴方を支援する人がいるのですか？」

これらの全てが心理に影響した。不快な思考によって強度の不眠症に襲われたこともあった。しかし朝起き上がり、私の執務室に入り、仕事の渦巻きにどっぷり漬かる

と、全ての憂鬱は吹き飛んだ。精神的な理解を表わしてくれたのが、州執行委議長エレメンコだ。この、^{こわもて}強面の口数の少ない人物には、全てを理解する善良な心が宿っていた。困難な日々、巨大官庁からの次々の圧力に耐えきれないように思えたときも、エレメンコ氏は私の精神的支えとなってくれた。我々は長々と話し込み、今後の活動について協議したものだ。

対立期間の最初の年、最も緊張に満ちていた1989年も終わりに近づいていた。原子力関係者の街クルチャートフには嵐が吹き荒れていた。これは理解できる状況だ。核実験場の閉鎖は、彼らにとって将来の不安、運命の急変を意味していたのだ。これが多くのクルチャートフ市民の反核運動についての認識だった。このエゴイズムは、特定の個人らにたきつけられ、中央のマスコミの往々にして日和見的な記事、「中央」の様々な政治的に独立した委員会による客観的でない論調などにも煽られ、最高潮に達していた。

11月初め、クルチャートフ市において州首脳の行為に対する抗議ミーティングが開催された。その総括結論としてソ連共産党最高会議幹部会宛てに電報が送信された。以下にその内容を記す。

「モスクワ、クレムリン、ソ連最高会議幹部会に。

ソ連人民代議員O・スレイメーノフによる人民代議委員大会に於ける民衆扇動的な演説と露骨な誹謗中傷には極めて憤慨する。セミパラチンスク州党委が核実験場と政府に関し行っている、放埒なごまかしのキャンペーンにも憤慨する。これら全てにより、現地住民が核実験都市の住民に対し過激な攻撃的行為をするに至った。これに対し誰が責任あるのかを解明するために、O・スレイメーノフと州首脳により行われた全ての事実の公開調査を行うため、最高会議の全権を持つ専門調査委員会を組織し、事実を確認し、核実験場を巡る状況を正常化するよう要求する。K・ボズターエフとO・スレイメーノフが追求している目的の清廉潔白さは疑わしく、人民代議員としての両名に対する我々の不信を表明し、最高会議両院会議においてこの電文とルィシコフ首相に対するクルチャートフ市住民と労働者評議会からの書簡を公表するよう求める。」

私はこれらのあからさまな悪意の攻撃に対し反応せずにはいられなかった。

関係する中央官庁に、私は自分の抗議を送りつけた。国防省第十二政治局長ソロチーロフ中將がやって来た。しかし、予想通り、客観的な討議はなかった。

クルチャートフ市民と私との苦渋に満ちた会談が行われた。直接的な会話が我々の間の距離を縮め、相互理解が見いだせた。

上述のブカートフ氏を長とする調査委員会は、言わば最初の「つばめ」であり、他の多数の調査委員会が我々の州にかかわる道を開いていた。それぞれの調査委員会に相応の注意を払う必要があり、多数の所員が日常業務を外れ動員された。しかしながら、多くの調査委員会の仕事効率は高くはなかった。彼らは来ては去ってだけで、後に何ら目覚ましい痕跡を残さなかった。全て以前のままだった。被災地域の住民の間での精神的・心理的な状況が、益々緊張を高めていったことを除いては。

様々な調査委員会の中で最も強行な姿勢を見せたのが、ウクライナの作家兼医師であるシチェルバクソ連人民代議員が長を司るソ連邦最高会議調査委員会だった。同委員会はソ連最高会議の環境及び天然資源合理的利用委員長サリーコフの指示により、セミパラチンスクに派遣された。サリーコフ氏はセミパラチンスク核実験場における核実験中止を求める固い姿勢を堅持していた。私は個人的にシチェルバク氏にセミパラチンスクに来てもらうよう依頼した。彼は最高会議の核環境小委員長でもあった。彼自身チェルノブイリ事故を体験しており、セミパラチンスクの問題を良く理解し心から支援してくれていた。当時、彼は「チェルノブイリ」というタイトルの本を執筆していた。

どの調査委員会の調査ルートもほぼ次の通りだった。核実験場、その影響下の地域の村と町、クルチャートフ市、セミパラチンスク市…。調査委員会メンバーがその道中で得た印象については我々は判定する立場にない。村やアウル（小村）が社会的に遅れており、通常的生活や成人、子供を含む病人のための基本条件がないことを見て驚いた人もいたことだろう。

シチェルバク氏の調査委員会だけが、ほぼ唯一、核実験場を巡る困難な状況を客観的に評価した。ユーリ・シチェルバク氏の名誉にかけて、彼は自分の結論に於いて極めて誠実で正直で、40年間の長きに渡る核実験の受難の地域の住民が政府から本質的に忘れられ、国家の保護の手が差し伸べられなかったことについての憤懣を隠すこともなかった。この調査結果について、シチェルバク氏は最高会議の環境委員会と防衛委員会の合同会議で堂々と報告した。

最大でまたおそらく最も権威のあった調査委員会は、軍事産業委員会を率いていたソ連副首相ペロウーソフが率いる委員会だった。我々は、ペロウーソフが複雑・困難

化した状況を深く分析し、事態を客観的に評価することに大きな希望を抱いた。

ベロウソフ調査委員会はセミパラチンスクへの途上、アルマティに立ち寄り、カザフスタン共産党中央委第一書記ナザルバーエフと会談した。

カザフスタン共産党第二書記アヌフリーエフは、後に私にこの会談について語ってくれた。会談に緊張したトーンを与えたのはソ連軍参謀本部長モイセーエフだった。彼はこう表明した。「州党委とその第一書記ボズターエフは意図的に人民を動揺させ、核実験場周辺にマイナスの世論を形成しようとしています。」

アヌフリーエフは、かなり厳しい口調で、彼に反論した。

「罪は、州党委でもボズターエフでもなく、軍事産業の官庁にある。」

モイセーエフはかっとなり、

「中央委第二書記殿、貴方はよくそんな風に言えますな。核実験場、これは祖国の盾で、それを動揺させるのは誰にも許されるものではないのですよ。」と言った。

「私は中央委第二書記だからこそ、表明したのだ。」とアヌフリーエフ。

ナザルバーエフが割って入った。

「セミパラチンスク核実験場での40年間の核実験中に起こったことは人間性に反するものです。セミパラチンスクに行かれて、市民と会われ、自ら確認してください。」

この会談後、ナザルバーエフ氏は私に電話し、こう言った：

「貴方のところにベロウソフ調査委員会が行く。彼と住民との会談を設定しなければならない。」

私が見るところ、モイセーエフ氏はこの我々の土地における会談後、自分の観点を変えたようだ。

我々は軍用ヘリコプターで核実験場の実験区画上空を飛んでいた。

飛行中、イリエンコ所長が施設の配置についてコメントした。それらについて説明しながら、所長は熱っぽくまた仰々しく核実験場の利益を擁護し、その稼動を延長する必要性を納得させようとした。突然、モイセーエフが彼を遮った。

「黙れ！この核実験場での核実験は中止しなければならない！」

一体何が参謀本部長を動かしこうもその姿勢を急変させたのか？私にはわかる。彼が全ての状況を深くまた客観的に理解したからである。おそらく、ナザルバーエフ氏の公平な発言が影響を与え、さらにカザフスタン共産党中央委や初めてのセミパラチンスクの様々な印象によって、多くの問題について考え直すことを余儀なくされたの

であろう。

とにかく、モイセーエフ氏の気持ちは既にまったく変わっていた。モイセーエフ氏のこの姿勢はその後も変わらなかったと思う。

数日間、調査委員会は過密日程をこなした。我々は、ペロウーソフ氏および調査委員と州の医師たちとの会談を設定した。調査委員会は各分野の代議員を伴う大人数の編成で、各労働組合や各町村を訪問した。

ペロウーソフはこの調査出張中に核実験場を巡り複雑困難化している状況の深刻さを自分の目で確認した。住民たちは公然と核実験場閉鎖を彼に要求していた。

社会・政治センターで、ペロウーソフ氏と、セミパラチンスク及び核実験場に隣接する地域住民代表との会談が行われた。人民が大勢集まり、750席のホールでは全員を収容できず、人々は前庭、階段踊り場を埋め、入口前に大群が出来、アンプが設置された。

全体会議で私はペロウーソフ氏の横に座った。彼が隣に座っていたモイセーエフ氏にささやくのを聞いた：

「よくできたショーだ。全てが事前に準備され、そして何をどう主張すべきかまで練習している。」

モイセーエフ氏は黙っていた。

ペロウーソフ氏は少なからぬ柔軟性を発揮し、磨き抜かれた芸で別人に変わった。

集まった人々を前に、彼は感情を込めて約束した。

「核実験場についての諸問題は解決されるでしょう。私は、具体的な解決案をもって1990年の3月までにはここに帰ってきます。皆さん方は満足されるでしょう。私を信じてください。」

それは1989年11月だった。集会から解散した人々は少し安堵していた。多くの人がソ連政府の役人を信じた。ペロウーソフ氏が演台に立っている間、彼は誠実からはほど遠く彼の心の中は全く別の企てで占められていたことを、あの約束を耳にした人々は知る由もなかった……。

ペロウーソフ氏は約束をしながら、住民の説得に成功することを期待していた。

翌日朝、調査委員会作業の総括のための州党委と州執行委の合同会議においてペロウーソフ軍事産業委員長は全く別の姿を示した。住民の怒りを前に危険を感じ、余儀なく被っていた有徳者の仮面をかなぐり捨て、彼は自分の真の顔を見せたのだ。

客観的な分析などに煩わされることなく、ペロウソフ氏は最初の言葉から攻撃に入った。

いつものように、彼は自信を持って語り、発言者の話に割って入った。彼の声には金属の響きがした。何人かの政治局員と執行委員は、当初、この怒濤のような急襲に茫然自失状態となった。

私は落ち着こうと努めた。私にとって、ペロウソフ氏の振る舞いは予想外なものではなかった。

対立期間を通じて、私はペロウソフ氏を良く研究していた。彼の生き生きした風采は信頼感を与える。自分の力を確信している時には、彼はオープンで好意を抱かせさえする。しかし、誰かが彼に反対したり別の立場を表明したりしようものなら、軍事産業委員長として、瞬時に顔色を変える。反対意見は我慢ならないのだ。これが彼のいつもの心理状態だった。私はペロウソフ氏と1989年夏に初めて会った時、これについて既に確信していた。

その夏、ペロウソフ副首相と核実験場の問題について実際に会って話してみようと思った。モスクワへの出張の際、副首相との面談を申し入れた。

ペロウソフ氏はクレムリンに執務室を構えていた。私が入ったとき、彼は元気に椅子から立ち上がり、絨毯の敷かれた広い空間をこちらに歩み寄って迎えてくれた。私に手を差し出そうとしながら、その顔は微笑みに輝いていたが、眼鏡のガラス越しの視線は警戒心に満ち冷たく、そぐわないものであった。

彼は私を面会者用の椅子に座らせると直ぐに会話を始めた。

「我々には核の均衡が必要だ」とペロウソフ副首相は言った。「NATOの軍事力も忘れてはなりません。今、我々は核兵器の開発と実験に於いて米国から大きく遅れている。もしセミパラチンスク核実験場での爆発が中断すると、国家が武装解除されたようになってしまうのですよ。」

彼は延々と状況の全体像について語った。

私は彼に反論し、当時私が知るところであった論拠を引き合いに出した。私の固い姿勢を知ると、彼は直ぐに変化した。彼の瞳の中の警戒心が冷たい鋼鉄に変わった。ついさっきまでのお人好しさは痕跡すら残っていなかった。まるで我々の間に一瞬にして亀裂が入ったかのようだった。

私は心に苦いものを感じながらクレムリンの軍事産業委員長の部屋を後にした。

我々の立場は両極に位置することが確認され、状況には希望が見いだせなかった。残念ながら、私の予感はずしかなかった。この相互の無理解、時には公然たる対立は1991年2月、ペロウソフ氏が軍事産業委員長のポストから去る日まで続いた。

州行政のトップとして私は、対立期間中、一度ならずペロウソフの所に赴き、彼の執務室で何度も議論した。中央統制システムの精神で養成された彼は、自分の考えと自分の言葉の正当性を固く信じており、全く取り付く島もなく、反対意見は全く受け入れなかった。私は報告する度に、抗弁する度に、敵意を持って扱われた。我々の相互の不快感は最終的には公然たる対立に至った。

私の方も、彼の全ての言葉を敵意を持って受け止めた。いつだったか、彼の部屋での会談に、当時のカザフスタン共産党中央委書記のカラマーノフ氏とアサンバーエフが同席していた。その時も私とペロウソフ氏の間で新たな小競り合いがあった。

その直後、アルマティにおいて、「ペロウソフ氏から私に電話があり、ボズターエフを召喚し反省を求め、頭を冷やさせるよう要請されたよ」とカラマーノフ氏は私に語った。

さて、無事に自分の調査委員会を率いてモスクワへの途についたペロウソフ氏は、住民にザル一杯の約束を、そして私には不吉な不明確さを残していった。全ての彼の行動がまるで警告を与えているようだった。「手遅れにならないうちにブレーキを踏め」と。

約束した3月までも、その後にも、ペロウソフ氏が州に来ることはなかった。彼の計算は単純で、彼はそれを隠そうともしなかった。時間が経てば、州首脳に扇動された市民も落ち着き、そうしたら彼らとも話ができるようになるだろう、と。しかし、そんな中、彼はモスクワから私に電話して言った。「年末まで核実験場での爆発は行わない。」

彼が来なかった原因は我々には明らかだった。彼は爆発の継続を望んだのに、我々は元々の即時中止を求める姿勢を維持したからだ。

1990年4月、ソ連人民代議員大会の会期中、私は彼に歩きながら聞いた。

「ペロウソフさん、私どものところにいらっしゃるんですか？」

彼は鋭く答えた

「何を持ってだ？軍縮プログラムを携えてか？」

軍事産業委員長は、市民と会うための十分な正当化手段を持たなかったのだ。

軍事産業委員長職から去る直前、1991年初めにはペロウソフ氏は別人になっていた。いつだったか、彼は言った。「急いでください、私がまだ貴方を何とかお手伝いできるように」。まさに彼の支援のおかげで、国防省の反対にも拘わらず、我々は核実験場の敷地内に炭鉱「ユビレイノエ」を開発する許可を得た。ペロウソフ氏は対立の無意味さを理解してくれたようだった。

私は核実験場に関わる多くの高官たちと会わねばならなかった。もう一つ、そのような面会について語らせていただく。中型機械製作省（後に原子力省）大臣リャーベフとの面会である。彼は核実験場の主人の一人であったと言ってよいであろう。実際、リャーベフ氏の見方に左右されていた問題は多かった。リャーベフ氏は執務室内で二人の部下と共に私に会った。既に習慣となっていたことだが、私は核実験場を巡る状況についての話から始めた。リャーベフ氏は荒っぽく私を遮った。

「君たちの市民の過去には私は興味がない。今日の核実験場はクリーンだ。」

「それなら」と私は言った。「我々にはお話しすることはございません。」リャーベフ氏の下を深い落胆の念を抱きつつ辞した。

その後、リャーベフ氏はソ連邦副首相に任命された。我々の間にはずっと冷たい関係が残った。共産党中央委総会や人民代議員大会で偶然同席した場合も我々はお互いに気付かないようなふりをした。

これら軍産共同体の重鎮ペロウソフ氏とリャーベフ氏の硬直した姿勢は通り抜けることが出来ない石の壁のようであった。私の心の中にこの難攻不落の障壁を突破できるだろうか、という疑念と不安が呼び起こされることもあった。

少し先の話なのだが、我々には他の勢力の強力な支援があったことには触れておかねばならない。

核実験中止と核実験場閉鎖を積極的に支援してくれた人々の一人に、ソ連科学アカデミー副会長ベリホフがいた。この問題に関する彼の断固とした見解は我々にとって大きな価値のあるものであった。ベリホフ副会長は世界的な原子物理学者で、大きな国際的権威であった。

彼は2度セミパラチンスクに足を運び、核実験場を訪問し、核実験場付近の市町村を訪れた。その訪問を通じ、彼は即時実験停止という確固とした意見を持つにいたった。

立派な学識者は反核運動の感情的な盛り上がりには左右されることは当然のことながらなかった。彼の結論は、事実のみからなる - 決して表面的な事実ではない - 論理に基づいていた。具体的な知識と行動の人であるベリホフ氏は、科学的な先見の明を持っていたのだ。

核実験場を訪問した後、ベリホフ氏は特別の請願書を携え、ゴルバチョフの所に赴いた。請願書にはセミパラチンスク核実験場における核実験中止の必要性が科学的に根拠付けられていた。私は、ベリホフ氏とは頻繁に会い、電話で話し、常に彼に助言を求めていた。

ベリホフ氏は、今日においても、核実験場閉鎖の後に発生した新しい課題の解決に少なからぬ尽力をしてくださっている。

緊迫した反核運動の期間を通じて、作家兼評論家であり世界各国でその名が知られるソ連平和擁護委員長ボロビクの声が甲高く鳴り響いていた。

ボロビク委員長もまた、我々の所に来て、核実験場とその周辺の人々の苦しみを人づてでなく直接目の当たりにした人である。テレビやラジオを通じ、国中がボロビク氏のソ連最高会議に於ける熱い演説を聴いた。ボロビク氏は妥協することなく核実験場閉鎖を呼びかけた。州にやってきた彼は、具体的で実践的な支援を申し出た。彼の協力により、小児治療リハビリセンターに最新の設備や薬品が提供された。

ボロビク氏から、中央のテレビ出演後、軍産共同体から大きな圧力が加かったと聞いたこともある。

このお二方やその他多くの影響力を持つ人々からの支援が、その権威と客観性により、緊迫し複雑に諸事情の絡み合った反核運動に於いて大きな役割を演じたことに疑いの余地はない。

その頃、カザフスタンのモスクワに於ける常任代表は、セリクボルシン・アブジリジンだった。アブジリジンは、セミパラチンスク出身で、アクサト郡に生まれた。彼は心の底からできるだけ早い核実験中止を願っており、中央官庁において我々の利益を熱く主張していた。私も一度ならず様々な問題を彼の所に持ち込んだが、いつもいつも理解を示してくれた。

対立の最初の年 1989 年は過去となった。非常に困難ではあっても、成功は十分に実感できていた。その年に軍産共同体によって計画されていた 18 回の核実験のうち、実施されたのは 7 回だけだった。しかし、まだ将来の不明確さは残った。199

0年に何が我々を待っているのか、我々には知る由もなかった。

1990年、軍産共同体はセミパラチンスク核実験場で9回の実験を計画していた。すなわち、前途には不透明性、緊迫した闘いが待ちかまえているということだった。

1月にベロウソフ氏は電話で第一四半期に実験は無いだろうと言った。これで少しは気が軽くなったが、緊迫した問題の解決にはなっていない。

当時、州首脳の一連の懸案事項の中に、一見大したことはなさそうだが繊細なニュアンスをもつ出来事があった。

これは「中央」からの個別の複数の電話で、電話をかけてきた人々はかなり不愉快な事態が私を待っているようなコメントを残した。それらの人々は、モスクワで私に会った時にも、同じことを言った。

決議案準備にたずさわったセミパラチンスク州の団長、マリーニン氏の話引用させていただきます。

この話を読むと、もしかしたら、私が功名心、あるいは何らかの個人的な野心に支配されていると見なす人がいるかもしれないが、決してそんなことはないと言断する。私は、読者にも、自分自身に対峙すると同じように率直である。長年にわたる公共の仕事で、市民の運命に対し自ら責任を負うのに慣れ、いつもいつもこの根本的基準のみに基づいて仕事をしてきたつもりだ。

さて、マリーニンはこのように語った。

『私は1989年10月4日にモスクワに到着した。セミパラチンスク核実験場についての政府決議案準備に参加するためだ。軍産共同体の中での濃密な仕事があった。

我々はクレムリンの建物内を案内され、必要な部署に行った。立派な寸法の机に座ったのは、3人の将軍、3人の大佐、2人の非軍人の博士だった。

弾薬部長アレクサンドロフは、会議参加者の自己紹介をすませ、直ぐに本題に入った。我々は問題に対する理解と必要な支援が即時に得られるとは思ってはいなかったが、しかしこれほど理解への反発が待っているとも考えていなかった。それに、軍事産業委員 - 立派な核物理学者たち - は、この官庁で将軍まで上り詰めた、ストレートで断定的な人々で、自分たちの意見は反駁の余地が無いものであると見なしており、我々の提案に対し軽蔑を隠そうともしなかった。我々の提案に対しては非常に無礼な反応が繰り返された。

「貴方がたは何も理解されていない。貴方がたの要求には根拠がない。それら要求は国の防衛力を崩壊させるようなものだ。」

「貴方がたは、そもそも我々の問題に介入する立場にない。」

「実験中止を討議することさえありえない。」

このような流れの会話が数時間続いた。

我々は自分の感情に流されないよう、容易なことではなかったが、冷静さを維持するよう努めた。会談は両者に何ももたらさなかった。我々は自分の主張を擁護するのはきわめて困難だろうと、はっきり確信できただけだった。

ベロウソフ氏は、自分の権限で国内の地下核実験についての諸問題を担当する大きなグループを設けた。そのグループを率いたソ連国軍参謀本部第一副部長A・オメリチェフ大將は、知性に溢れ辛辣な発言や無作法なふるまいをしない人物だった。グループのメンバーは、財務省次官、原子力省次官、気象委員会、国家計画局、国家労働委員会他の関連官庁の職員たちであった。

非常に緊迫した日々が過ぎていった。週一回、グループは参謀本部に集まった。会話が円滑に進んだとは言えない。毎回、我々に対し、国家的重要性を理解していないと言う非難の声が飛んできた。時には脅迫さえあった。

そのような会議の一つでの国防省第十二主管部長ゲラーシモフ大將の次のような発言は記憶に残るものだった。

「我々は核兵器の開発者の名前を、金文字で歴史に刻まねばならない」、そして意味ありげに私のほうを指差し、「...そして、それを埋葬した者の名は黒文字で。」と結んだ。

私は非常に居心地が悪かったことを白状する。しかしさらに激しく度を外れた攻撃がボズターエフ氏に向けられた。

「この尊大な輩は一体どこから現れてきたのだ？」と、彼らは言った。

「我々に手紙と抗議をよこしつけるとは！」

ボズターエフに関する脅迫は非常に深刻で、強大な軍事産業委員会は具体的な実力行使に移行しかねなかった。夕方、ホテルの部屋に集まり、我々はこの深刻な問題を議論した。心からボズターエフ氏の運命を心配していた。実際、彼とともに全てが崩壊しかねなかった。我々は彼を守る義務があると理解しており、電話の際にも、彼に注意を呼びかけた。彼はいつも黙って我々の言うことを聞き、最後にお決まりの

「恐れなくていい」と添えた。』

手紙キャンペーンが始まった。そのなかで「普通の市民」が、祖国の裏切り者と私を非難していた。

そういう手紙の一つが、東カザフスタン州タブリード郡に住む退役軍人からのものだった。この手紙については、ソ連共産党中央委組織部から知らされた。内容はまったく普通のものであった。要するに、他の手紙と瓜二つであった。ボズターエフは住民をそそのかし、国家の利益に反対させている。彼が来るまでは、セミパラチンスク州は平穏で、人々は核実験場の存在と折り合いを付けていた。その祖国防衛上の意義を理解していたからである。今になって急に、核実験場の健康に対する有害な影響が言われ出した。これは民衆を扇動する嘘で、それを利用してボズターエフは州の社会インフラの遅れに対する責任から逃れようとしている。社会的諸問題が解決できないのは、州党委首脳の責任である。

この手紙や他の幾つかの手紙は、組織化されており書記長の管理下にあった。国防省が費用を持ち、手紙を書く人をモスクワに招待した。彼らには、共産党中央委部局の担当者が会い入念に聴取した。これと他の類似の怪文書に基づき、ソ連共産党書記メドベージェフ、バクラノフとラズモフスキーが署名したメモが作られた。私はメモについて知らされ、共産党中央委書記局が特別の質問を用意し私の回答を聴聞するだろうと、警告された。メモ中には直接私に向けた非難は無かったようだが、しかし手紙を引用し、次のような十分に厳しい結論が下されていた。つまり、州党委第一書記ボズターエフの住民への説明と啓蒙活動が不十分であり、州は社会的問題を十分に解決していない。

しかしメモの内容は実行されず、私は書記局に対する回答を留保した。ソ連共産党第28回大会の準備が進み、党中央委の執行部では人員と部門の削減が始まっていた。この状況のおかげで私の問題は棚上げされた。

自分の人生の渦についての記憶を紐解くと、私の職歴には容易な道はなかった。なにを達成するにも多大な労力を要したが、決して自分の精神が屈服することはなかった。なぜなら、恐らく、常に自分の携わっていた業務を信じ、隣には同志と仕事仲間らっていて、上からの承認も支援も得られていたからだ。そして困難になればなるほど、より大きな楽観主義をもって働けたのだった。

時の経過につれて、我々はますます核実験場を支援する一連のマスコミの側からの

圧力を感じるようになった。

幾つかの例を挙げよう。

「イズベスチャ」紙、1989年7月29日。「核実験が行われている地域の噂と真実」の見出し。ソ連科学アカデミー客員会員、国家気象委員長イスラエル氏のインタビュー記事。

「... 地下爆発では、放射性降下物は発生しない。核実験場に隣接する地域と、またセミパラチンスク郡におけるガンマ線量は毎時10～25マイクロレントゲンで、わが国の他の諸地域と同等のバックグラウンド・レベルにある。

... このように、上述地域とセミパラチンスク市における全ての放射線の指標は、国の残りの地域で観察されているものと事実上変わらないので、住民の健康に対する危険性は想定されない」。

同日付の紙面に、ゼレンツォーフ中将与とのインタビューもある。

「... つい最近、モスクワの執務室の放射線状況を測定したら毎時18マイクロレントゲンだった。窓の外や中庭では20だった。セミパラチンスク内の核実験場では、このレベルを遥かに下回っている。つまり、核実験場は我が国で核爆発が行われていない諸地域よりもきれいなのだ。この状況は地下実験最中であっても全く変わらない。」

「祖国の息子」紙、1990年8月4日付。「セミパラチンスク：核実験場についての神話と真実」

オドノコレンコ記者、ソ連人民代議員フォメンコ、ラズバーエワ、サフォーノフ少将、地震学・放射線安全管理副部長タラーセンコ中佐との会談。

サフォーノフ：幾つかの統計を挙げさせていただく。セミパラチンスク州では、住民10万人当たり207のがんの症例が記録されているが、モスクワでは298、アメリカでは350だ。果たして、これは、セミパラチンスク州に何らかの特別の所見があることを示しているのだろうか？

タラーセンコ：確かに、核実験場における爆発は、地下の振動を引き起す。しかし、それは短期で局所的であり、破壊の原因ではない。

官報、1989年11月、「核実験場：情報公開し実験（感情の爆発か問題の科学的分析か？）」ロマーノフ記者によるサフォーノフ氏とのインタビュー記事。

「... 全責任をもって私は表明できる。今、放射能については、核実験場は周辺住

民に対し危険性はない。」

「... 私は現地住民の判断力に問題があるとは思わない。執拗に、ある目的のために、存在しない危険性により彼らを脅かしている人々がいることに目を向けねばならない。」

「マスコミでも、『ネバダ - セミパラチンスク』運動のイベントでも、州の党や議会での演説でも、果てはソ連邦最高会議の代議員までもが、核実験場に反対する大衆プロパガンダを行っている。」

記者「貴方は世論が形成されたのは決して自然発生的ではなく、それを誰かが意図的に形成しようとしたからだとおっしゃっていますが、誰が、何のためにですか？」

サフォーノフ「問題の第一の部分に対しては、私は既に回答した。現地政府だ。なぜ何のためかも、秘密ではない。社会的側面、全体的な経済状況がうまくいっていないのだ。人々の生活が困難なのだ。ではどうやって日常的な問題から目を逸らせるか？昔からよく知られた手段だ。不満を他所に向けさせ、スケープゴートを見つけて叫ぶのだ、「捕りかかれ！」と。川が汚れており、空気が有毒ガスに汚染され、多くの病院が欠乏状態にあり、住宅や食料が足りないのは、果たして核実験場のせいだろうか？

... 我が国の尽力により軍事戦略的な均衡が達成された。ソ連人民が平和に仕事できる保証だ。一方的な実験中止は、均衡の破壊と予測できない結果に至り得る。」

「プラウダ」紙、1990年2月12日。「セミパラチンスク核実験場。神話、勝手な思い付きと真実」本紙記者がツィーブ氏にインタビュー。

... 住民は、当然、核実験を恐れている。

... 現地住民は、恐ろしい放射線で取り囲まれて、みんなが病気になり、彼らから真実が隠されていると信じている。

... 状況が複雑化したのは、ある勢力が問題を利用したからだ。この問題が政治化してしまった。感情が情報欠如により、時には偽りの情報が意図的に流されたことに過熱している。人々は、もはや理性の声を聞けない状況にまで操作されている。

... 全てに対し対価を払わねばならないことにそろそろ慣れねばならない。このような解決の方が、政府には遙かに安くつき、もしかしたら現地住民を満足させるかも知れない。

「フルンゼ人」紙、1990年1月31日、核実験場は香水工場ではない

[訳注：フルンゼは、キルギス共和国の旧首都名]

ペトルシェンコ大佐「ソ連最高会議のコンピュータに保管されているデータによれば、セミパラチンスク市の疾病率は都市として良い方ではなく、150の条件が悪い都市の中で87番目を占めている。セミパラチンスク州は、がん疾病率に関してはカザフ共和国で9番目である。一位は東カザフスタン州だ」。

「...感情が過熱し、いや、より正確には過熱させられている。すべてのプロセスは巧みな手によって指揮されている」。

「抗議行動は加速している。我々がテレビの画面で見る受難のアバイの大地における行進は、経験豊富な監督の手によって演出されていると感じ得ない。医学生の力を借りるほうが、直接的な効果を生み出さなかったであろうか？」

「自分の部下と一緒に私は一連の辺境の村とアウルを訪れた。痛ましいほどの貧困と貧しさだ！医療施設の「武器庫」には錆びた手術用メスの他には、包帯やヨードもない。一方、核実験が行われている縦穴から60kmにあるクルチャートフ市の労働者の5000人の子供は健康に成長している。なぜなら、栄養豊富な食料と菜園区画からの新鮮な野菜を得ているおかげである。その一方、核実験場から数百km離れた土地の人々はこう吹聴されている。「しらみを育てなさい。放射性の血を吸ってくれます。子供には疾病予防のためにウオッカを飲ませなさい」。

「どこに健康を悪くした「被験者」たちがいるのかという質問への回答については、私は治安機関に行くよう薦めたい。治安機関にも、それほど離れてない場所で8年間過ごした人々がいます」。

「勿論、現地行政は、社会文化生活の状況をクルチャートフ市の財源により改善できる。しかし、核実験場の地を分割してみると、社会文化生活施設はパプロダール州に配置されており、セミパラチンスク州には垂直坑や水平坑が配置されているというような「細かい些事」も考慮しなければならない。核実験場は複合施設であり、それは共和国そして国全体の国民経済の総合的な利益のために用いられねばならない」。

「村の生活」紙、1990年2月4日、保健省付属住民放射線防護に関する調査委員会副委員長、アカデミー会員ブルダコフとのインタビュー記事

「...セミパラチンスク周辺に生まれる奇形児の数が益々増えているという多数のデータが存在し、出版されている。そして、これが核実験と関連付けられている。

...しかし、原因は私の観点では別にある。それは、アルコールの過剰摂取、大

気汚染、飲料水の水質だ...。」

ソ連人民代議員でもある陸軍大佐ペトルシェンコ氏の寄稿記事をさらにいくつかご紹介する。

「コムソモールスカヤ・ブラウダ」紙、1990年7月8日、「核実験場で八本足の雄馬も私の前に現れた」

「今、非政府組織による反核実験の盛り上がり収まった後、住民に放射能恐怖症が進展しつつある。しかし真実はこうなのだ。セミパラチンスクは、環境的には世界で最もきれいな核実験場だ。」

「現在、軍組織は核実験の特性と目的の他は全てを公開している。すべてオープンである。確かに、商品の「購入者」は居ない。ともするとそのような場合に、地元行政府が「中央」からの資金や物資供給を獲得できる理由がなくなるからではないか？核実験場はもちろん香水工場ではないが、しかし、非政府組織が描いているような「悪魔の化身」でもない。個人的な考えだが、多くのリーダーはここで行われている実験の安全性についての真実を知っているが、「政治的配当金」のために意図的に反核実験運動を煽り立てているのだ。」

「核実験場の閉鎖や移設はありえないことである。研究センターの主要施設の価値だけでも60億ルーブルを超える。我々の科学にとって、遺伝学と人工頭脳学を「刈り取る」に値する打撃になるだろう。」

「国家核プログラムは危機にある。冷静な頭脳を持つ社会勢力の力で救う必要がある。」

「鉱物のアルタイ」紙、1990年7月19日。「冷静な状況評価が必要」

「独立した専門家達の支援により、核実験場周辺の放射能レベルがバックグラウンド・レベルを超えていないことが確認され、私は益々確信を大きくした。新聞紙上、ラジオやテレビでは強く感情に流されるばかりで、専門家の発言が紹介されていない。放射線レベルはレントゲン単位で測定され、また放射能汚染の程度はキュリー単位で測定される。エリツイン現象の後には、エリツという単位でガラスノスチが測定されたように、放射線恐怖症の測定には何人か特定のジャーナリストの名前に由来する測定単位を導入すべきだ。誰の名前を導入するかに関しては、我共和国と州の新聞が優位であろう。勿論、中央マスコミも遅れをとるものではない。」

「地下核爆発はもちろん不快な隣人だ。特に、それに先立つ多年にわたる情報歪曲

キャンペーンがあったならなおさらである」。

「プロの宣伝屋としては恣意的な数値や事実の利用を避けて通る訳にはいかない。実際今日「核実験場閉鎖運動に於いては、あらゆる手段が善だ」という原理だけが生きている。地元および共和国行政が対策をとらなかったことを不問にし、行政幹部の命を長らえさせようとする勢力もある。」

「ソ連人民代議員第二回大会の会期中に、クレムリンでは「労働者管理」紙の特別版が流布され、そこではセミパラチンスク州に於ける疾病率増加の数値が記されていた。私の問い合わせに対し、保健省はそれら数値を確認できなかった。しかし、事実を確認しようとする私の試みにカザフの代議員は憤慨し、「では貴方自身が新しい数値を出すべきでしょう」と言われた。しかし、我々が特別版を準備するよう取り決めたのは、カザフスタンに於ける環境災害ゾーンについてであって、客観的に判断すれば、セミパラチンスクよりも、アラル地域やアルタイ鉾脈地域についての数値をまず出すべきであろう」。

「核実験場を他の場所に移設するのは、米国に我々に対する不信感を呼び起こさせることを意味し、ソ連は国際管理下から逃れる算段をしていると非難する口実を与える」。

「... 我々軍人は、軍服の名誉を守るために簡単に断罪される。私の「陸軍大将」昇級を、私の核実験場に対する立場と関連付けられたこともある。しかし我々の軍服は実際に国産の服地から出来ており、我々はそれを海外産の糸で編まれた輸入制服に変えるつもりはない」。

「我々の隣人のセミパラチンスクの人々にとっては、中央から50億ルーブルの特別予算を受け取る方が、核実験場と協定を結ぶことによって利益を得るよりも簡単なのだろう」。

これらのでっちあげと偽りと歪曲に満たされた記事の動機に関し何が言えるのか。何よりも先ず、これは、州指導部と反核運動に対する攻撃が存在したという事実の否定のためであろう。記事を書く側の目的は、我々を精神的に、政治的に潰すことだった。

被災地域の住民の大衆抗議について、別の新聞記事の著者は、私とO. スレイメーノフという経験豊富な指揮者による巧みにしくまれた大衆行動として描いた。

他方、まるでプレスにより盛り上げられた空騒ぎとバランスをとるかのよう、我々

は住民から何千もの手紙を受け取っていた。差出人の名は伏せるが、手紙の抜粋を引用する。

「... セミパラチンスクの町に1936年に生まれた日からずっと住んでいます。実験が行われる日は何も感じません、自分の孫の将来に対する恐怖感を除いては。

私自身は地元のがんセンターで手術を受けました。私は、到る所切り刻まれ、そのためもう自分が誰か判らないような女になりました。娘は今、妊娠していますが、流産したことがあります。彼女は妊娠七ヶ月ですが、私は彼女が心配です。

実験は中止しなければならないと思います...」。

「... 私は水素爆弾の実験の目撃者で、全てを自分の目で見ました。その時以来、常に病気がちです。多くの親類縁者が若年で死にました。その中には私の母もいます。私の子供のうち四人は一歳にならずに死にました。核実験は危険性を秘めています。もう核実験場周辺の住民とその健康について対策を講じねばなりません。核実験場がどのように賞賛されようと、実験は人類に大きな害をもたらしています。ですから我々は生存のための環境を作らなければなりません」。

「... 放射線と地面の振動には不安にさせられます。母は、1955年の爆発後、強い被ばく線量を受けました。あの時は、多くの建物の壁が倒壊し、特に第20学校では、全ての暖炉が壊れ、ガラスが割れました。

私はがんの手術をし、死産も何回か経験しました。子供には先天性心臓奇形があり、リンパ節肥大もあります。我々の大地の身震いは40年で十分だと思います。実験は中止しなければなりません」。

「... 町の住民は、爆発の大きさを、足元の床の突き上げと振動から、またガラスの音から決定できます。しかし、この際、これら全てが健康にどう反映するのか、人々は大きな不安を経験しています。いつまでこれが続くことになるのですか？誰か応えてくれる人はいますか...」

「... 放射能によって二人の子供と孫が病気にかかっています。いずれも気管支喘息に苦しみ、目が腫れています。1955年以来、11人の親類縁者ががんと心臓病で死にました。私は将来が恐ろしいです...」

「核実験場は人々と子孫にとって危険です。我々の世代は既に絶望しています...」

「... 危険性は非常に高く、今年二月の希ガスの放出についての公式見解は信用できません。この後、私の子供の気分が悪くなり、頭痛と疲れを訴えています。我々

の労働能力は非常に下がり、一晩寝ても疲労が回復しません。私と親類は、子供と将来世代の健康の名において、いかなる実験も中止することを要求します ...」

「... 地震の振動は家を壊しています。糖尿病を患っています。近親者ががんで死にました。将来の子供たちを不安に思うのはもう沢山ですし、自分たちに逃げ場がなく無力なことを直視できないのも、沢山です ...」

「近親者ががんで死にました。私自身、39歳で、第二群の障害者です。この罪は核爆発にあります ...」

「私の家族では1987年に心臓と血液の病気で妻が死に、21歳で急性の心臓病により娘も急死しました。我々の小さな村で、5~6ヶ月の間に20人もが死に、もし実験が続けば全員死ぬでしょう。私が思うに、我々の核実験場は安全だという人を信じてはなりません。これは嘘です。私の友人は手のまめができて一年で死にました。私たちも、生涯病気の人生を送るのではなく、社会に役立ちたいです ...」

「私は、1956年の原爆実験の目撃者になり、地元の人々みんなと同じく被ばくしました。その時以来ずっと治療していますが、助けになりません。どうして政府は私たちについて何の対策も講じないのですか？実際、私たちはみんな放射線の障害を受けています。私たちは、病人で、誰にも必要とされなくなりました。どうすれば、私が全力で仕事をして、8人の子供を養えるのですか。核実験場は私たちには不要です。地上を平和にしましょう ...」

「... どれだけ私たちの母なる大地を揺さぶることができるのですか。私と親類縁者全員は、核実験禁止を求めます。今保有している量だけで、相手と自分を滅ぼすに十分です ...」

「... 私たち、成人や子供たちがすでに相当の被ばくをしていることについては、町の大部分の住民と同じように疑っていません。今日でなく、将来を見つめなければなりません。核実験の影響が50~100年過ぎてから現れることはない、誰が私たちに保証できますか。誰が人々の苦しみに対し責任を取るのですか？核実験場は全ての分野において自分の使命を終えたと、思います。即時実験中止を求めます。そして永久に ...」

「実験は健康に対し危険だと思います。私の子供たちはよく病気になり、四人の親戚のがんで死にました。周囲の環境も変わり、以前は生えていた植物がなくなりました ...」

「まだ学校に通っていた時代に実験が始まったのを覚えています。学校ではガラスが飛び出し、窓枠も飛び出し、私はとても怖かったです。この時の恐怖は私の中に残っています。14歳のときから高血圧に苦しんでいます。みんなこれは実験のせいだと言います。今私は重病で、34歳でアルマティで心臓にペースメーカーを入れました。生きるどころか、苦しむだけです！

そしてこれらは全部、実験だけと関係があります。子供たちがかわいそうです、実験が中止にならない間は、子供たちは決して健康にならないでしょう…」

「…1953年、新しい実験が始まりました。全員、通りに引っ張り出されました。閃光を見た瞬間、2～3秒間視力を失いました。それまで私の視力は100%でした。当時16歳でした。半年後、1.5Dのめがねをかけました。今では6Dです。」

「…しかし私には二人の息子がいます。1966年生まれの一人目は、先天性の2.5Dの乱視です。1973年生まれの子供も、先天性の乱視です。それまで家族の中に近視や乱視はいませんでした。また、1978年以来、私は既に15回も肺炎を患いました…」

この間も軍産共同体はセミパラチンスク核実験場での核実験を延長する方途を探っていた。彼らは1993年までは爆発を続けるという姿勢を確認した。1990年に計画されていた9回の核実験のうち、まだ一つも実施されていなかったが、来るべき1991年には更に9回の実験が計画されていた。

1990年夏、ソ連核兵器の設計技師長ボリス・Lがセミパラチンスクを訪れた。我々の会談は、もう一時間、もう一時間と延長された。彼は、どのように今米国で新世代の核兵器開発が行われているか、詳細に説明した。彼は、20キロトン2回と50キロトン1回の、計3回の爆発を行う必要性があると述べた。「これらの実験は」と、設計技師長は強調した「現行世代の核兵器設計に関する研究を完了させるために必要だ。その後なら、セミパラチンスク核実験場で核実験の全面的中止も可能かもしれない。」

ボリス・L氏は、私に好印象を与えた。落ち着いていて、豊富な知識と人生の知識で、人を引きつける力があつた。彼の全ての研究と実践的活動は核実験場と関連していた。彼はモスクワ物理工科大学を1958年に卒業した後、1962年から核兵器の設計技師長になった。核実験場の運命に対する彼の深い憂慮は理解できるものだった。もちろん、彼も近年実験場周辺で複雑化している状況について理解しないではい

られなかった。

この人物に対する深い尊敬の念を強調しながらも、私は三回の爆発を行うのは不可能であるという姿勢を再主張した。危機的な状況を作ったことに対する罪は、核実験場の周囲の住民の利益と権利を忘れていた国家にある、と。

特別回線でのある会話の中で、セミパラチンスク州選出のソ連人民代議員で当時ワルシャワ条約統合参謀本部長であったロボフ大将から「ソ連大統領令によりセミパラチンスクに於ける核実験を延長しようとする試みがある」と告げられた。ロボフ参謀本部長は、心の中ではセミパラチンスク核実験場に於ける核爆発中止に賛成だったが、職責上、公然と核実験に反対できないでいた。彼は地元市民から大きな信頼を享受しており、全ての郡を訪れたことがあった。ロボフ参謀本部長が、ついでのように言ったこの情報に私は警戒心を募らせた。先手を打つことにし、ソ連邦大統領へ以下のような手紙を送った。

「... 執拗さをお責めにならないで下さい。軍事産業委員会は既にソ連大統領令によってセミパラチンスク実験場に於ける核実験を継続しようとしていることが、私の知るところとなりました。もしそれが現実のものになれば、我々地域の住民に対して極めて深刻な打撃となり、その影響は予測できません...」

大統領はこの手紙を軍事産業委員会の首脳達に送った。後に、前党クルチャートフ市委第一書記サフロノフが、語ってくれたところによれば、彼が軍事産業委員会を訪れた時、ブカートフ氏は怒りをあらわにして「ボズターエフはどこからこんな情報を得るのか？」と驚いていたようだ。

実験中止と核実験場閉鎖を求める社会運動は、その間に盛り上がりを見せ、さらにそこにカラガンダの鉱山労働者が加わった。そのリーダーの一人が後に共和国人民代議員に選出されたヌルタジン氏だった。彼は、軍産共同体や国の首脳に認められていた人物であった。クズバス、ドンバス、ボルクタの鉱山労働者のストライキが全国を揺るがしたのはまだ新鮮な記憶であった。カラガンダの鉱山労働者による核実験の即時停止と実験場閉鎖の要求が皆の注意を惹いたのだ。

カザフスタン炭坑労働者代表はモスクワに赴き、また一度ならずセミパラチンスク市、郡部、核実験場をも訪れた。

我々は、直ちに強力な支援を感じた。鉱山労働者の団結を感じることで勝利の確信は高まった。

セミパラチンスクでの核実験中止のための運動に於いては、可能なアプローチは全て用いられた。我々は、この問題をソ連最高会議の議題に上げるよう試みた。しかし、代議員の中の影響力のあるグループが核実験場閉鎖に反対していた。彼らにより、代議員の間に核実験場を支持する表明が拡がり、州首脳や住民運動の努力は、祖国の核の盾を弱めることを意図した行為だと解釈されてしまった。

ソ連人民代議員の間で広められたメモには「ソユーズ」という大きな人民代議員グループの署名があり、こう述べられていた。「...かなり長い間リスクの高い地域に信頼できる情報を得ることなく、公共設備の整備されない環境に住み続け、相応の補償を受けられなかった核実験場周辺の住民の不安は完全に理解でき、高い社会的関心が向けられねばならないが、核実験場の活動の善悪を判断するにあたって、専門性の低さ、扇動や誇張、大衆集会などによる感情的要素が多分に作用したことは事実である。

感情的で前後を顧慮しない「核実験場閉鎖せよ！」という叫び声は、事態を正当でなく高価なアプローチへと突き動かしかねない、と我々は思う。我々が思うに、必要なのはバランスのとれた決定であり、その探求するために時間と努力を惜しむべきではない...」

我々の地域へのシチェルバク・グループの訪問については、ソ連人民代議員グループは次のように書いた。

「ソ連最高会議調査委員会がシチェルバク氏を委員長として今年の一月にセミパラチンスク州を訪問したが、核実験場周辺の環境状況に関し正しい結論を下せなかったどころか、幾つかの代議員の不用意で客観的でない意見表明により、訪問は失敗に終わった。

核実験場の専門家の意見は考慮されず、その論拠は一つも検証されず、地域住民の集会や会見に於ける感情的な発言のみにより評価が与えられた。」

代議員グループ「ソユーズ」は、活発に自らの姿勢を主張し続けた。

東カザフスタン州からのソ連人民代議員ペトルシェンコは、自分のメモで代議員グループ「ソユーズ」の名において、ソ連最高会議議長ルキヤーノフにこう述べた。「冒険主義的に核実験場をノーバヤ・ゼムリヤに移さないのが、経済的に妥当である。核実験場を訪問したが、核実験の状況に関する政府からの報告が必要だ。核実験の安全性を最終的に確認する目的で、次の核実験を、ソ連邦とカザフ共和国の全人民代議員と政府メンバーの立ち会いの下で行うことを要求する。」

ソ連最高会議メンバーの中では核実験場への賛同は相当高かった。それを更に強めたのが一連の著名な学者がソ連最高会議に対し核実験場支援を表明したことだ。特にグループ「ソユーズ」の側に断固として立った最高会議議長ルキヤーノフの考えが状況を深刻にした。

これらの状況を入念に分析し、私は最高会議の議題に核実験を入れようという自分の意図に、強くはこだわらないようにした。核実験支援という幸福感に代議員が酔いしれていた状況では、我々の提案が敗北を喫する可能性もないとは言えなかった。

カザフスタン共産党中央委は今後セミパラチンスク核実験場で実験を行うのは許容できないという旨の声明を出した。一週間後、1990年5月22日、カザフ共和国最高会議においてセミパラチンスク州の核実験場に関する決議が採択された。

決議にはこのような記述があった「...セミパラチンスク州と他のカザフ共和国の領内にある実験場に於いて核実験およびいかなる種類の大量殺戮兵器の実験の実施も禁止する。」

対立の期間は終わりに近づいたように見えた。しかし、我々は更に一つの幻滅を味わった。1990年10月、カザフ共和国の最高会議決議に対する返答であるかのように、明らかに軍産共同体の圧力の下、ゴルバチョフ書記長はセミパラチンスク核実験場において1993年1月1日までは核実験を継続するという国防評議会の決定に署名した。

私はこの文書が法的効力を持たないことを知っていた。なぜなら、そのゴルバチョフ氏の署名の下に「国防評議会議長」と記されていたからである。つまりこれは大統領令ではない。そうはいても、心中に不安が吹き込まれた。

我々は、核実験の影響について殆ど何も知らずに、実験中止と核実験場閉鎖を求める闘いを始めた。対立期間中に、一步一步と我々は知識を広め深めていった。最終段階においては、全被災地域の住民と環境の健康回復プログラムの策定が可能になるほどに、我々の知識は確かなものとなっていたのだ。

影響

自然科学の発展における新しい段階が、放射能や原子とその核の構造などの一連の重要な発見によって前世紀末に始まり、自然に対する古い前提は根本的に壊された。

これは人類を新しい発展段階に引き上げ、同時に、自然と全人類的な価値に対する人類の責任も引き上げられた。

新しい問題が起き上がった。環境の放射線安全性の確保である。明らかになったことは、生体細胞は核反応によるエネルギーの作用によって壊れてしまうということであった。生命とその存在する環境を防護するという極めて重大な責任問題が生じた。しかしながら、すでに始まった原子エネルギーの研究と利用は、元に戻せなくなっていた。

G . ジューコフ元帥は、自分の回想記でこう書いている。

「何日だったか、はっきりは覚えていないが、1945年のポツダム会談のある会議の後、トルーマン大統領はスターリン書記長に原子爆弾という言葉は使わずに、米国は尋常でない破壊力の爆弾を有していることを告げた。

この時、チャーチル首相は、スターリン書記長の顔を両眼で見据え彼の反応を観察した。しかし、スターリンは自分の感情は全く表に出さず、まるでトルーマンの言葉に何も聞かなかったような顔をした。チャーチルはそこで、多くの他の英米の政治家と同じように、多分スターリンは言われたことの意味が判らなかったのだろうと思った。

実際には、既に1943年に、ドイツの物理学者で共産主義者のK . フックスから米国で活発に展開されている研究についての情報を得た後、ソ連政府はクルチャートフに最初の原子力研究センターと原子力問題に関する全ての研究を率いるよう任じていた。

問題は、誰が先行し、誰が遅れるかということだけにあった。欧州からアメリカへの「頭脳」流出の結果、第二次世界大戦の前夜では米国が明らかに先行していた。

世界史上初の核兵器実験はアメリカ合衆国により1945年7月16日にニューメキシコ州で行われた。3週間後の8月6日、日本の広島市にTNT爆薬20キロトン相当の巨大な破壊力を持つ原子爆弾が投下された。進歩的な人類はアメリカ軍の行為に震えた。

しかし人類は当時、広島悲劇から実はそれほど時間を経ずにセミパラチンスクの

悲劇が待つことには、思いを馳せられなかった。

第二次世界大戦終了後直ぐ、我が国の首脳は戦争により破壊された国民経済の復興を待たず、ごく短期のうちに原子力問題を解決し、それによって米国による核兵器の独占を許さない意図を表明した。

決議が採択され、担当設計及び製造組織と官庁が、莫大な能力を持つアメリカの学者が五年以上かかったことを、一年半の間に達成するよう義務付けられた。

1946年初めにソ連閣僚会議直属にこの課題を担当する管理官庁が設けられた。具体的には、ウラン鉱の探索、採掘と処理、核分裂性物質の処理と製造技術、そして原子爆弾の設計を司った。これらの管理官庁はスターリン自身が指揮した。

困難な戦時と戦後の時代にあっても、計画的な経済運営と、物質的及び人的資源の主要開発部門への集中的な投入のおかげで、急テンポで新しい原子力産業を作ることが可能となった。

才ある物理学者と設計者、有能な運営管理者が、早朝から深夜まで自己犠牲的に原子力産業の創設に尽力した。この原動力は、一方では祖国への愛 - 真の愛国主義であるが、他方では自己の知力および能力の発揮への希求が当然ながらあった。まさにこのような国家と個人の利益の合致によって、いつの時代でも、どこの国においても人間的価値が形作られてきたのだ。

1946年12月25日、ソ連と欧州では初めて、クルチャートフは部下と共に、最初の原子炉で制御された核分裂連鎖反応を実現した。

1947年8月21日、ソ連政府は特別決議により、原子力研究実験場を設けることを決定し、「教育用第二実験場」の仮称を与えた。

実験場作りの指揮は、ソ連軍総合参謀本部の特殊部が実施した。実験場の全ての作業の管理は、クルチャートフの直接指導の下で行われた。

クルチャートフには、直径約200kmの実験場の建設場所の選定が委ねられた。その用地は、鉄道幹線と空港から200km以上離れてはならず、自動車用道路の延線も容易でなければならなかった。

当時を知る人によると、様々な場所が研究されたそうだ。そして、セミパラチンスク市に近いカザフスタンのステップに落ち着いた。広漠とした空間、住民数の少なさ、中央からの距離、近くの水量豊富なイルティシ川、鉄道と自動車道路、空港。これらの諸要因が比類なく核実験場の建設に向いていたのだ。

建設用地そのものは直径約30kmの平地で、南、西と北が低い丘（標高200メートル以下）で囲まれていた。実験者の目から見ると最適な場所で、まるで自然が実験者のために最大限の便宜を図るよう配慮したかのようなようだったそうだ。

このサリ・アルカの空き地に、1940年代末から住民にとっては謎の施設の建設が始まった。

これは太古から人々に健康と喜びを与えてきたカザフのステップの運命の急転回を意味した。ロシアからの友人が我々の曾祖父や祖父を訪ねてやって来て、草の香りを吸い込み、泉の水や体によい馬乳酒を飲み、草原の歌に聴き惚れ、健康を回復したステップの運命の。

何世紀にも渡り、サリ・アルカの広大な空間にカザフ人は住んでいる。夏は放牧に出かけ、冬になると戻って来る。大昔から牧畜が彼らに衣食を与えてきた。ここにコルホーズがつくられ始めてからは、ステップは別の様相をもった。新しい村、道路が現れ、また送電線や通信線、その他の現代の利器が現れた。そしてある日突然謎の施設の建設が集中的に始まった。

当時、ウラルのある町では、学者の大集団が集中的に核爆弾の開発に従事していた。既に1946年6月、Y・ハリトンによりソ連閣僚会議に最初の原子爆弾の設計図が承認を得るために提出されていた。

しかしスターリンが署名した政府決議にうたわれた、プルトニウム型は1948年初め、ウラン型は遅くとも1948年中期中に実験を開始するという原子爆弾の製造時期にかんする計画は非現実的となった。しかし最初の実験に向けた準備はなおも集中的に続けられ、1949年7月6日には完了した。

7月末、国家委員会は建設者から核実験場の引渡しを受け、全ての機器およびすべての業務体制が実験に向け準備が出来ていることが認定された。

核実験場の全般的準備態勢について政府に報告され、実験実施に対する許可が出された。

既に7月中旬、ウラルからセミパラチンスク市、ジャナ・セメイ駅行きの特別編成列車で必要な全ての機器が発送されており、8月初めには飛行機で核爆弾そのものの諸ユニットと部品が届けられた。

（80ページ写真： 最初の核実験の爆発 1949年8月29日 （アーカイブ写真））

装置と爆弾と一緒に、最初の原子爆弾の開発者たちが大人数でウラルからセミパラチンスクにやって来た。

核実験場建設と実験実施に関する全ての作業は、極めて厳格な秘密主義の下で行われた。この目的のために工兵部隊緊急作業部が臨時に派遣された。文官および軍属はいなかった。それぞれの作業グループは、与えられた自分の課題しか知らず、お互いに完全に隔離されていた。

核実験場から建設部隊が去った後、全ての用地が国家保安省（後のKGB）の保全部隊の管理下に置かれた。働く者は各グループに割り当てられている場所以外での業務上の会話を一切禁じられ、また付き合いも厳格に制限された。輸送車の運転手とのいかなる形の接触も禁じられた。運転手には、何も尋ねるな、何も話すな、という訳だ。

核実験場の治安部を統括したのはメーシク中将であった。1953年にベリヤと共に銃殺された人物だ。

ソ連初の原子爆弾の開発にあたったある人物が、回想記の中でメーシク中将についてこう書いている。

「我々と彼との間には何ら深刻な事態は起こらなかったが、我々は彼が自分の運転手を叱るのを目撃したことがある。運転手はちょっとの間、持ち場を離れていたようだ。彼はこの運転手の鼻の下にピストルを押し付けこう問い詰めた。『この野郎、どこに行っていたのだ！？』そこで運転手が何か答えようとする、さらに罵声が響いた。「黙れ！さもないとお前のドタマを打ち抜くぞ...！」

この年の8月は非常に暑く乾燥していた。28日の夕方、天気が急変した。北風が吹き始め、急に涼しくなり、空に雷雲が垂れ込み、いやな霧雨が降り始めた。こういう最悪な天気は、案の定皮肉なことに、夜中続き、夜明けになっても変わらなかった。濃く低い雲が、爆発後に予定されていた無人の無線操縦飛行機による放射性サンプルの採取を妨害していた。まるで自然が目前に迫った爆発を拒否しているかのようだった。実験の指揮官は天候の回復を期待し、実験を7時00分から8時00分に延期する決定をした。しかし、天気予報官の予測はかんばしくなかった。

その時、爆発を朝7時00分に行い、無線操縦飛行機は飛ばさないという決定が下された。3回の予行練習の後、実験が予定されていた「Sh」区画で、1949年8月29日の早朝、クルチャートフは実験実施に関する指令書に署名した。

指揮官の乾いた声が秒読みをした。「ゼロ」と数えたとき、大地の急に激しい揺れが起こり、その後に耳をつんざく衝撃力、雷鳴と地響きがあった。これらの全てはほんの数秒間しか続かず、その後全てが静かになった。

秘密が明らかになった。セミパラチンスク州近くの核実験場の高さ30メートルの鉄塔上で、破壊力20キロトンの最初の核爆発が行われ、夏の日からステップを目覚めさせた。

巨大な雷光が空を貫き、濃密な雲も、地上で燃えた第二の太陽を隠すことは出来なかった。

巨大な埃とガスのキノコ状の雲が形成され、高さ7km以上に及んだ。乾燥した草原のステップは、まるで火薬のように発火し、草原火災を引き起こした。

実験は成功だった。実験の指導者達は、ベリヤも含め、司令部から出てきてお互いに成功を祝い、抱き合い接吻しあった。

ベリヤはクルチャートフに向かいこんなにもうまく作動したこの爆弾に名前を付けるよう提案した。これに対し、クルチャートフはその名前はすでにあり、名付け親はソ連初の原爆の生みの親の一人K・シチェルキンだと答えた。爆弾は、RDS-1の名を得た。これは「ロシア自ら作る(Russiya delaet sama)」の頭文字であった。ベリヤはこの名前が気に入った。そしてスターリンを念頭に置き、「親方」も気に入ると保証した。

RDSの名前は「親方」だけでなく軍部にも気に入られた。以後、長年に渡り水素爆弾を含めた新しい型の核爆弾には、この名前の後に番号が付けられた。RDS-2、RDS-3、RDS-4、RDS-5といった具合に。

しかし、RDSの意味を知っていた人は数少なく、暇を持て余した者たちはこう解釈した。「スターリンのジェットエンジン Reaktivny dvigatel Stalina」。

ベリヤは急いでスターリンに実験成功を報告した。それを聞いたスターリンは、「知っている」と答えた。誰がベリヤに先立ってスターリンに報告したのか、いまだ判っていない。クルチャートフ自身かもしれない。

成功は、然るべく祝われた。8月30日、「Sh」区画にあるホテルと兵舎では、夜遅くまで、許される限度内ではあったが、大声と歌が響いていた。

しかし8月31日になるとお祭り騒ぎはパタッと終わり、全員はこう命令された。「見聞きしたことは全て永久に忘れよ。」

最初の実験のために核実験場に来るに際し、ベリヤは二つの秘密リストを携えたと言われている。一つは、実験に成功しなかった場合の逮捕に備えたもの、もう一つは結果が良かった場合の表彰用。

表彰リストが活用されることになった。ソ連邦勲章やメダルが数多くの先進的研究者たちに授与された。幾人もの研究者には「スターリン賞」が授与され、「社会主義労働英雄」の称号を得た研究者も多くいた。

多くの実験参加者は125,000、45,000、20,000ルーブルの3種類の額の賞金を得た。彼らは、国家の負担で自分の子供を国内の好きな教育機関で教育を受けさせる権利と、鉄道、船、飛行機により国内を無料で旅行できる権利を得た。無料の別荘を与えられた者もいた。

このようにして爆発力TNT20キロトンのソ連初の原子爆弾が作られた。その性能は米国製を上回っていた。米国の核の独占に終止符が打たれ、我が国に対する核攻撃の脅威が取り除かれた。

米国側は、当時、一度ならずソ連の産業中心と大都市への全面核攻撃を計画していた。しかし、これはもう起こり得ないこととなった。今やそういった攻撃に対しては、同規模の反撃で応じられる。

文字通りゼロからの原爆製造をこんなにも短時間で成功に導けたのは、主に、この重要課題の首脳陣にクルチャートフ率いる秀でた学者、技術者、工学者と建設者がいたおかげであった。

最初の原子爆弾製造に関する研究のために、先ず、名高い学者や製造専門家、著名な管理運営者と他分野の専門家らの選抜が行われ始めた。しかし、スターリンから自分の眼鏡に適った専門家を選抜する権利を与えられたシチェルキンは、そういうアプローチを拒否した。彼の考えでは、一つ屋根の下に科学・技術の功労者を集めたりしたら、すぐ内紛と論争が始まり力の結集どころではなくなる。問題の解決のために必要なのは、有名病に汚されていない若い人々だ。熱意、勇気とリスクは、若さの特権だ。まさにこれが原子力問題の解決に際しては必要なことだ、というのがシチェルキンの意見だった。

まさにその時、1949年8月29日朝7時00分に我が国初の地上核実験に成功したその瞬間に、セミパラチンスクのステップの悲劇が始まった。原爆の生みの親の一人は、自分の回想記の中でこう書いている。

「ぞっとするような光景は放射光の照射を受けたステップの鷲と鷹だった。片側の羽毛が炭化し目が真っ白で、電話線の上に留り、我々が近づいた時にもその場所から動こうとしなかった。

ある場所では大きく膨れ、真っ黒に焦げて死んでいる子豚を見た。衛生兵が搬出に間に合わなかったのだ。全体的に、恐怖感を引き起こす光景が広がっていた。

人類の最も偉大な発明は、人類に対しこのように恐ろしい影響を预言しているのだ。」

実際、これらの鳥たちはカザフのステップの誇りだったのに……。

八月は、収穫と干草準備の季節だ。最初の原子爆弾は放射性の核分裂生成物を地域の全ての居住地に浴びせた。その疫病神の「こだま」は隣接の州にも届き、ロシア共和国アルタイ地方にまでも達した。

ひょっとすると、当時は実験者自身も全地球的規模のこの悲劇には思い至らなかったのかもしれない、或いはひょっとすると、彼らは核実験場周辺の住民の運命には心の底から無関心だったのかもしれない。今日我々はこれだけは知っている。住民は来るべき爆発について何も知らず、誰も警告しなかった。ましてや、住民を安全な区域に疎開させようなどとは誰も考えもしなかった。

どうしてこんなことになったのか？この質問の答えとして、最新の核爆弾開発の設計技師長ボリス・Lの名で、私宛に来た手紙の抜粋を紹介したい。

「深く尊敬するケシリム・ボズターエフ殿

貴殿に私の尊敬する同僚ビクトル・イワノビッチの回想記を拝送します。まず先に、私は、ソ連で初めて原子爆弾を作った人々すべてが自らは国にとって非常に必要な仕事を成し遂げているという深い信念を持っていることをお伝え申し上げたい。この信念が彼らに未曾有の力とエネルギーを与え、できるだけ良い仕事をしたいという情熱とやる気を引き出したのです。強制によってではなく、自由意志によって、人々は時を忘れて働いたのです。

更に彼らは国全体のために必要で避けられない仕事をしていると信じていました。最初の爆弾を実験するため、当時は人口が少なかったカザフスタンに出向する時、実験者は自分の祖国の一部、自分の兄弟たちの所に行くという感覚を持って赴きました。そして、住民の安全性については自分自身のことに劣らず心配していました。これが特

にビクトル・イワノビッチが貴殿に伝えたかったことです。なぜなら彼の所に、悪意ある非良心的な「でっちあげ」が届いているからです。たとえば、最初の実験をした時に周辺のアウルの住民を彼らに対する核兵器の影響を検証するため故意に放置しようとした、ですとか。ビクトル・イワノビッチは初めての核実験に参加した生き証人です。こういう作り話を激しい怒りをもって否定しています。

そしてクルチャートフ氏、シチェルキン氏とハリトン氏は、いつも実験の度に、どんなことがあっても現地住民を苦しめてはならないと心配していました。残念ながら、当時放射線の有害な影響については、あまり心配されておらず、実験者もしばしば無用の強がりを持ってそういう危険な作用に対処し、地上核爆発直後に計測のために実験場に足を踏み入れたり、放射性降下物で汚染した設備を出張用に使っていたりしたこともありました。

同じような軽い考えが、放射性物質の取扱い時にも見受けられました。残念ながら、これに対して、多くの労働者が自分の命を犠牲にし、より早く墓場への旅路についてしまいました。もしかしたら、住民が自分のアウルに線量が未だ許容値まで下がっていない時期に帰還を許されたのも、このような兆候の一つなのかも知れません。しかし例えそうだとすると、100%断言できることは、軍人の中にも、実験者の中にも、意図的に核実験場周辺の住民に対する放射線の作用を研究しようとした「悪魔のような人」はいませんでした。

更に貴殿に申し上げたいことがあります。核実験場で実験されていたのは核兵器だけではありません。核実験場では、人間たちが、その人間性、規律、労働能力、友好性、誠実さなどの観点で試されていたのです。核実験場での労働は決して甘いものではありませんでした。これは常に過酷な男の仕事で、常に自分の相棒、次のシフトの人々、上司と部下を信頼しなくてはなりません。ですから、よくない、信頼できない人々は直ぐに見破られ、即座に解雇されました。そうでなければ成り立たない仕事でした。」

私はこの主任設計者には何度も会い、良く知っている。私は彼を信じたい。

すでに核実験場では同タイプの複数の原子力爆弾の実験準備に取り掛かっていた。しかし爆弾の製造にはまだ時間が必要だった。

最初の原子力爆弾は完成品といえるレベルからは程遠かった。

最初の原爆が核実験場に発送される前に、もう既にその爆発力、寸法、重さの改善に関する提案が出されていたが、それらは全て棚上げされた。時は急を要したのだ。最初の原爆の実験後、改善された構造を採用することが決定された。この理由から、1950年には爆発は行われなかったが、1951年には2回の原爆実験が行われた。

しかし1953年までは、住民は爆発について予告されず、避難もさせられなかった。実験実施時の安全性が注目されるようになったのは、実験開始から漸くの時間が経過してからのことだった。防護システムが開発され、地上爆発の際に放射性生成物が拡がるゾーンからの住民と動物の避難が予定された。空中実験で放射性雲の通過の可能性のある時には、住民は建屋内に収容された。

1956年からは爆発一時間前には住民がその知らせを受けるようになった。爆発力が50キロトンを超える時には、人々は家から離れた開かれた場所に連れて行かれた。50キロトン未満の爆発の際には、人々は窓に近づかないように警告された。

現実のもととなったかつての謎の施設は、人々の間で「ポリゴン」と呼ばれるようになった。しかしその活動の究明は厳しく禁じられていた。噂と憶測は直ぐに摘み取られた。それぞれの爆発は、人智の勝利、国家の強大な軍事力の要素、国民の愛国心の表れと講釈された。

その間に核実験場の敷地は拡大した。18,000平方キロの土地が奪われ、アバリンスク郡が消滅し、多くの人々が自分の先祖の土地を捨てた。周辺住民は秘密を自分の胸の中に秘めるようになった。実験の度に、自分の近親者と親しい友達の間では憤慨していたが、近しくない人がいるところでは何も特別なことは起こっていないようにふるまった。

住民が強い振動を経験したのは1953年8月12日だった。高さ33メートルの塔の上で、爆発力480キロトンの熱核融合装置（訳注：水素爆弾の原理）の爆発が行われた。直径16kmのきのこ雲が16kmの高さまで上昇した。9日間、数万人の住民が避難した。日干し煉瓦の住宅、学校や他の建物が壊れた。爆心地から130km離れていた州都では、窓からガラスが吹き飛ばされ、多くの建物に深い亀裂が入った。

1955年11月22日、最初の水素爆弾の実験が行われた。その爆発力は最初の熱核融合による爆発力を大きく超えていた。この爆発は高さ1500メートルで行われた。高さ18kmの巨大なきのこ雲が形成された。放射性生成物が莫大な距離にば

ら撒かれた。輝く核の「太陽」は非常に強く、数百 km の距離からも見ることができ、衝撃波は 500 km 以上先にまで伝わった。

これらの実験について証人は次のように報告している。

テミルハーノフさん、爆心から 130 km、ベスカラガイ郡セミヤルク村住民。

「最初の水素爆弾が実験された時、私は 17 歳で、十年生（訳注：高校一年生に相当）でした。軍人が来てこう言いました。「もし警報が出たら、直ぐに全員村から反対側に行き、窪地に横たわり、頭を上げないこと。家の窓、戸、暖炉の煙突を閉め忘れないこと。」そして警報が出ました。人々は村から走りました。最初に三つの飛行機が見えました。3 回ほど旋回した後、急に、太陽よりも強い輝き、轟音があり、衝撃波が通り過ぎました。それは、まるでナイフのように、二階建ての学校を切り崩しました。学校は後に軍隊が一階を再建し、今でも建っています。村はどうなっていたかという、猫や犬が驚いて走り回り、家の窓は外れて飛び出し、暖炉の煙突を閉じていなかった家は灰だらけになり、火事も起きていて・・・おぞましい光景でした。」

シャラーエワさん、爆心から 120 km、チャガン村住民、当時看護婦。

「実験の前の日の夕方から、私たちのところに軍人が来ていろいろと指導しました。朝食後、10 時頃、私たちは全ての患者を表に引き出し、地面にうつ伏せに寝させ、シートで覆いました。窓にはマットレスを当て、食器も全部表に運び出しました。ドアを開放し、固定し、暖炉の火を消しました。

私たちは、頭を上げず、周りに何が起こっているか見ないよう警告されていました。急に波のように大地が震え、頭を上げたくりましたが、何か不思議な力により大地に押し付けられました。しかし私は何か柱のようなものをはっきり見ました。それは後で巨大なキノコに変わっていきました：最初は灰色の煙のような色で、その後、紫色になりました。

私の多くの友人は、吐き気を催し嘔吐を始めました。シートは明るい空色の灰で覆われました。外科棟に割れ目が入り、窓ガラスがひび割れ、ドアが蝶つがいから外れました。

私の友人の K と S には奇形児が生まれ、私は流産しました。今、目の病気です。手術もしました。」

1956 ~ 1958 年には核実験場で集中的に実験が行われたことにより、新型の

核兵器の開発につながった。

1959～1960年には実験は行われなかった。

1961年、我が国では大陸間弾道ロケットが作られ、そのための核弾頭の製造と実験が必要だった。このため1961～1962年にかけて一時的に頻度を高めて実験が行われた。年間40～50回ほどの空中及び地上核爆発が行われた。

1963年、ソ連、米国と英国の間で大気中、宇宙及び水中での核兵器実験制限条約が署名され、地上及び空中核爆発は中止された。条約により生物圏の放射能汚染は下がったが、核兵器競争は止まらず、セミパラチンスク核実験場は活発にその活動を続けた。条約は核爆発をただ地下に「沈めた」だけだった。

ソ連において地下実験の準備は既に1959年に始まっていた。深さ200メートルの水平坑道における最初の核爆弾の実験は、1961年に行われた。深さ500メートル以上の深さの垂直坑道における実験は、1965年に漸く始まった。水平坑道では小規模爆発力の、また、垂直坑道では150キロトンまでの核爆発実験が実施された。

1965年1月、ステップの中、チャガン川とアシス川の合流部で、「放出」のための核爆発が轟いた。官庁が実験的に人工貯水池を作ろうと考えたのだ。そしてその結果、深さ約100メートル、直径約400メートルの、ステップの広がりを中心に、見る人の目を喜ばせる濁りのない空色の水面^{みなも}をもつ見た目には美しい貯水池が現れた。しかし、直ぐに住民の間では「死の湖」と呼ばれ始めた。それは予測できないことが起こるのではないかと住民を恐怖に陥れていたのだ。この場所を通る古い道は閉鎖され、貯水池は立ち入り禁止となった。爆発により広い地域が核分裂生成物により汚染した。

1974年5月に計画された地下核爆発は、殆ど地上核実験と化した。核実験場周辺地域は核分裂生成物により高度に汚染した。

1949～1963年はセミパラチンスク核実験場において大気中核兵器実験が行われていた期間である。この間にどれだけの核実験が行われたのかは知られていない。様々な数字が存在する。我々が知りえたのは、1963年までにここで約200回の地上と空中の実験が行われたことだ。核実験場は138回の空中実験と28回の地上実験という別の数字を挙げている。とどのつまり、これらの数値に根本的な差異はない。核実験場が挙げた数値でも、核実験場周辺地域の住民の健康を破壊するに十分で

ある。

カザフ共和国科学アカデミーの高エネルギー研究所のデータによれば、セミパラチンスク核実験場の空中と地上で実験された核爆弾の合計爆発力は、広島原爆の2500倍だそうだ。

1963年から1988年までの期間は、一年半のモラトリウム期間を除き、集中的に地下核爆発が行われ、年間14～18回実験された。1989年については個別のテーマとなりえる。地下核爆発は総合計343回行われた。

人間と放射線

私は放射線医学の専門家ではない。しかし私は存在するデータ - 特に放射線診療センターの資料 - を参照する必要にかられ、さらに専門家たちと話し合い、放射線が人体にどういう構造で作用するのかという問題について深く考えてきた。そうでなかったら、厳しい対立が続く中、核実験の健康に対する影響について明確に語り、私が問題の本質を理解していないと非難し続けた核実験場擁護側の人々と対話を持つのは困難だっただろう。

セミパラチンスク市内に置かれている放射線医学診療センターの研究者は18の学位論文を書き上げていた。しかしそれらは何十年間も閉じられたままで、漸く最近になって読めるようになった。それら論文を読解することにより一層深く人間と放射線の関係を理解できた。

電離放射線は、自然界で絶えず発生している。主に宇宙空間から地球にやってくる宇宙線、そして、放射性核種の崩壊が天然放射線バックグラウンド・レベルを形成している。人間は常にその中で生きている。

人間が年間に受ける天然の放射線線量は、約0.14～0.70レムである。つまりそれは、70年の寿命に対し10から50レムの総量になる。最近我が国で、70年間に35レムという人間が受けても健康に有意な影響のない許容基準が設定された。いくつかの先進諸国ではこの数字は10レム以下である。

バックグラウンド・レベルの範囲内の放射線の生物学的影響は、人間の生体に対し何ら新しい又は特有の害を及ぼさない。なぜなら、事実上バックグラウンド・レベルの電離放射線が常に作用する中で、生命そのものが発生し進化してきたからである。しかしながら人間活動の結果として、バックグラウンド放射線を超過させる人工の線

源が出現した。その活動とは、核燃料又は原料の採掘、処理と利用、核兵器の実験、原発における事故、放射線源を取り扱う各種施設における操作規則違反などである。

残念ながら、現在に至るまで、人間と動物の生体中に放射線の作用を警告できるような特別の組織は見つかっていない。人間は放射線の影響を被っていることに気付けないのである。生体の全ての組織は放射線エネルギーを痛みを感じず吸収でき、そしてこの時に生体内に電離という現象が発生する。つまりイオンが形成されるのである。

放射線に被ばくすると、生体のイオン化の他に、他のマイナスのプロセスも発生する。それは原子の励起（エネルギーの高い不安定な状態になること）である。生体の細胞組織を作っている物質の原子が励起すると、高度の化学活性を持つようになる。通常健康な生体にはない新しい化合物が形成され、複雑な生化学代謝プロセスや細胞と組織の生命活動に異常をきたすようになる。

一言で言うと、これらの物理的プロセス、つまり原子のイオン化と励起は、生体の生死にかかわる重要な機能を直接損傷し、人体の様々な器官と系統に障害を与える。

最も敏感なのが若くまた成長しつつある細胞である。電離放射線の作用に対する感受性において、最も高位に来るのが免疫をつかさどるリンパ組織、次に血液細胞を作る骨髄、性腺、小腸、皮膚と粘膜、血管系、内分泌系、肝臓と腎臓である。

電離放射線の影響により、遺伝的特徴の保持をつかさどっている遺伝暗号が回復不能な状態に陥る可能性がある。これは特に危険である。なぜならこの変化は、世代から世代へと、被ばく者の子、孫、そしてより後世にと伝えられるからである。

人は一生の中で様々な感染症の危険因子 - ウィルス、バクテリア、菌類などの環境内の有害作用 - から身を守っている。この機能を果たすのが、急速に増殖する細胞から構成されている免疫系である。そして、まさにこの免疫系の細胞こそが、電離放射線の影響を最大限に受けやすいのだ。免疫系の一部の細胞は自律的に死ぬ - これは遺伝的性格としてその細胞内に組み込まれているものだ。しかし放射線の作用下では免疫細胞の死が何十倍も何百倍も加速される。免疫系の損傷の結果、人間は様々な病気を前に、防護を失ってしまうのだ。

電離放射線の下で最大の影響を受けるのが、胎児と新生児の免疫系である。セミパラチンスク地域では、新生児の血中免疫能力細胞の含有量が1.5～2分の1に減っていることが確認されている。

ご存じのように、人体は莫大な数の細胞から構成されている。その数はほぼ十兆に

等しい。どの瞬間をとっても、百万個のうちの一つの細胞が変異、言い換えればがん化している。つまり、制限なく増殖する能力を獲得しているのだ。普通であれば、この変異細胞は免疫系の活動のおかげで撲滅され生体から除去される。しかし放射線作用下では変異する細胞の数が大幅に増え、腫瘍の発生と進展に至る。この時、免疫系そのものも同じ放射線の作用下で損傷を受け無力になっているため、腫瘍プロセスの発生頻度が大きく高まるのである。

日本では、広島市と長崎市の住民の免疫をリサーチした研究者が、被爆後35年を過ぎても被災者に免疫力が不足していることを見い出している。

セミパラチンスク放射線医学診療センター職員の研究によれば、セミパラチンスク州の住民の特徴としていわゆる白血球減少症がある。生体中で防護機能をつかさどる白血球が減少してしまっているのだ。ソ連平均の正常基準値が、血液1ミリリットル当たり白血球6～8000個であるのに対し、セミパラチンスクではこの平均値が3000～4400に過ぎなかった。

セミパラチンスク地域において、放射線の作用により引き起こされる腫瘍のグループで特徴的なのは白血病である。この病気は、血液中の異常な白血球の含有量が過剰になるものだ。この病気はしばしば「血液のがん」と呼ばれる。

セミパラチンスク地域における研究によれば、今後10年間には白血病の疾病率の増加が、また今後40年間には他の腫瘍の疾病率の増加が予想されている。

現時点でまだ良く知られていないのは、被ばくに際し人間の遺伝器官にどのような変化が発生するかである。全ての遺伝的欠陥の完全な発現は多くの世代を超えて長期間にわたって起こっていくものだ。

人生に真の価値を

神の申し子の学者と呼ばれたクルチャートフは理念にすべてを捧げていた。超極秘体制と最新鋭の設備の整った超機密軍事設備の中で具現化されていたその理念が、彼にとっての人生の目的となった。

当時、研究つまり自らの仕事に狂信的に身を捧げたクルチャートフや他の学者は、周辺の人々について考えていたのだろうか？ステップに点在していたのは昔ながらの畜産を営むアウル（小村）だったとは言え、しかし人々は生活していた。独創的な頭脳を持ち、科学的先見性に恵まれ、各段階をミクロン単位でとことん精密に計算しえ

た学者たちが、人間やあらゆる生きとし生けるものに対する放射線の悪影響について、知らないでいられた訳がないではないか。

核実験場で最初の原子爆弾の実験が行われた時、周辺地域とセミパラチンスク市には延べ約40万人が住んでいた。

実験が継続されその頻度が上がる中で、人口は増え続け1963年には地域人口は既に65万人に増えていた。放射線医学診療センターの資料によれば、最初の地上原子爆弾実験により約7万人が被ばくした。

1949年から1963年まで核爆発が地上で何度も繰り返された期間では、約50万人の人々が、線量の大小はあるものの、急性及び慢性の放射線被ばくを何回も被った。

1950年代初め、ソ連保健省は何ら根拠なく事態の法的側面を無視し、核実験場周辺に居住する住民の基準許容電離放射線被ばく限度を、年間50レムとする政令を公布した。この政令は実験者に、住民の放射線安全措置を行わなくてよいという権限を事実上与えた。それだけではない、これだけの線量を周辺地域住民は一昼夜で被ばくしていた。一ヶ月での蓄積線量は150～250レムとなっていたのだ。上述したように、現在我が国で採用されている許容線量は人間の生涯70年に対し35レムであり、多くの諸外国ではそれより遥かに低い。

もちろん、このようなアプローチが取られる中で住民の放射線防護をどうしようかというような話が出てくるはずがない。集中して大気中爆発が行われた期間は多年に及んだが、いくつかの町村の住民がいわゆる安全ゾーンに避難させられたのは、ほんの1～2回であった。

設定された安全ゾーンは、避難そのものと同じように、中途半端で形式的な措置に過ぎなかった。住民への呼びかけに携わったのは、核実験場の特別部門と、多くの場合、村議会だった。当時を知る人々の話によると、人々を輸送するための車両は少なく、あわててパニックになり、避難できなかった人も多かったそうだ。しかし避難できた人たちも放射線被ばくから部分的に守られたただけだった。9日後、住民は故郷に戻り、放射性降下物により汚染された土地での生活を続けた。その時の現地の線量は毎時4～50,000マイクロレントゲンであった。なおバックグラウンド・レベルは15～18である。

前章「人間と放射線」という表題の下で、放射線には過去もあり、現在も、また将

来もあることを述べた。放射線は人間の生体に障害を与え、その遺伝子にまで届き、その有害な影響は世代から世代へと引き継がれる。しかしこれはまだ証明されていないのだ。我々はこれを証明する事実資料をもちあわせていなかったのだ。

核実験推進派と反対派の厳しい対立が続いていた。我々は、過去の核実験がどのような影響をもたらすか、まだはっきりとは知らなかった。模索する過程では、我々は、眼の見えない子猫に似ていた。真実はすぐそこにあるに違いなかったが、そこに到達する現実的可能性が見えなかった。行われた多数の爆発による人々の健康と環境に対する影響に関することは、全て秘密記録に保管されていた。

疾病率増加は、環境状況全体の悪化に結びつけることが試みられた。セミパラチンスクには化学工場も冶金工場もなかったし、また野菜や果物の不足もなかったにもかかわらず。

保健省の公式統計は我々の立場をサポートするものでは無かった。我々には統計データが無く、武器が無い丸腰状態だった。

しかし、我々は自分の探求を更に進めた。おとなしく武器を置く気はまったくなかった。秘密をこじ開ける鍵を集めながら、我々は一步一步着実に、部分的とはいえ我々の求める秘密に向けて前進していった。

まず行ったのは、アカデミー会員 S・バルムハーノフの調査隊資料の分析だった。

1958年、アルマティ市地域病研究所の若い学者 S・バルムハーノフは、同僚と共にリスクを承知でセミパラチンスク州の核実験場隣接地域において、空中・地上核実験と人々の健康状態の関連を研究する試みに着手した。カザフ共和国保健省の特別調査隊が編成された。調査隊はそれまで知られていなかった独特な病的徴候の複合症状を発見した。その特徴は、無力症状態、貧血、白血球減少症、リンパ細胞症とリンパ球減少症、皮膚の破壊や他の特殊な病気だった。これらの新しい複合症状は、核実験中における急性及び慢性の放射線作用の結果であると評価された。これらの諸徴候は検査された住民の50～60%に確認された。

この新しい病気は、その症状が発症する患者が最も多かった村の名にちなんで「カイナル症候群」と呼ばれた。これは放射線病だった。

しかしすぐに、バルムハーノフはこの分野の研究継続を禁止された。

バルムハーノフ調査隊の研究結果を改定する目的で、1959年、ソ連保健省生物物理研究所の総合調査隊が同じ地域の住民の中の数的に一番象徴的なグループを対象

とした専門的な研究に従事した。この調査隊の専門家も被験者に同じ複合症状を見出した。バルムハーノフ調査隊の結果の改定は行われなかった。

官庁の公式命令を実施した調査隊は、恐らく、解明された症状を放射線の作用と結びつけるリスクは犯すまいと考えたのだろう。彼らはそれを有害な自然条件とビタミン欠乏症に原因があると結論付けた。

すでに1955年末、ソ連保健省は、明らかに放射性降下物発生を理由に、特別の医療施設 - ウスチ・カメノゴスルク市第三診断センターを開設した。しかしそれは一年半しか稼働しなかった。

1957年3月、セミパラチンスクに第四診断センターが設けられた。その業務は核実験場に隣接する諸地域に住む人々の健康状態の研究と、セミパラチンスク地域における放射線衛生状況のチェックだった。

年月の経過にともない、核実験場における実験はかつてと同じようフルピッチで進められていたが、診断センターはまともな要員も医療機器もなく、その課題を果たせなくなった。ようやく1961～1962年になり、要員が充足され、医療機器が備えられ、小規模で狭い範囲とはいえ与えられた任務をこなすようになった。

このように、核実験場が稼働した最初の13～14年 - 地上と空中で爆発が行われていた期間 - には、住民の検診や治療は何ら行われなかった。

第四診断センターは、過去、放射線衛生状況回復の試みに着手していた。しかし、センターのスタッフは非常にささやかな情報しか持ち得なかった。彼らには核実験場に入ることが許されず、必要な情報も提供されなかった。

研究が行われた期間、診断センターにより診断を受けたのは最も実験場に近い14の町村の住民だけだった。セミパラチンスク市も核実験の影響を直接受ける区域内にあったが、住民の検診は1965年にソ連保健省により禁止された。

最初の10年で約3万人の住民が診断センターで検診を受けた。治療は診断センターの業務には入らなかった。しかし、センターが機能した全期間において診断センターで診断を受けたのは、核実験場周辺区域の被ばく人口の12%にすぎなかった。

とはいえ、これは人体への電離放射線の晩発性の影響解明という目的の研究であり、この研究資料だけが核実験の健康に対する影響を解明するにあたっての唯一の信頼できる情報源であった。

診断センターはセミパラチンスクにあったとはいえ、人々はその存在さえ知らなか

った。建物には、「対ブルセラ病診断センター」の看板が掛かっていたのだ。その資料は30年間に渡り公開されなかった。我々は執拗にそれらの資料を公開するよう要求してきたが拒否され続けてきた。

我々がある程度の希望をかけていたのが、ソ連共産党政治局の決議により設けられた、住民疾病率調査に関する省庁合同調査委員会であった。

その委員長に就任したのはソ連科学アカデミー会員兼医学アカデミー客員会員である放射線医学研究所長アナトーリー・ツイーブ教授だった。調査委員会のメンバーには医学、物理学、生物学、放射線医学および核物理分野における我が国の著名な学者が選ばれた。また州と共和国の最高レベルの医療スタッフも動員された。調査委員会の調査には約200人がたずさわった。

核実験場が開設されて以来初めて、真に科学的根拠のある研究調査が二ヶ月に渡って行われた。これから学会が開かれ、ついに核実験とその生物に対する悪影響についての客観的な真実の言葉が述べられるであろうという期待が抱かれた。人々は、調査委員会からまさに客観性を期待した。ツイーブ委員長の高度の専門知識は誰もが知るところであり、知り合ったばかりの頃の私との一対一のオープンな対談において、または州党委での会談において、自分の姿勢を隠さそうとしなかった。彼は、「外部の事実に基づくだけでも、核実験場周辺の住民の健康に対する大きなマイナス作用についてはかなり決定的な結論を下すことができる」と述べた。しかしセミパラチンスクから遠く離れると、彼は自分の立場を急転させた。所詮は「他人の痛み」でしかなかったのだ…。

「プラウダ」紙（訳注：ソ連共産党日刊紙。「真実」の意）のインタビュー記事（1990年2月12日）「セミパラチンスク核実験場：神話、憶測と現実」では、ツイーブはもう既に我々との会談の時ほどオープンではなかった。彼は核実験場の住民の健康への影響を否定している。ツイーブ研究所長はソ連最高会議の環境と国防の2つの委員会の合同会議でも同様の立場で報告した。

ツイーブ氏が採ったそういった中途半端な立場を説明するためには、軍産共同体の側からの圧力がどれだけ強かったか理解しなければならない。調査委員会メンバーはセミパラチンスクに来る前にまず軍産共同体に呼び出され、そこで準備された結論を持ってやって来ていたのだ。その結論の中にはこのような条項もあった。「サルジャル村」の住民を別のより辺鄙な場所に移住させよ。

このようなA・ツィーブの変遷の歴史は、ペレストロイカが4年目に入ってもなお（1989年）「中央」では中央統制システムに対する信奉が如何に大きかったかということを見てとれる証拠ともいえる。軍産共同体がツィーブのような高名な学者にどのように影響を与えることが出来たのかは知られていないが、彼は簡単に当初の客観的な立場を捨て、ヒポクラテスの誓いを破ってしまったのだった。

調査委員会は1989年5月頭に調査を開始し、6月末にはもう結果を得ていた。

選択的な住民の診断は、被災地域だけでなく、コントロール・グループ（対照群）として核実験場の影響ゾーンの外側にある諸地域の住民に対しても行われた。土壌、水源と食物の放射性核種含有量も選択的に検査された。放射線レベルのモニタリングも行われた。

核実験により周辺住民の健康にもたらされた甚大な被害を裏付ける科学的で有用なデータ得られた。

調査委員会メンバーは、ペロウソフ氏率いる軍事産業委員会からの強い圧力にさらされたにも拘わらず - 彼らは一度ならず委員会に呼び出された - 、地上および空中核実験期間（1949～1963年）における住民の健康に対する深刻な影響を確認し、またいくつかの地域では調査の年までも放射能汚染があったことも確認した。

しかしながらそれと共に、地下核爆発は人々と環境に対しそれほど危険ではないことを証明する企てが開始された。セミパラチンスクにおける地殻表層の放射能レベルは正常範囲内にあることが強調された。

省庁合同調査委員会の調査総括のための地域間研究・実践会議が7月18～20日の3日間開催された。これほどの緊張した静粛さと集中した視線で満たされた空間は、この長い運動の日々の中でも、おそらく他のどこにも存在しなかったであろう。省庁合同調査委員会により準備された70件のレポートのうち、主要な18件がほとんど一息に発表された。残りのレポートは、二巻の会議総括資料に収められた。

調査委員会メンバーが何回か登壇し、ツィーブは幹部席から何回か退席した。多数の事実情報とデータが、大気中と地上における強力な核実験の年月を生きてきた人々自身によっても示された。

3日間の会議中に100人以上が発言した。彼らの多くは地上や空中爆発の時代の実験目撃者そして被災者だった。

彼らの発言をご紹介します。

「実験により家族の体調が長期的に悪化した。母として実験場の閉鎖を求める。」

「近親者の中で六人ががんで死んだ。私自身も重い病気だ。私は子供と孫の健康に対し非常に心配している。」

「体調が悪化する一方だ。1987年に娘がリンパ肉腫により死んだ。核実験は生命と環境にとって危険だ。中止を求める。」

「私は1953年から1955年までチャガン駅で働き爆発を見た。放射性降下物も浴びた。頻繁に病気になり、体調が悪い。両親と兄弟のがんで死んだ。強い揺れにより家が壊れそうだ。既に割れ目がそこら中に入っている。」

「すぐに核実験場を閉鎖する必要がある。子供の死亡率が高い。がんや感染症も。地下実験で大人も子供も病気になっている。血圧が上がり、恐ろしく頭が痛む。」

「私は不安だ。実験後、水道管が使えなくなり、井戸から水がなくなり、泉が涸れている。既に多くの泉や小川がなくなり、干ばつがひどくなっている。」

「実験実施の禁止せよ。私たちの生徒は、別の州の同級生たちよりも体格が弱そうだ。教えている内容の理解が非常に困難なようだ。」

「実験が行われる日には、自分の子供たちの目が恐怖でおびえている！」

「セミパラチンスクに10～15年は暮らしているどの家族にも、実験の被害者がいる。」

「静かに生活し、自分が健康で身体にどこも欠陥のない人間だと感じたい。」

「子供の健康は核実験場にかかっている。実験場は今日ここには必要ない。」

「実験期間中は、労働能力が急激に悪化する。」

「人間に対するこのような愚弄を中止し、人々の健康について考える必要がある。」

「身体的、精神的に苦しんでいる。」

「私たちの寿命が縮まっている。」

「子供たちの病気について聞くときは恐ろしい。」

「実験の中止を望む。実験によって、人々はがんになり、死亡率が高くなっている。」

「子供の明るい未来と核実験場は共存できない。」

「多くの老人たちががんで死んでいる。」

「家が揺れるときは恐ろしい。」

「子供達のために実験場撤去を。」

「実験の時には、窓から飛び出し遠くに隠れたい。三歳の子の血液病は一体どこから

もたらされるのか？」

「核実験場は街の近隣に存在する必要はない。」

「我々の子孫にとって、実験はなにも跡を残さない訳がない。」

「将来の子供のために、実験場閉鎖を。」

「私たちはこれから先どうなるのか？ 私たちの子供に、子供ができるだろうか？」

「核実験場は州内の全ての生き物に影響を与えている。実験は中止しなければならない。」

「核実験があると、寿命が数年奪われることを知っていますか～。特に子供の。」

「40年間、テレビによって「全員異常なし」と欺かれている実験用のウサギのように、ここに住んでいる。」

「こういう隣人がいると、感覚的に常にイライラする。」

「全てが揺れているときに通りに出るのは怖い。」

「私たちは、普通の健康な生活がしたい。」

地域間研究・実践会議は、このように甚大な意義を持っていた。40年に及ぶ沈黙の後、被災地域はとうとう、核実験場についての一定の真実の声を聞いたのだ。ツイープ所長が軍産共同体の隠しようのない圧力の下で、放射能の全ての生物、なによりも住民の健康への深刻な影響を、どう軽く見せようと試みても、初めて声に出されて公言された事実の人々はおののいた。

しかし省庁合同調査委員会の資料は、多年に及ぶ核実験の住民の健康への影響の規模はどの程度かという主要な問題に対する完全な回答は示さなかった。それは何よりもまず、放射線医学診断センターの資料は調査委員会に公開する許可が下りなかったことに原因がある。軍産共同体の圧力を感じた何人かのメンバーは、放射線影響の程度を軽く見せようと試みたが、他の者は概して沈黙を好んだ。調査委員会の結論は、ばらばらで具体性が無く、どちらの側にも取れるものだった。核実験場擁護派は調査委員会資料の公表を要求し、軍産共同体は攻勢を強め、更にツイープは幾つかの自分の客観的結論を公式に撤回し始めた。

このような事態になり、我々が全ての希望を託したのは、セミパラチンスクの放射線医学診断センターの資料だった。軍産共同体そしてソ連保健省との幾度にわたる文書による交渉の後、ついに秘密の刻印を下ろさせるのに成功した。1990年7月のことだった。しかし、明らかに最も貴重な住民の健康と放射線状況に触れる20%の

資料が既に密かに搬出されてしまった後だった。

州の医科大学と医療機関の学者と専門家グループが診断センターの資料を研究した。それらは大気中爆発の時代の晩発的影響について貴重な資料となった。

診断センターの資料は、ソ連及び外国の大多数の学者が支持する人体と動物に対する放射線の影響には閾値がないという基本的なコンセプトを裏付けるものだった。放射線のような非常に有害な因子に関しては閾値は存在せず、例え唯一の放射性崩壊であっても細胞中に深刻な構造破壊を引き起こし得る。それはずっと後になって、腫瘍や他の身体的欠陥として現実化し得るのだ。

被ばく線量が大きいほど、長期の慢性的作用も現れ易く、晩発性の影響もより危険となる。

1963～64年の間に、核実験場の放射線安全局によりセミパラチンスク州地域とロシア共和国アルタイ地方の幾つかの地域内における全ての地上核爆発による放射能軌跡地図が編成された。しかしながら、度重なる要請にもかかわらず、それは州の医療従事者には提示されなかった。地図が秘密となった主な原因は、年間数回の実験による放射性降下物が、実験が行われた13年間で事実上セミパラチンスク州の全域に蓄積されていたからであったのは明かである。当時を知る人によれば、放射性物質の降下は爆心地（デゲレンの山々）から、500～600 kmに及んでいたようだ。これは、幾つかの公文書と放射線医学診断センターの文献によっても証明されている。

現在は我々の管理下にあるこれらの資料および地上・空中核実験の基本データに基づくと、セミパラチンスク地域の住民を被ばく線量によって次の3つのカテゴリーに分類することができる。

カテゴリー 1 : これは爆心から100～150 kmの範囲の地域の住民である。

この地域に該当するのは、アバイ郡、アブラリ郡、ベスカラガイ郡、ジャナ・セメイ郡、チュバルタウ郡、そしてセミパラチンスク市である。

これらの地域の住民の被ばく線量は、実験が行われた全期間で100～200レムで、慢性病を引き起こすリスクが高い。

カテゴリー 2 : これは爆心から150～300 kmの範囲の地域である

これは、チャルスク郡、ジャルマ郡、アヤグズ郡、ポロドゥリー八郡およびノボシユリバ郡。これらの地域の住民の被ばく線量は50レムに及んだ。

カテゴリー 3 : これは爆心から300 km以上離れた地域。これはコクペクティ郡、

アクサト郡、タスケケン郡、ウルジャル郡とマカンチ郡である。実験期間中のこれらの地域の住民の被ばく線量は5から10レムに達しえた。

この区分訳は、ツィーブ氏を長とする省庁合同調査委員会の次の結論でも確認されている：「... セミパラチンスク市、そして爆心から300km以内の地域は、有意な集団線量の被ばくがありえる...。」

人体に対する放射線の最も重要な晩発性影響は、高い腫瘍発症率とがんによる死亡率である。しかし、公式統計ではこの関連性は明らかにされなかった。統計データによれば、セミパラチンスク州の腫瘍発症率は、幾つかの隣接地域より低い場合すらあった。

アカデミー会員ツィーブによる1989年7月19日の地域間研究・実践会議におけるこの重要発言は正当であった。「あなた方の統計は正しくない。准医師が患者の死亡原因について信用出来ない証明書を出している。准医師が上司に注意されるのを恐れて本当のことを書かないという事実も確認されている。がん診療センターの統計は、戸籍登録統計に合致しない。我々は、セミパラチンスク州とセミパラチンスク市の住民の長期間に受けた被ばく線量の影響によるがん発症率増加に関する正確なデータを今の今まで持ち合わせていない。V. ステパネンコにより行われた最新の計算によれば、核実験場の隣接地域の腫瘍発症率は約二倍半増えている。」

診療センターの資料によれば、(実験が始まるまでの)1949年まで、セミパラチンスク住民の全部位のがんによる死亡率は、対照群としてのパブロダール州(訳注：カザフスタン北東部)やペトロパブロフスク(訳注：極東のカムチャツカ半島南端)の1.5~2分の1だった。

1954年からセミパラチンスク市のがん発症率は2.5倍に上昇し、1966年にも、パブロダールやペトロパブロフスクより2倍高いままだった。残念ながら、ソ連保健省の指示により、それ以後のセミパラチンスク市におけるがん発症率調査は中止された。

アバイ郡、ベスカルガイ郡、ジャナ・セメイ郡、アルバリ郡における腫瘍発症率とがんによる死亡率は、コントロール(対照)諸地域の2倍高いことが判明した。ドロニ、チェリョームシキ、モスチク、カラウル、サルジャル、カイナル、バルシャタスのような町村では、被ばくが始まってから6~10年経過後から住民十万人当たりのがんによる死亡率が270~450という数値になった。州全体の2~2.5倍であ

る。これらの町村の住民では、腫瘍のうち胃腸系の腫瘍が80%に達した。

ボロドゥリー八郡、ノボシュリバ郡、アヤグズ郡とチャルスク郡では、がん発症率とがんによる死亡率も、コントロール・グループより高く、個別の年によっては、住民十万人当たり死亡率が270～300に達したこともあった。

全体として、食道がんの疾病率と死亡率は、観察初期に比べて7～8倍に上がった。

公式統計から少し横道にそれ、私のアウル、アクチャタウとその住民や私を導いて下さった方々や先生たちを回想することをお許しいただきたい。なぜなら、おそらくは、人生を生きるということは、過去を分析し、昨日と今日を比較するということがあるからである。私のアウルは、驚くほどおもしろい人々 - 長老たちのことである - に恵まれていた。彼らは、強く、賢かった。コルホーズの畑で早朝から夕方とても遅くまで働きながら、疲れを知らず、困難を恐れなかった。彼らと並んで働きながら、我々たち若者は労働について素晴らしい鍛錬を受けた。

我々のアウルに住んでいて深く敬われていた長老エシェンガジ尊師には、人間の運命を予言する能力があった。アウルの住民は常に尊敬するエシェンガジ尊師のところに行き、自分たちの将来について何を言われるかかたずを飲んで待っていた。もちろん誰も悪いことを聞きたくない。エシェンガジ尊師は、予言に何か悪いことがあっても必ず慰めの言葉を投げかける人だった。

多くのアウルの住民の宿命は私も避けて通らなかった。私も学校七学年（訳注：中学一年生に相当）の時に父に長老の所に連れて行かれた。父は息を潜めてアウルの鍛冶屋の息子について長老がどう予言するかを待った。エシェンガジ尊師は、長い間入念に神聖な本を見つめ、必要な頁を読み、また読み返し、最後に叫んだ。「私はお前の息子に素晴らしい将来を見る。」

エシェンガジ尊師の言葉の中には、人生のあらゆる場合に適応する賢い教訓が響いていた。労働を愛し、人々を尊敬せよ、自分の言葉に忠実であれ、誰の口から発せられようと美辞麗句に惑わされるな、真実に基づいて生きよ、人間の尊厳を侮辱するな、等々。

アウルの住民はもう一人の長老、オラズバイ氏も尊敬し、また少し恐れてもいた。彼は厳格で口数が少ない人だったが、公平で労働を好んだ。私には今でも次のようなことが思い出される。干草刈りの時季の真っ最中だった。オラズバイ氏は干草刈機の

運転手だった。私は六学年を終え、その夏彼の下で牛追いとして働いた。私の落ち度で、方向転換中に小さな草の帯が刈り取られないままに残された。オラズバイは止まるよう命じた。私は牛を止めた。オラズバイは私を革のむちで何回か強く叩いた。全く大したことのないへまに対する罰だったが、私はこれを生涯忘れなかった。後にオラズバイ氏は私にこう言った。「いいか、カザフ人はこう言うんだ。『一人前になったひな鳥は、巣で教えられたことを繰り返す』ってな。」

私はこのように多くの恩師を覚えている。彼らは世界の境界を広げ、知識と精神という光を与えてくれた。

エシェンガジ尊師も、オラズバイ氏も、私のアウルの多くの長老も、私の学校の先生も、その名を「がん」という狡猾な病に倒れ冥界に去った。50年代に放射線を受けた彼らは60年代から70年代にかけてこの世を去った。まさにこの期間に、核実験場の爆心から160～250km離れた私の故郷や他のアウルの住民の大半ががんの犠牲となった。

これら私の記憶は、放射線医学診断センターの次の結論により確認されている。腫瘍の形での晩発性影響は、通常、被ばくの3～4年後には発現し始め、10～15年後または23～27年後にその増加が見られる。そして低線量被ばくの場合は、増加が20～35年後に見られる。

二番目に重要なものが、がん以外の病気の晩発性発現である。そのうちの最大のもののは生体の老化プロセスの加速（早期の老化）と免疫系の障害である。これらも低線量の被ばくであっても発現する。

手持ちの資料によれば、核実験場の隣接地域、またはセミパラチンスク市においても、住民の半数に免疫機能低下 - 身体の防衛力が大きく低下しているということだ - が発現している。他の地域では、免疫機能低下が見られるのは、住民の5～10%である。

免疫機能低下が広まる時の徴候は、成人と子供の感染症と寄生虫病の増加である。症例の40%に急性感染症の慢性化が見られる。

文献データによれば、自然発生的染色体異常又は細胞核物質の正常位置からの偏差は、おおよそ健康な人々の1.5～2%に見受けられる。環境状況の好ましくない地域では、染色体異常が10%に確認されているという報告もある。セミパラチンスク地域には相反した様相がある。カテゴリー の地域では、早い時期に被ばくした住民

の60%に染色体異常が見つかった。

カテゴリー の地域では、染色体異常は住民の40%に見つかった。

細胞の染色体中の遺伝子は遺伝情報を持っており、その損傷は腫瘍や腫瘍以外の病気の発生に至り、遺伝子の損傷は世代から世代へと転送される。

セミパラチンスク地域の住民にとって主要な放射線の晩発性影響としてあげられるものは、赤血球と白血球の異常、そして、白血球減少症と貧血の発症であった。

アバイ郡、アブラリ郡、ベスカラガイ郡、ジャナ・セメイ郡では、生体の防御機能を司っている血液の白い細胞である白血球数の減少が見られる。これは被ばくの6～10年後から始まり、その後今日においても住民の30～40%に見られる。これらの地域の成人と子供の30～35%は貧血を抱えている。

核実験場は子供にもっとも大きな被害をもたらした。州の子供人口のうちほぼ50%がなんらかの慢性病をもち、セミパラチンスク市の子供人口の60%と核実験場隣接地域の65%が健康回復のための療養を必要としている。セミパラチンスクの子供の疾病率は共和国平均の3倍であり、知的障害児数も州平均の3倍に達する。

障害児として生まれついた子供たち。彼らの両親の遺伝子に放射線によりもたらされた遺伝暗号を修正できるような力は、この地上には存在しないのである。

70%の女性に妊娠と出産に支障をきたすと見られる疾病が見られる。共和国平均のは29%である。

現時点で証明されているところによれば、放射線の作用による人体への晩発性影響により日常的でありふれた病気までもが発生する。それは例えば骨軟骨症、糖尿病や、骨、関節および神経系の退化性栄養障害 [degenerative dystrophy] のような病気である。

時間的な変化の観察に基づき、医学研究者は、被ばくした人は速く老化する - 自然の年齢より十年速く老化現象が進む - という警告的結論を下した。

1970年と比べて、州の平均寿命は2年短くなったが、共和国全体では3年長くなった。

地下核爆発の健康に対する影響の可能性は、激しい議論の対象になった。核実験場擁護者はこれをきっぱり否定した。彼らの論拠は、核実験場とその周辺地域の放射線レベルが正常だということだ。50年代に行われた地上および空中における核実験については、彼らの言い分によれば、それは既に過去の出来事であるということだった。

そして今日の地下爆発は無害だということだ。我々には地下核爆発の人間の健康に対するマイナスの影響を裏付ける資料は何らなかった。というより、この問題は未だ研究されていない。

もちろん地下爆発の潜在的危険性は、地上や空中での爆発よりも一桁は低い。大部分の爆発は放射線という観点では事実上安全で、まったくありがたいことに放射能の地上への放出がない。しかしこれがこれらの実験を継続する根拠になるだろうか？もっとも簡単な論理で考えていただきたい。貴方の住宅からたった数十kmしか離れていないところで、地下とはいえ強力な核爆発が行われている。貴方の家は、震度3～5で揺れる（訳注：ソ連の震度は12段階）。建物にひびが入り、井戸水が涸れ、通信網が壊れる。貴方は平静でいられるだろうか？

また大地の中で何が起きているのであろう。地下の衝撃波の伝播による影響は、回復しようのない自然環境の破壊をもたらし、予言不能の悪影響をはらんでいるとする以外の評価はできないであろう。しかし、これについては他の章で詳細に述べる。

公式の情報源から明らかになっているが、地下核爆発の30%は放射性ガスの放出を伴い、周辺地域では天然バックグラウンド・レベルの何十倍や何百倍も上回る放射能汚染が観測され、現実に住民が被ばくの被害を受けている。地下核実験が343回行われてことを考えると、十分に憂鬱すべき事態である。

何らかのいまだ知られていない諸要因が人体に影響を及ぼさないという保証はいったいどこにあるか？地震や爆発時に地表から放出される電磁波や低周波音やラドンが、人々の健康に対し影響を与えないと誰が証明できるというのか？強力な地震の影響によりこれまで予見されなかった質的な変化が最終的に発現しないと誰が証明してくれるのであろうか？

軍産共同体の強力な圧力下にありながらも、省庁合同調査委員会の長A・ツィーブが自分の結論においてこう強調したことは、偶然でありえない。「セミパラチンスク州の核実験場は慢性的な精神的トラウマの要因であり、州の住民の精神的健康にマイナスの影響がある」。

セミパラチンスク州立医科大学の研究者と州の医療専門家は、事実資料を総括し次の結論を下した。

「統計によれば、毎回の核実験が行われた後の4～5日間において医療施設を訪れる人の数が1.5～2倍に増える。持病が悪化したり、頭痛、疲れやすさ、動悸、睡

眠障害、記憶力減退、気力と労働能力の低下を訴える人が増加する。イライラし易くなり、攻撃性が現れる。これら医学的影響は、核実験による地震と電磁波の作用と関連があるとするのが妥当である。これら全ての症状は住民の地下核爆発に対する心理的反応の結果である。」

地下核実験が行われる度に、住民は地震と精神的ストレスという二つの強い有害要因にさらされ、その結果、放射能恐怖症と地震恐怖症に苦しむことになる。

放射能恐怖症は、放射能の現実的および想像上の危険性に対する心理的・情緒的反応の高まりと定義される。それは特別なタイプの神経症グループに属するので、診断、予防そして治療が必要である。それを意図的に軽視しようとする輩もいるようではあるが、放射能恐怖症は非常に深刻な問題であり、決して軽視してはならない。

セミパラチンスクと核実験場隣接地域の住民には様々な精神病と神経異常が急激に増加している。その発症率はコントロール群では5%なのに、同地域では41%にまで達している。

いわゆる「低線量」についての我々の知識が拡大している。ほんの少し前までの多くの生物物理学、生化学や放射線生物学の研究においては、研究者は放射線量を記録し研究してきたが、健康に対する影響を分析したり、更には将来世代への影響を予測したりすることは未だ不可能であり、いわゆる「許容放射線基準量」についての我々の知識は未だ抽象的・理論的な性格を持っているということが示されていたに過ぎなかった。

既に述べたように、大気中核実験を実施していた期間におけるソ連保健省により規定されたセミパラチンスク地域の住民一人当たりの許容線量は、月に150～200レムだった。今日の科学的観点から、許容放射線基準量を再検討してみよう。

今日における許容線量は、70年間で35レムと設定されている。先進諸国における許容集団線量の平均値は、今日我々の国で採用されているものとは大きく異なり、50年で5～10レムである。従って、集団線量の安全性について語ること自体が根本的に間違っている。この場合には、具体的な特定の時代において特定の社会がどの程度のリスク上昇を許容できるかを論じなければならない。市民を尊重する社会であれば、そのリスクの大きさを自由に設定できないのは当然であろう。1987年から1989年2月までの期間で、地下核実験時に10回以上もいわゆる「不活性放射性

ガス」が放出され、セミパラチンスク市および特に核実験場隣接地域の放射線衛生状況が非常に不安定になった。たとえば、1987年5月7日のセミパラチンスク市の放射線レベルは350～500マイクロレントゲン/時に達し、1987年9月18日には45マイクロレントゲン/時に達した。これはいわゆる「希ガス」つまり「不活性ガス」によるもので、それらのガスを構成するキセノン133, 135, 137, 140, 144とクリプトン85, 89, 90, 91, 95などの同位元素からは、ストロンチウム80、ストロンチウム90、イットリウム91、ジルコニウム95、ニオブ95、セシウム137、バリウム140、セリウム144、ランタン140などの生命にとって非常に危険な半減期の長い同位元素が形成されるのだ。

住民に対する低線量の被ばくが許容できないことに触れたのは第一回放射線生物学会における結論だった。「低線量はしばしば以前に強い被ばくをしたことのある住民の健康に対する現実的脅威となりえる。最も感受性が高いのは、遺伝を司る器官、自然免疫機構、造血系と中枢神経系の器官である」。

読者がこれらのガスの一つだけでも、その健康と環境に対する危険性を想像できるように、ソ連国家気象委員長であり、セミパラチンスク核実験場におけ核実験継続の熱心な推進派であるY. イズラエル氏の言葉を引用しよう。「クリプトン85は人間にとって大いに危険であり、その放射線の影響は主に皮膚の被ばくからくる。このガスが大気中にあると空気の電導率が大きく変わり、全地球的な気候変動に至りえる」。

このイズラエル氏の発言は、外国及び我が国の放射線生物学者の研究によっても裏付けられている。

要するに、どんなに低線量の被ばくでも、ある確率で疾病率を高める。これがリスクと呼ばれるのである。

被災地域の放射線状況についての真実をベールで覆うために、軍産共同体の官庁だけでなく、ソ連保健省の特殊部門とソ連気象委員会までが真実味のある根拠を探そうと試みていた。腫瘍、貧血他の疾病率の増加は、構造が環境配慮の措置なしに稼働しているために大気汚染がひどいことによるものであり、また、生活環境の不整備にもよる、というのが彼らが示した根拠であった。

しかしながら、セミパラチンスクは様々な主観的及び客観的理由からその歴史を通じて重工業を全く持たなかった。重工業発展の条件はかつても、今も存在しているのにもかわらず。

セミパラチンスクには34万人以上の住民が住み、伝統的に軽工業と食品産業分野が発達してきて、最近の10年間には建設資材や機械製造などの産業が現れている。しかし、この街には化学工場や冶金工場はいまだかつて存在したことがないのだ。

核実験場と環境

人間は、深く強い絆で環境と結ばれている。本質的に人間の存在自身が自然の一部である。我々はよく、人間は社会的存在である、と言うが、その時にはその生物学的な性質を忘れていないか、その性質を変えようとしているのであろう。

人間が健康でいるためには、環境 - 空気、水、大地、森 - が健康でなければならない。

人間は地球上の生物種の中で最も若輩だ。地球は人類が現れるまで数十億年の間存在していたし、もし人間が自分たちと自然との共存について学ばずに絶滅してしまっても、その後地球はさらに数十億年存在することができるだろう。

人類が自然との共存を学ぶのは簡単ではない。事実、何世紀も何千年間も、我々は自然を利用する哲学を学び、自然と対立する立場からの教育を受けてきたのだから。

自然の恵みの中で生きるためには、その法則を学び、それを壊さないように努めなければならないし、最大限の注意深さと慎重さで人類の文明をそれを取り囲む環境の中に「はめ込」まなければならない。

環境を「改作する」悪意の計画はその軽率な行為に見合った結果をもたらすことを知らない者がいるだろうか？破滅的なアラル海の浅化、バイカル湖の汚染、カラカルパキヤの広大な土壌の塩質化と泥沼化、水力発電所建設時の広大な地域の水没～これらは最も規模の大きな例に過ぎない。これは今までにない状況である。このように全地球的に我々を取り囲む環境は変化しているが、人間が新しい自然環境と生産条件に順応するという環境・生理学的及び社会的諸問題は残念ながら解決されていない。しかしながら、明らかになっている全ての激しい環境の変化の中で最も恐ろしいことがセミパラチンスク地域で起こった。これは一般的な理解の境界を超えた厄災であった。

数十年間にわたって核実験場の活発な稼働が続く中で、土、空気、水そして食品にいたるまでの放射能汚染については沈黙するという悪習が染みついてしまった。核実験による環境への影響についてのあらゆる想定もきっぱりと否定されていた。この問題に関する調査や研究は行われなかった。しかし、この問題に若干の光明を当ててい

るのが、州内にある個別の官庁の管理資料とその結論である。

空中及び地上実験が行われた期間の大気中の放射能状況については先に述べた。その規模についての信頼できる情報は我々にはない。官庁もそれらの期間の放射線地図を我々に提示していない。それでも、食品、露天貯水池の水、また動物の骨の中に鉛²¹⁰が見ついている。これはウラン²³⁸の崩壊生成物である。ウラン鉱床はセミパラチンスク州には無いので、このウランは核実験生成物から発生した可能性がある。

1989年の調査データによれば、小型有角家畜（牛等）の骨の中に見つかった鉛²¹⁰の量は、許容濃度の10倍を超えていた。それらの家畜からスープを取ると放射能の10%が移行し、その量は許容濃度ギリギリのところにあった。

核実験場隣接地域内において伝統的手法で家畜を放牧し水を飲ませている畜産牧場から得られるミルクや肉の中には様々な放射性核種が含まれ、許容濃度を数十倍超えていた。

地下の振動をとり上げよう。地下核爆発時の振動の力は、爆弾の爆発力と実験場所の地質学的条件によって決まる。ネバダ核実験場近隣では多孔性凝灰岩の地盤が多く、爆発の震動波エネルギーを吸収しやすい。爆心から同じ距離、また同じ爆発力では、ネバダ核実験場における地震振動の強さはセミパラチンスクの3～4分の1だった。

セミパラチンスク核実験場は、頑丈な花崗岩の岩盤である。花崗岩は弾性地震動を吸収する特性が小さい。従ってここでの地下爆発は大きな地震動を伴う。

地下での決して少なくない343回の爆発は、そのたび毎に地殻を動かしていた。ほぼセミパラチンスク州全域に広がっている岩盤の発展している環境の安定が壊されたことにより、岩盤の元来の構造が破壊されていった。

地下核爆発の力の前には、山すら立っていられないのではないだろうか。再び自分の故郷に目を転じたい。ドネンバイ山は私のアウル村民にこよなく愛された山だった。私は若い頃しばしばその頂上に登り、その高みから下方に横たわるステップの広がりに見とれたものだった。絵のように美しいドネンバイ山は磁石のように人々を引き寄せた。しかし今ではその姿はもうない。たった二世代が過ぎゆく間に、永遠に立っているように見えた岩山がその様相を変えてしまった。たった人間の二世代という短い期間でだ！

地下核爆発時には、岩盤が粉碎され、新しい亀裂ができる。こうして古代からの地質構造が様変わりし、地盤の沈下や地崩れという現象が引き起こされる。

大きな破壊を被ったのは、砂岩、頁岩から粘土質に至る地盤である。爆発の側面圧縮波による力学的作用の下で、それはきめ細かに粉碎され粘土のような塊になる。

このように剛性の高い岩盤の構造が変化し、亀裂による機械的な破裂が起こったり、新たに弱くなったゾーンが形成されたり、新しい亀裂ができたりする。

地殻の亀裂からの水を得ていた井戸は、核実験場での爆発によって自然の水循環が破壊されたため、水量が減るか、あるいは全く水が出なくなった。

このような水量が少なくなった井戸は、核爆発のたび毎に、核実験場隣接地域内の農場で現れる。近年、村落や家畜に水を供給していた700を超える垂直管状の井戸が使えなくなった。

池水学者の研究によれば、核実験は地下水にも甚大な悪影響を与えた。亀裂にある水には、ウラン、ストロンチウム、セシウムが、許容濃度の何十倍も含まれている。

熱核爆発の主要な生成物の一つは半減期が数千年ある炭素14で、特に大型爆弾の地下実験時には大量に生成される。炭素14は公式にはセミパラチンスク州では発見されていない。もし炭素14がネバダで形成されているなら、セミパラチンスク核実験場でも形成されないはずはない。

炭素14の他、核爆発時には、アルファ放射線源であるプルトニウムの同位体が形成される。プルトニウム同位体がアルファ粒子の源であることを突き止めたのは省庁合同委員会であった(1989年6月5日)。

横穴と縦井戸の中で実験が行われたデゲレンとムルジク地域の地殻の中には、大量の放射性生成物が含まれていることに疑いの余地はない。その中には半減期の長いものもある。そのような場所は産業のため利用できず、人々の立ち入りを禁止し長期間保全しなければならない。この問題、またかつて核実験場の敷地であった地域の問題の解決に関しては、今後の研究が待たれる。そのような研究は核実験場に設立された科学研究センターのプログラムの枠内で行われることになる。

核実験場と経済

セミパラチンスク州、特にその州都は有利な地理学的位置にある。なによりもまず、水源としてまたエネルギーや輸送動脈として重要な、中国から北極海に及んでいるイ

ルティシ川の存在がある。また、トルケスタン・シベリア鉄道が通り、ここにはシベリアから中央アジアに至る幹線自動車道の交差点でもある。セミパラチンスク市の空港には全ての型の最新の航空機が発着できる。

円滑な経済活動のためこれ以上何が望めるだろうか？

州には様々な金属鉱床が豊かにある。15の石炭産地と露頭が知られている。しかしこれらの富が、核実験場に占拠されている土地では凍結状態にあったのだ。既に30年代の当地の調査によれば、デレゲン山とムルジク山には銅の鉱床がいくつもあると記されている。メノウという宝石の大産地もあり、そこではメノウが地表に露出している。メノウを用いて様々な加工品を製造すれば高い経済効果を楽しむことができる。ここでは石炭鉱床「ユビレイノエ」が発見されたが、軍当局に禁止され探査されていない。この石炭鉱床も地表に露出しており、セミパラチンスクから110kmで到達可能である。この産地は露出作業係数1：1で露天掘りによる開発が可能であり、石炭は亜灰分が少なく高カロリーで、コークス製造用に利用できる。

この産地を、諸専門家は東カザフスタンの真珠と呼ぶ。それは、発電及び生活用燃料として、75～100年間セミパラチンスク州と東カザフスタン州の需要を供給できる。専門家の見込みによれば、発見された石炭の埋蔵量は20億トン以上と評価されている。その他、「ユビレイノエ」の石炭は独特の化学的組成をもち、それをベースに巨大な高効率の化学コンビナートの建設も可能である。

「ユビレイノエ」の石炭の化学処理により製造される製品リストは、すでに始まっている詳細探査時の技術的調査の結果により明かになるだろう。すでに今日、この炭層には一連の外国企業が関心を表明している。

軍当局からの探査許可はようやく1991年初めに得られた。州は直ぐに、年間産出量1,000万トンの実用試験用露天掘り炭鉱の建設に着手した。

石炭産地「ユビレイノエ」の北西に、50年代初めのセミパラチンスク地質調査隊により総合鉱山「カラジャル」が発見されていたが、軍当局の禁止により地質探査活動は中断されたままで、今日まで全貌は評価されていない。

鉱石産地には、採掘し採算に見合う濃度のベリリウム、タンゲステン、モリブデン、錫、亜鉛、鉄と蛍石などが眠っている。さらに、高い含有量の金と銀も確認され、エメラルドの結晶も見つかっている。上述の鉱石の埋蔵量をベースに製造される商品の価値は、調査された産地だけでも全体で160億ルーブルを超える。これには鉱床中

の金、銀とエメラルドの価値を勘定されていない。

その他、核実験場の敷地には未調査の産地コスクドック、ジュサリ、ソスノーボエ、「メドニー・プリースク」などがある。

外装用や装飾用の宝石用原石 - 花崗岩、大理石、斑レイ岩、凝灰岩、碧玉の産地もあり、その埋蔵量は数千万 m^3 と評価されている。特に注目されるのが3種類の色 - 黒、暗い青、明るい青 - の斑レイ岩で、装飾性が極めて高いものである。

金の埋蔵量に関しては、セミパラチンスク州は当共和国で最大を誇る。最大の産地はバキルチスコエだが、長期間然るべき開発がなされなかった。セミパラチンスク近くには、精製が容易な鉱石をもち、不純物のないスーズダリスコエ産地がある。

州には埋蔵量が乏しいか、採算性の取れない金を含む鉱床がかなりある。そのような鉱床からは、碎片滲出法により金が抽出できる。

埋蔵砂金属もかなり多い。

セミパラチンスク州の中央部へのアクセスは容易である。開けており、平らで、自動車道も通っている。少ない資本投資で上述の鉱山開発が可能だと思われる。

有効な地質探査作業が行われれば、有用な地下資源の新産地がさらに見つかる可能性も大きい。

これらの全ては、セミパラチンスク市とセミパラチンスク地域が経済的に発展し、採算性の高い知識集約型企業を誘致できることを裏付ける強力な客観的条件である。

核実験場に隣接しているために、州の豊かな経済的潜在能力の開発が抑圧され続けた。「安全性のため地域の人口密度を低く維持するのが妥当」というのが基本的コンセプトであったのだ。要するに産業の開発は必要とされていなかったのである。開発抑制による国民収入への経済的マイナス効果総額は、ある概算によれば560億ルーブルにのぼる。

その他、核実験場として数百万ヘクタールの放牧地が接収され経済活動から外された。そこは牧羊や馬の飼育に必須の条件が揃っていた、もちろん今でも揃っている。その広大な土地の接収は州に大きな経済的・社会的な損失をもたらした。国の債務を地域へ返却する時期が来たのではないか。諸課題は段階的に解決されるべきである。

我々の結論

州の専門委員会は、放射線医学診断センターの資料を研究し総括した。それを読む

と、このような暴挙が可能になったのは、国家と軍産共同体が地域に住む人々のことを顧慮せずに行動したからであった、と思わざるをえない。目的とプログラムの人道性をうたう一方で、彼らは自分の行為の真の内幕を人々から入念に隠し通した。残念ながら、今日でもなお、許されようが許されまいが、あらゆる手段を用いてセミパラチンスク核実験場における核実験の必要性を証明しようと試みる人々がいる。

上記の考えには根拠がないわけではない。これが現実であることは事実により照明されているのだ。

第一の事実。ソ連政府による、地上と空中で大規模な爆発力のものも含めてウラン、プルトニウムと水素爆弾の実験を人口が密集した土地に必要な防護措置なしに行うという決定。それは1949年から1963年までの期間続いた。

第二の事実。一回被ばくの線量が何ら根拠なくソ連保健省により月間50から200レムと設定されたこと。さらに、ソ連保健省による核爆発の影響下のセミパラチンスク州住民の健康診断の禁止。

第三の事実。1965年の、広大な土地が放射能にひどく汚染される原因となった放射能放出を起こした強力な核爆弾実験の実施。

第四の事実。放射性降下物により汚染された土地への住民の帰還。

第五の事実。悲劇の規模の隠蔽。40年間に渡り地域住民の核実験影響に関する健康診断と治療が行われなかった。それどころか、がんや白血病による死亡の客観的分析の実施も禁止された。

これらの事実の下に、セミパラチンスク核実験場において核爆発を継続する道徳的権利は政府にはない。

カザフスタン、特にセミパラチンスク核実験場近隣地域の住民は、40年に及ぶ核実験に耐え、国家の防衛力強化に応分の寄与をしてきた。我々には、自分の死活的利益を国家利益より上におく気持ちになったからといって責められるいわれは無い。

人間には生きるという不可侵の権利がある。その健康と安寧に被害をもたらす可能性に関する情報を得る権利もある。

ある地域での潜在的に危険性のある施設の活動は、その地域住民の合意の上でのみ可能であるべきだ。

国家利益のための事業によりもたらされた、直接的又は間接的な住民の被害は、然るべき手順により補償という形で償われなければならない。しかしながら、常に正当

化できるとは限らない秘密主義のため、地域の人々の健康、環境、経済にもたらされた被害の程度と規模についての一意的結論は、今日なお存在しない。科学的に根拠付けられた補償や優遇措置の基準もないし、健康回復プログラムもない。しかし、これらを規定する必要性は極めて大きい。そのためには関連する官庁が勇気を持ち真実をオープンに語らなければならない。

今まさに被災民に対する補償についての問題が社会的に先鋭化する中、これは非常に重要な課題である。ここで極めて重要なのが、ツイーブ氏の省庁合同委員会による「セミパラチンスク市、そして爆心地から300km以内の地域では、かなりの集団線量の被ばくを受けた可能性がある…」という結論である。

つまり、地上と空中で行われた核爆発によって爆心地から300km以上の距離まで核分裂生成物の局所的な降下があったことは、事実として確認されているということである。

核軍拡競争は全く意味が無く、核戦争の可能性を考慮することや核により反撃できる可能性を考慮すること自体すら、全く反道徳的であることをより強調すべきだ。人類には、人類内部の諸問題の解決のために、この惑星上の全ての生物を殲滅する権利はない。核実験は、一方的にであれ、即刻中止する必要があるのだ。

州党委員会の資料と結論は、州の人民代議員評議会の部会で審議した後、ソ連最高会議の人民保健、環境・天然資源、国防と国家安全の各委員会に送付された。

国民保健委員長Y.ポロジンは私宛の回答書簡の中で、セミパラチンスク核実験場地域にいまだ続いている危機的な社会的状況及び環境状況についての懸念と不安を記している。委員会は我々の地域を環境災害ゾーンと指定し、ソ連最高会議定例会議の議題に、その決議「国内環境リハビリに関する緊急措置」の実施状況に関する政府の報告を含めるよう提案した。中でも特に、セミパラチンスク核実験場における核実験の中止に向けて実施されている措置についての報告を促してくれた。

政府には、核実験被害者の法的地位を明確にし、もたらされた被害に対する補償を規定するよう、また、社会経済的支援とセミパラチンスク核実験場地域の開発に関する国家プログラムを策定するように勧告がなされた。

大規模な核実験が行われ続けた40年間で発生した状況全貌に対する真の対価と、人間の命の価格を規定すべき時が到来したのである。

最終段階において

時は、頑固に前進していきただけで後戻りしない。私たちにはこの永久運動を止める力はない。近年私には、時の歩みが幾分速まったように見える。既に1990年代への入り口の頃を安閑と振り返ってはいられなくなった…。セミパラチンスクでの3年間の仕事と生活はまるで一瞬の出来事のように過ぎ去った。あれほどまでに極度に張り詰めた年月、時間は無かった。州においては、困難ではあったが、死活的に重要な諸問題が解決されつつあった。同時に、多数の新しい経済的、社会的、政治的な諸問題が蓄積されていった。しかし最も差し迫っていたのは核実験場問題であった。

イルティシ川沿いのステップ草原は、春になると特別に優しく、また傷つきやすい。もしかしたら、そのために、1991年春に人々は特に気をつけてセミパラチンスク核実験場の鼓動に耳を傾けたのではないだろうか？ステップ草原を走る馬の心臓の鼓動のようであった核実験場の鼓動が、今では遅くなりまるでこん睡状態にあるようであった。その音は専門家にしか聞こえなかった。主権国家となったカザフスタンは、核実験に「NET(ノー)」と言った。そして人々は熱狂的にこれを歓迎した。

核実験場は一年半以上沈黙していた。一時的なモラトリウムにより、数十年耳をつんざいた苦難の沈滞期は終わったと人々は確信していた。しかし、爆発の無い生活は不安定で不透明であった。これから先どうなるのか？実験の最終的停止という言葉は、未だ聞かれていなかった。

それでも軍産共同体の内奥深くで、そのリーダーと専門家は、爆発力の小さい二つの爆発実験をどうやって実施するかという問題に頭を痛めていた。核実験管理プログラムでの米国に対する義務を履行するためだ。

そして我々は、一日たりとも武器をおいたことはなかった。目的に向け、頑強に、粘り強く行動した。全ての状況が我々にとって有利に展開してくれていた。1991年2月、頑迷な妥協を知らぬ人物ペロウソフ氏が軍事産業委員長のポストから去った。彼と共に、核実験を1993年1月1日までは続けるという非妥協的な姿勢もなくなった。軍産共同体の中の状況が変わり、より好意的になった。原子力産業省を率いていたV.コノワロフ氏は、徐々に核実験場を巡る状況を客観的に評価するようになり、州や共和国と友好的な立場に方向転換した。彼は、カザフスタンとソ連原子力産業省の間の、科学、技術、産業および環境分野における協力プログラム(「カザフス

タン＝原子力産業省プログラム」) 策定を提唱した一人である。

軍事産業委員長にはY・マスリュコフ氏が就任した。彼はソ連国家計画局長を務めていた時、1988年10月4日付けソ連閣僚会議決議「カザフ共和国セミパラチンスク州の経済的・社会的開発の加速に関する措置について」の策定と採択を具体的に支援してくれた。我々はその当時から旧知の仲であった。

マスリュコフ氏は我々の災厄を自分の目で見えて知っていた。同時に彼は軍産共同体の長でもあった。彼の新しいアプローチにより、軍産共同体内での状況は軟化した。今度はなんと軍産共同体の主導で、我々がサポートし、ソ連大統領令案とソ連閣僚会議決議案「カザフ共和国におけるセミパラチンスク実験場の核実験中止について」が準備されていた。

この案の中では、40年以上に渡るソ連国民の莫大な努力によって核の能力が構築されたおかげで、ソ連と米国の戦略的な核の均衡を確保され国家の主権が確実に防衛されてきた事実が客観的に強調された。我が国におけるペレストロイカのプロセスと新しい政治的な考え方が、全人類的な価値観の均衡点を見だし、協議の歩みの中でソ連と米国の核の対立レベルを大幅に低減するための環境を生み出した。カザフスタンは核兵器開発の歴史において、その大地で約500回の実験用核爆弾の爆発を行うという重い負荷を引き受けたのだった。

更にこの大統領令および決議文にはこう述べられている。「現状にいたった現実を考慮し、またカザフスタンの国民の希望に応え、セミパラチンスク核実験場における地下核兵器実験の実施を1992年1月1日から中止する。セミパラチンスク核実験場はソ連邦・カザフ共和国研究センターに改組し、今後その法的地位を規定し基礎・応用研究の基本的方向性を明確にするものとする。」

大統領令案には、核実験場近隣のセミパラチンスク州、カラガンダ州、パプロダール州の社会・経済開発および生活・医療サービス環境向上に関するプログラムを承認することが規定された決議を、カザフ共和国政府と合意した上で、ソ連閣僚会議が採択することがうたわれた。

ソ連閣僚会議決議案には、補償金支払いおよび三つの被災州に対する具体的支援が規定された。我々は建設事業のための設備を極めて必要としていた。従って、我々の強い要求により、この決議案には、軍産共同体の大規模な建設組織がセミパラチンスク州の社会施設建設に従事することも具体的に規定された。これについては施設毎の

提案が具体的に記述された。

我々は、軍産共同体の建設組織の力を借り、一連の重要な社会施設、特に保健関連施設を建設したかった。提案では、三年間で州都と隣接地域に15～17の大規模社会施設や給水および電気供給設備を建設する計画であったのだ。決議案中には大々的な保健プログラムが描かれていたのである。決議案にはさらに医療機器および医薬品、建設機器、食品加工機械、金属管、金属圧延機械、自動車、バスなどの供給、および住民への販売のための乗用車の供給までもが盛り込まれていた。

クルチャートフ市民の社会保障に関する項目も盛り込まれていた。核実験場の閉鎖は彼らにとって死活的なドラマだ。多くの人々の人生が密接に核実験場と結びついていた。当地に災厄をもたらしたのは彼らだが、彼ら自身には罪は無い。彼らはここで生活し働いていただけだ。

決議案により同時に規定されていたことに、アメリカとの地下核実験の共同実施もあった。1991年12月末までにセミパラチンスク核実験場において、爆発力が20キロトンまでの二つの地下核実験をアメリカ人と共同で実施するというものであった。その際、必要な安全措置、ソ連、共和国、州をそれぞれ代表する監視人によるモニタリング、さらには国際的監視の確保が保証されていた。

軍産共同体は、これらの爆発の実施は米国と共同で策定された核兵器制限に向けた管理プログラムの完成のために必要であると説明した。つまり、どこかで誰かが秘密で核実験を行わないように、地下核実験のモニタリング手法を開発するために必要だというのだ。我々は、複数の外国が独自の核兵器開発を目指しているため、そのような管理体制が必要であることは理解していた。そういったシステムは、将来の核爆発全面禁止のためにも必要だった。

一言で言って、大統領令草案とソ連政府決議案は、あらゆる側面が熟慮された文書であった。それは国家、共和国そして被災地域の相互の利害の妥協の上に成り立っていた。

全体としてこれは現実的な案だった。最終段階で課題が明確に設定されていた。しかしこの案はその中に秘密の「爆弾」を抱えていた。住民への補償金支払い及び社会施設の建設と同時に、核実験場で1991年12月に二つの最後の爆発の実施が計画

された。これらの20キロトンまでと制限されていた爆発力は正確には15キロトンで、30～40秒の間隔、深さ600メートルで行われることになっていた。事実上一つの爆発となり、地震動を全く与えないはずだった。

大統領令と決議の準備作業は3月に完了した。州首脳は自らの立場の明確化を迫られた。2年半の間、補償と核実験という二つの問題がお互いに独立して並行に進んでいたが、この文書では軍産共同体と我々の排除し合う利益がついに合流したことを、我々は理解していた。客観的に見れば、これは全く自然な流れと言えよう。それぞれの省庁、それぞれの地域にはそれぞれの利益があるのだから。古代ローマ人の格言にこのようなものがあるではないか。「どんな事業でも、まず関係者の利益が先にある。」

これらの文書の検討作業中で、我々は直ちに「同じ文書で補償と2つの爆発を扱うのは住民の側からマイナスの反応を呼び起こすので、これらの問題を分離する必要がある」とコメントした。しかし、文書が公式機関に受領された際には、全面拒否でなく、2つの案 - 2回の爆発を入れたものと削除したものを - を検討した。地域における現実況を全面的に検討した後、我々は二つの爆発の削除を求めないことを決めた。しかしこう強調した。最終的な意思決定は国民にゆだねるべきだと。歪曲した流言がないよう、労働組合や活動家との会談で説明した。これらの2回の爆発が何を意味し、なぜそれを軍産共同体が強力に主張するのか、更に、大統領令と決議案の本質と中身についてを。

2つの爆発の可能性を容認する際に、我々は「セミパラチンスク核実験場における核実験停止、すなわちその閉鎖は既に決定された問題で、もう頭をもたげることはあり得ない」という現実を出発点にした。我々に残された重要な問題は、病んでしまった地域の健康回復であった。核実験の影響の清算が今最も最優先されなければならない、と我々は強調した。目前には、地域の経済と環境の健康を立て直し、被災民のための基本的な生活水準を確立するという課題があった。

広島と長崎に原爆投下の後、この2つの悲劇的な街は灰燼に帰した。被災者は数えきれず、2つの街の一世代にかぎらないすべての人々が放射線による緩慢な死滅を運命付けられたと思われた。

それから何十年という年月が過ぎた。今我々の目には何が映っているであろう？ 広島と長崎の生活条件は改善され、住民には総合的な治療や健康増進、また知的ポテン

シャルを開花させるための幅広い可能性が整備されている。広島は平均寿命は日本最長である。

理解できない訳はないであろう。この復興は大規模な影響克服の結果であり、国家がリードした国民的事業であったのだ。

補償金の支払いは神聖なことである。これは政府の被災民に対する未払い債務だ。しかし補償金のために闘いながらも、多くの人々は、例えそれが5年間支払われることになったとしても一時金に過ぎないこのお金は、若干暮らしを楽にするだけの力しかないということについては考えない。お金は直ぐに消えてしまう。つまり、補償金では、未だ影響の解消にはならないのだ。誰にも無視できない不可侵の価値がある。それは人々の生命と健康だ。40年余りにわたり、核実験場は一世代にとどまらない人々の運命をへし折ってきたのだ。

核実験場隣接地域は、日常的な社会的貧困さで満ちている。人々は、文化施設の不足、生活の不便、特に貧弱な保健システムといった不幸を耐えている。緊急な解決を要する社会的問題が多く、州都に蓄積していた。

社会的刷新の加速 - まさにここに影響の克服があるのだ。

現実的に、我々が必要としていたのは、資金、資材と建設能力だった。

セミパラチンスク市は、ウスチ・カメノゴルスクでもないし、パプロダールでもないし、カラガンダでもない。それらの都市では、製造企業が高い収入と利益をあげている。1990年の州の製造業は総額1億6500万ルーブルの利益を上げ、その半分が中央の予算に回された。隣接する工業の発展した諸州では高収益企業一社で、セミパラチンスク州の全製造業よりも多くの利益を上げている。このような少額の利益では、我々の発展にはほど遠い。

州は経済的に弱い。大きな潜在力があるのに、核実験場が隣にあるため、その発展の足が引っ張られていたのだ。

新しい環境は被災した我が州に有利にはならなかった。国は経済的混沌の中に陥っている。市場主義への移行に際し、我々は古い経済的構造が根本から破壊されたため極めて困難な期間に直面している。この極めて深刻な経済危機が、核実験場の影響による被害克服を二次的な課題に格下げしてしまった。環境的及び社会的諸問題に一对一

で直面することを余儀なくされ、州がこの状況から自力のみで抜け出さなくてはならなくなるかもしれないという現実の脅威がそこまで来ていた。しかも、極めて制限された可能性の中でそれを余儀なくされるかもしれないという……。

2回の実験が行われようといわれまいと、セミパラチンスク核実験場における核爆発は1992年1月からはもうないだろうということは理解できた。しかしまだ40年間の悲劇的な影響が残される。それをそうやって清算していけるのか？我々の不安はまさにこの問題であった。全ての「賛成論」と「反対論」を検討し尽くした上で我々が2回の核実験を行うことを容認したのはなぜか？まさに大統領令と政府決議に規定される地域健全化プログラムを獲得するためであった。

人生には、より大きなポイントを獲得するために一步譲らなければならない場合がある。この場合、爆発力が制限された2回の実験に同意することはある種の柔軟性の発揮であり、政治よりも住民の社会的平穩を優先させることを我々は深く確信していた。もちろんこれは非常に困難な道であろうとは認識していた。何よりも先ず、世論がある。核実験場を巡っての嵐のような時代を経験した後、住民にとって直ちに冷静にながりがポピュリズムで、ながりがアリズムかを判断するのは難しい。どう我々の考えを人々の認識に届けるかを考えた。労働組合の前で演説し状況を説明すると、多くの市民が我々の立場に理解を示してくれた。

しかし、公然と声高に、「爆発さえなくなれば何もいらぬ」と表明する人々が現れだした。我々も彼らの不安と論拠に同意できた。しかし感情的に白熱した状況の中で、志だけでは影響による被害を克服できるものでない、と説明するのは不可能だった。

自らの活動戦術を変えて、軍産共同体との相互理解を活動の基本とした。今や、核実験場は本質的に閉鎖されており、対立から相互理解に移行しなければならなかった。実際、核実験場を運用しながら、軍はとどのつまりは国家に対する義務を果たしていたのだから。

また、軍事産業委員会内部でも影響力のある勢力が同様の立場に立った。2回の実験を拒否したら、地域に援助の手は全く差し伸べられないだろう。

軍産共同体との協調が始まっていたことを受け、我々はこの官庁と核実験場の莫大な潜在能力を活用して地域を健全化するための方途の模索を続けた。軍産共同体の建設組織を動員し、ベッド数が1080、シフトあたりの来訪者数1000という、予算額約1億ルーブルの総合診療病院が建設された。さらに軍の建設部隊は精神病院の

建設を進め、またその他の医療・文化施設の建設が核実験場隣接地域で始められた。このような大規模な支援が奪われることがあってはならない。総合診断病院建設だけでも、54,000 m³の製造番号1-020のプレキャスト鉄筋コンクリートが必要なのに、我が州のこのタイプのコンクリートの生産能力は年間4,500 m³でしかなかった。つまり、我々独自でこれを建設したら11年かかってしまうのだ。軍産共同体は、この資材量を傘下の諸企業に割り当て、建設工程に応じて納入する計画を立てた。

我々の主張より、政府決議案中には、地域の復興に軍産共同体の大規模な参加を規定したプログラムが盛り込まれた。これは、状況を緊迫させることなしに、相互の利益を考慮した譲り合いによって喫緊の問題を解決するための戦略であった。

1991年夏は記憶に残る猛暑であった。太陽は文字通り人々の耐久力を試していた。水銀柱は30～35 から下がらず、しばしば40 のラインを超えていた。その暑さが毎日続いた。厳しい干害が全地域、すべてのコルホーズとソフホーズを襲っていた。状況は心配された事態に至った。穀物畑が焼け台無しになった。畜産用の主な干し草原である自然の草もなかった。夏の放牧地では水が涸れ、川が干上がった。干ばつは州の経済に大きな損害をもたらした。1990年と比べ、家畜の生産性と頭数、畑の生産性が大きく下がった。状況を深刻化したのは、全般的な農耕機器用の交換部品、燃料の不足だった。しかしながら村人はいつもと同じように全力で働き、可能な備蓄は全て出し尽くした。

夏の状況を分析すると、農業生産の統括者たちに感謝しない訳にはいかない。定期の農業管理会議で、彼らは困難な状況を隠さず、州首脳に要求し論争した。しかしそうした「ガス抜き」の後には、困難な現状は多くの地域に共通の問題であり、州首脳は天から降る贈り物を期待して座ったまま手をこまねいているだけでなく、行動をとっていることを理解して、自分の業務に戻った。当時、国内の数々の地方にどれだけの「急使」が送られ、ガソリン、機具、交換部品、石炭、衣服、タバコ、砂糖の不足を「補充」したことだろう。時には、州に最小限必要な物資を供給するために、等価とはいえないバーター取引も行われた。農民たちは粗野な汁の出るような干し草を貯え、じゃがいもと野菜を育てた。

国内の全体的な政治状況は人々の心境に反映された。住民を騒がせたのは、急な50ルーブルと100ルーブルの紙幣の新札への交換と、その後4月の物価上昇、砂糖、

茶、ウオッカ、タバコ不足の継続だった。悪い出来事が次々と重なり、人々は熱にうなされるような状況に陥った。

この状況の中で、州首脳は住民に食糧を安定供給するためあらゆる措置をとった。穀物とマカロニが店頭から姿を消すことはなかったし、肉、ソーセージ、バターの配給券はタイミングよく食品に換えられ、乳製品と卵の供給中断は特になかった。間近に来た冬期に向け保険をかけるべく食糧の備蓄もそなえることができた。

その場その場で解決せねばならなかったこれらの問題の上に、さらに新たな、核実験場と関連した問題が生じた。

もちろん、住民はセミパラチンスク核実験場におけるあと2回の爆発には反対だった。この問題を巡り議論が白熱した。事実が、噂と憶測を巻き込み雪玉のようにふくれあがっていった。そしてその中心にいたのが私だった。軍産共同体の利益のために動いている、市民の利益を裏切った、核実験賛成に向け扇動している、など、ありとあらゆる糾弾が私に対して行われた。

反核実験場の闘いの最終段階は、私にとって対立段階よりも極めて複雑で困難なものとなった。対立当時、私は我々の背中を住民が押してくれていたことを自覚しており、それが力と確信を与えてくれていた。ところが今や、私とその利益を守りぬこうとして、対立とともに立ち向かった住民側から阻害されるようになってしまっていた。この風がどこから吹いてきているか、私は知っていた。誰よりも先ず、社会的反核運動のリーダーたちからだった。

核実験場の運命は既に決せられた最終段階になって、その閉鎖に関する主導権争いに新しい人々が現れた。世論を味方に付けることを狙って、彼らはよく知られた方法を使った。州首脳部、それも先ず第一に党の首脳部に襲いかかったのだ。これらの人々の何人かは、初めてセミパラチンスクに現れ、ジュリアス・シーザーの原則「来た、見た、勝った」に基づいてふるまった。

私とオルジャス・スレイメーノフが、セミパラチンスク核実験場における核実験の即時中止に関する我々の原則的立場を巡って「傷だらけにされた」時は、どういう訳か様々な運動の側から我々を支援する声は聞こえず、カザフスタン共産党中央委の声明が発表され共和国最高会議の決議が採択されるまでは、我々は本質的に孤独な立場に立たされていた。

私に対するなんでもありの批判が幾つかの新聞に現れるようになり、その中には中

央の新聞もあった。残念ながら問題の深い本質を究明せず、噂と憶測に乗じて、複数の特定の個人の行為を支援し、2つの核実験という「ホット」なテーマを論じることに興じるというレベルの記事ばかりであった。

感情と現実が衝突していた。扇動的なデモが繰り返されるという環境下では、大抵の場合、一時的ではあるが感情が優位となる。この場合も例外でなかった。

2つの核実験を行うべきかどうかという問題の審議が、共和国最高会議の非公開の会談において限界まで灼熱した雰囲気の中で進んだ。あるグループの代議員たちは、騒ぎ、叫び、足を踏みならし、私とA・エレメンコ氏に最後まで発言を与えようとしなかった。最高会議の個々の同僚の中には、先鋭化した状況を考慮し、私に登壇しないように助言した者もいた。しかし私は登壇した。私には、議会に我々の観点を伝える義務があった。残念ながら、私は自分の考えを最後まで述べることはできなかった。

我々は問題の道徳的な側面を忘れていると、非難された。しかし果たして地域の社会的貧困に対し我々に道徳的な責任はないだろうか？議場外では、まるで私が国民を守っていないかのようにささやかれていた。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。なにによって我々の関係に急にヒビが入り、困難な課題解決への協力と崇高な目的が短期間で踏み潰されただろう？汚れ仕事の大部分を引き受けることになった州首脳は、最も大きな課題の重みを自らの双肩で受け止めるはめになった。それでも我々は、リスクを伴う張りつめた我々の仕事の中身について扇動的なスローガンを振り回したり、マスコミを利用したりせずに、淡々と業務をこなした。

州首脳は、地域の諸問題の近くにおり、その解決の経路を見いだしていた。そして、第三者の誰よりもそのことに対して心を痛めていた。まさにそのために我々は、感情の波の高まりの上に作られた手法より、自重した、現実的なアプローチを取っていた。

核実験場の諸問題を巡り感情を人為的に扇動するのは政治的な資産を稼ぐ手法だということを、私は理解していた。これを必要としていた人たちはいた。恐怖をより強く煽り立てるために、慣れ親しんだ方法が採用された。歪曲と噂の上に成り立つデモを組織し、活字を広めることである。

非公式なグループや州都の独立系新聞によって煽られた人々のネガティブな指向の集団が、自分の野心を表明するための題材として、2回の核実験の問題に真っ先に飛びつき、さらに少し時間を空け、最初の補償予算の分配問題を取り上げ始めた。

我々は現実的状况を天秤にかけ、州評議会決議を受け、中央から抛出された補償予算の内さほど大きくない割合を住民の保健と福祉の強化に充てた。これにより各住民は、支給されるべき補償金より25~26ルーブル少ない平均300~310ルーブルを受け取った。直接的な意味では減額ではあるが、実際にはその額は住民に何倍もの恩恵となって還元されるのだ。

そこに悪意の噂が広まった。州首脳が住民から補償金を盗み、自分の懐を肥やしているかのように言われた。「金を返せ、ポスターエフは責任を取れ」という要求の聲が上がるようになった。

この冒涇的な扇動に、過激指向の個々人が飛び付いた。非公式な新聞とジャーナリストが怒りを騒ぎ立てた。扇動を煽ったのは、誰よりも先ず住民の真の利益からかけ離れていた人々だった。彼らにはいわゆる「ホット」な題材が必要だった。我々が採用せざるを得なかった人気の低い対策の受益者たち - 状況の波の中で貧困層となってしまった人々 - も憤慨した。「善をなそうとするな、さすれば悪ももたらされず」が真理だということか・・・。

我々は、新聞、テレビ、ラジオそして労働組合との会合で詳細に説明を繰り返した。人々は最終的には理解してくれて、落ち着いた。

しかしこの出来事は再度私にある確信をもたらした。例え住民のためのものであったとしても、いかなる措置も扇動され間違っって解釈されることがあるということ。

自制するたまの莫大な努力が費やされた。私は、あらゆる反核運動は、我々も含め、アプローチの違いはあるものの、カザフスタンで核爆発を禁止するという共通の目的を追求しているのだという基本的な考え方を出発点とした。目的が一つであるということは、我々は必ず相互理解を見いだすということの意味する。そして健全な考え方が勝利するはずである。

当時、州の首脳、特に私に襲い掛かった攻撃を分析ながら、一体自分の周りに何が起きているのかについて私は長い間考え続けた。当時の複雑困難で不明確な状況下においては、責める理由を見つけ、人々をデモにかき立てるのは全く簡単であることは知っていた。遥かに困難なのが、実際に解決策を組織し社会に対して説明責任を果たすことである。

私は常によく知られた格言「他人の振り見て我が振り直せ」に基づいて行動しようとした。そして、見込み違いや誤りを恐れなかった。なぜならそういう恐れは自分の

全ての仕事を抑制してしまうからだ。なによりも、誰も誤り無しに生きることはできない。どんな抜かりも許さないというのは事実上不可能だ。しばしば自分の善意の行いが、当てが外れるか誤解されて、自分に不利になって返ってくることさえあるというのに。国民の名において行った善意の仕事に、何があっても取消線を引くべきではないだろう。

その間、事態は問題を巻き込み続けながらどんどん発展していった。

幾つかの市民運動のリーダーは、時流に乗り、物価高他の国内で起きたマイナスの現象の張本人として地方政府打倒を大々的に呼びかけ、権威を獲得し人気を確保しようとしていた。個別の独立系新聞には、購読申し込みキャンペーンをひかえて読者を惹き付ける必要があった。市民の利益の擁護者として名を売るために、「ホット」に煽られた事実を利用せずに、他の何を利用せよというのだと言わんばかりに。残念ながら、人々の利益を行動で守ることと、人気取りのための美辞麗句で守ることの境界をすぐに識別できる人は決して多くない。

1991年8月19 - 21日のソ連クーデターは、いくつかの事象を明らかにし、強力な起爆剤の役割を果たした。そこに8月29日が近づいた。セミパラチンスク核実験場で42年前に最初の核実験が行われた記念日である。まさにこの日にナザルバーエフ大統領はセミパラチンスク核実験場の閉鎖命令に署名した。

この命令では次のように述べられていた：

「一．セミパラチンスク実験場を閉鎖する。

二．…セミパラチンスク実験場をソ連邦・共和国科学研究センターに改組する。

1991年中に、その法的地位と主な研究の方向性のリストを検討・確定する…。」

直ちに私は州労働者の名で、ナザルバーエフ大統領宛に電報を送った。

「深く尊敬するナザルバーエフ大統領。

州の住民は貴方により署名されたセミパラチンスク核実験場閉鎖命令の報道に深く満足しております。遂に多民族国家カザフスタンの夢がかないました。私たちは、貴殿の決断力と勇氣に感動しております。これは真に共和国主権の勝利です。

我々は、この措置の後には社会的開発と地域の復興に関する多面的な課題の解決に取り組まねばならないことを、明確に理解しております。」

この大統領令の重要な国際的及び政治的意義について記しておきたい。

知られているように、セミパラチンスク実験場と米ネバダ実験場では、第一及び第二世代の核兵器が開発されている。順番上、次は第三世代の核兵器を開発するはずであった。これに関連してセミパラチンスク実験場での核実験中止は、根本的に大きな意味がある。世界の課題は、第三世代の核兵器、いわゆるピンポイント核兵器作りを許さないことであり、この「魔人」を基礎研究から実用開発の段階に解き放ち新しい核軍拡の悪循環を始めることがないようにすることである。この兵器は、放射能汚染に関しては現行の兵器に比べて百又は千分の一と低レベルだが、一方では、宇宙と地上に位置する敵方の戦略目標を殲滅する能力がある。この兵器は平和時には安全性が高く、そして戦時には高い目標殲滅効率と信頼性を持つという質的に新しいパラメーターを持っている。そしてまさにこれが不安材料なのだ。どこかの国家元首が、頭に血が上る余り、局地紛争発生時にそれを使用しかねないではないか。

セミパラチンスク実験場は沈黙した。しかし、世界は静かではなかった。「核クラブ」の諸国家により核爆発は続けられた。

1990年に米国は9回、フランスは6回、中国は2回、ソ連は北極圏の核実験場で1回の実験を行った。

1991年のセミパラチンスク核実験場閉鎖時点までに、米国はネバダ実験場で5回の核実験を行い、フランスは太平洋で5回実験した。

こういった状況の中でセミパラチンスク核実験場を閉鎖し、それを何よりも先ず平和目的の科学研究センターに改組するというのは、善意の行動であり、核兵器軍拡競争を抑止する最初の決定的な一歩だ。

核実験を行うことなしには、第三世代の核兵器の基本構造の開発は不可能である。

核の均衡に代わる唯一の代替案は、完全な信頼、完全な公開と、全面的な核兵器禁止およびその開発の禁止である。セミパラチンスクにおいてこの目標に向けた道が敷かれたのだ。

最終段階で、クルチャートフ市では別の心理的状況が展開していた。私の軍との間の緊張関係は事実上なくなった。

核実験場所長イリエンコ将軍は、もう会談には出席せず、以前と同じようにとりつく島もなかった。彼の声には益々哀愁と心配のトーンが響くようになった。私には彼の状態がよく判った。イリエンコは、全能の軍産共同体の落とし子で、彼はそれに忠実に成人してからの全人生を捧げてきた。核実験場の閉鎖は彼にとっては悲劇である。

イリエンコ所長は、核実験場が平和路線に転換するという状況を憂えずにはいられなかった。クルチャートフ市が核の軍事開発者 - ここに 40 年余りに渡って創造されたものの唯一全能の主 - の街でなくなったのだ。

将軍は、単なる核実験場所長ではなかった。街全体を含めたこのユニークな施設の膨大で複雑な体制の全てが彼の管轄にあった。一言で言えば、「主人」だった。それが今や、核実験中断と共に、彼は仕事を剥奪されたようになったのだ。

確かに将軍は、働く義務のない生活を始める退役年齢に近づいていた。そう遠くない昔であれば、退役に際して莫大な名誉と褒章が彼を待っていたであろう。ところが今や、静かに注目されずに退役をするだけである。これらの全てから憂鬱な気持ちにならないはずはない。時折イリエンコ所長に会う時には、勇気ある原則に忠実な将軍の心の中に絶望が忍び込んだように見えたものだ。そう目が語っていた。いつだったか、イリエンコ所長は私にこう言った。「ボズターエフ第一書記、貴方に対し私はいつも正直であり、だましたことはなかったよ。」外面的には彼は静かできちんとしていた。しかし、彼には我慢と柔軟性が足りなかった。彼はいらいらしていた。

一度いや二度ならず、私のところに所長の取り巻きの人々がやってきて、イリエンコ将軍を核実験場所長職から交替させる必要があるという考えを表明した。しかし私の部屋から出るとき、彼らは、「あなたのところに来なかったことにしておいてください」と念を押した。

イリエンコ所長に対し、業務に人生を惜しみなく捧げた人物として、深い尊敬の念を持ち続ける人もいた一方、叱責を恐れていた人たちもいた。

状況を把握し、私はゲラーシモフ氏に電話した。しかし彼は所長交代は現時点では妥当ではないことを延々と説明し、次の言葉で締めくくった。

「難所を越えるときには、馬は変えないものだ。」

この結論を否定せずに、私は彼に答えた。

「新鮮な力がないと、難所は越えられないかもしれません。」

人間的に私はイリエンコ所長が哀れに思えた。しかしそれも定められた運命だ。そのような運命に翻弄されたのは彼一人ではなかった。

多く的人是クルチャートフ市で何十年も働いていた。全人生が核実験場と関わっていた。この辺りから優れた専門家や労働者の街からの移転プロセスが始まった。そして新しい問題の解決が、我々の双肩に重い負荷としてのしかかっていた。しかしいず

れにせよ、クルチャートフ市民そして我々全員が、世界的な転換点に直面していたのである。

改組のコンセプト

何十年も核兵器開発のため稼働してきた核実験場は、今日沈黙している。しかし、それは閉鎖されたわけではない。多くの者が考えるように、とてつもない規模の核実験場の活動を一瞬のうちに中止するのは不可能である。核実験場を科学研究センターに改組するというコンセプト自体は簡単なものではない。

設計技師長ボリス・Lが確認した通り、核実験場では未知の複雑な物理実験のための機器、未知の作業のための技術開発、新しいスキーム、新しい計算法などが研究され、地下条件での未知の物質状態についての仮説が検証されてきた。また、核爆発と熱核爆発（水爆）に対する考え方、仮説、想定が確認されたり、破棄されたりしてきた。核実験場は、数千の人々が献身的に無私の境地で働いていた巨大な実験室であった。今や、核兵器の開発や改良のためでなく、今後人類が更に進歩するために必要な様々なプロセスの開発に従事する準備がすでに出来ている。

重要な意義があるのが、特に原子炉、プラズマトロン等の基礎研究用の装置や施設があることだ。これらは、国内的ばかりか国際的にも、上述の研究のベースとなりえるものだ。

核兵器に関しては、その利用を望むのは狂人だけだろう。残念ながら、人類の歴史の様々な段階において、狂人たちが存在したのは事実だ。多分、今日の歴史の教訓は、新しい狂人が出現しないよう防ぐことにある。

我々は、世界中で核兵器を少なくし、その結果として完全になくすため、あらゆることをしなければならない。人々を殺すためのことは何も行われてはならない。人間は、生きるために生まれるのだ。それも、恐れず、自由に、良心と道理に従い、より良く生きるために。そういう生活のためには武器は何ら必要ない。いわんや、核、化学や細菌兵器は。そのような兵器のない生活の中でも、世界、自然、事象について知りたいという好奇心は保たれ続けるのだ。

どうして核実験を、我々は核兵器の改良と新世代核兵器開発にだけ結び付けるのか？ 核爆発の中では、太陽や星の中に存在する自然の側面が開示される。その核心をのぞき込むのは興味深くないだろうか？そこで何がどのように起こっているか理解

することは？ここからセミパラチンスク核実験場で物理的な核実験を行う必要性が出てくる。爆発力0.2～0.5キロトンの地下核爆発は、もっぱら学術目的で、自然を研究し国民経済の課題を解決するためのものだ。

核実験場では、原子力関係の研究者たちが、かつて非常に権威があったが、今やおそらく不人気な研究と応用の分野で働いている。核実験場とは彼らの全人生とその意味が結びついている。核実験場の運命を心配せずに生き抜くことは、彼らにはできない。そうすることは心と良心のない人間になると言うことだ。

核実験場は、これらの研究者を失ってはならない。人類の将来にとって重要な実験が行われる土地に対する彼らの興味を失わせてはならない。

核実験場にはもう一つとても重要な使命がある。核実験場は新しい放射線技術のモデルをつくるための幅広い可能性を備えている。それをうい生産技術を開発し、収穫量を増やし、農産物の保存性を高め、病気を治し、オートメーション技術を高めることができるのである。

さらに、もう一つ重要なことがある。セミパラチンスク核実験場は、住民に原子への嫌悪感、核問題への拒否反応を育んだ。とはいえ、将来の人類の世界的諸問題の解決はまさに原子の無尽蔵の可能性と深く関わっている。

従って原子力拒否は、我々自身の問題の解決も拒否するということだ。

その一例をあげよう。セミパラチンスク市の暖房のためのエネルギー源の不足が先鋭化し、この問題の解決のためにエンジニアリング的アプローチと技術的経験が必要であった。大出力の予算約10億ルーブルの第三熱併給発電所の建設が進んでいた。しかし、建設テンポはきわめて遅い。財政難と建設設備の不足が問題であった。加えて環境学者たちは、この熱併給発電所から放出される硫黄を含むガスが、ステップには珍しい近隣の帯状の松林に深刻な被害をもたらすという危機感がある。さらに、石炭不足もますます厳しくなっていた。第三熱併給発電所の運転に伴い毎日排出される貨車約100両分もの乾いた灰をどこにもって行けばいいのか。問題山積であった。客観的な困難を言い訳に、全ての問題を見て見ぬふりをし、発電所の建設を続けることもできよう。しかし、それでは街の発展の障害となるであろう。環境状況をさらに悪化させながら、この開発が続く寒冷地域への熱供給の問題を解決することもできないであろう。専門家たち、特にコノバーロフ原子力産業大臣と相談し、我々は街からほど近い場所に安全技術の確かな原子力熱供給所を建設する可能性について検討するこ

とにした。これは、原子力で熱だけを供給する施設であり、発電はしない。

こういう原子力熱供給所の基本設計はすでに存在した。それは国際的なものを含めて全ての基準審査を通過していた。原子力熱供給所の建設は、原子力産業省の予算と尽力を借りれば、1996年に完工できる見込みもあった。そうなれば少量のプルトニウムが毎年数百万トンの石炭に取って代わり、住民に対する熱源の価格が火力熱併給発電所に比べ半分に減るだろう。そうなれば、現況の試算によれば、少なくとも予算総額の10%にあたる5000万ルーブルを、住宅、医療施設、福祉文化施設などの建設に投入できることになる。そして原子力熱供給所の運転開始後は、毎月利益の30%が現地行政の歳入となる。原子力が、核実験被害者に対する現実的な支援となるのだ。原子力産業省との合意は得られている。この決定は十分魅力的だが、核爆発により散々苦しめられた人々がこれに乗るだろうか？すでに原子力熱供給所建設反対の声が上がっている。つまり、住民への説明という大仕事が待っているということだった。

しかしながら、人々はチェルノブイリ事故のショックから抜け出しつつある。また、原子力発電産業省には国中から原子力熱供給所の建設に関する問い合わせが寄せられるようになってきた。この省のできることには限度があるにせよ、しかしセミパラチンスク地域は、必要なリソースの配分にあたって優先権を与えられている。

核実験場を科学研究センターに改組した以上、原子力安全性および新しいタイプの発電炉について研究し、原子力発電所と原子力熱供給所の保守のための人材を養成するのは、まったく妥当であるし、現実的に必要とされているといえよう。

旧核実験場が擁する各分野の軍事及び民生の技術専門家、高度の研究及び実験基盤を活用すれば、核爆発なしで、環境に害を与えることもなく、防衛分野の研究を継続できる。

また、旧核実験場の巨大な研究及び技術的潜在能力をもってすれば、巨大規模火災の消火方法の開発、環境的大災害の被害克服、建造物の耐震耐久性研究など、さまざまな地球規模の課題の解決に貢献することも可能だ。

しかし、最大の問題になったのは人口ほぼ3万人のクルチャートフ市そのものだった。核実験場閉鎖に伴い、人々は仕事を失い、市の経済は予算と運用主を失った。

街のインフラを開発し、新しい民生産業を創設し、住民の仕事を確保する必要がある。閉鎖都市体制の問題も解決せねばならない。今クルチャートフ市民にとって重要

なのは外の世界との交流で、民生産業の専門家と経済の指導者を招き入れ、民生産業と軍事産業の力を融合させねばならない。それによりクルチャートフ市評議会を強化し、同市に存在感のあるソビエト権力（評議会による統治）を打ち立てられるであろう。そして市の行政に、段階的に市の経済運営と市民生活のための諸サービスを移管していく。市の法的地位を明確にしなければならない。クルチャートフ市は困難な時期にあり、その諸問題は核実験場の改組の歩みの中で解決されるべきである。

これが、核実験場を科学研究センターに改組することに関する基本的な考えである。これは今日の現状である。実際の生活がもっと多くの助言を与えてくれるであろう。

科学研究センターの研究プログラムの実現は、疑いなく、地域全体の経済・社会問題の活路を切り開き、新しい発展段階への移行を可能にするであろう。また、科学、技術、知性、文化の多くの分野の進歩に向けた刺激となるであろう。

カザフスタンと核実験場との関係の歴史は多面的であるが、今や、相互関係が新しい段階に達するための条件が作られた。これは時代の要求に対応し、長期的な発展の展望を約束するものである。核実験場は、原子力の平和利用を人間活動の多くの分野に定着させるための、ユニークなセンターになるべきである。

しかし、この新しい局面は市民に開かれたものでなければならない。秘密はもう沢山だ！新しい科学研究センターに関することは全て - そのプログラム、研究の方向性、開発の展望、他諸々 - マスコミを通じ広く公表され、高い透明性の中で市民の合意を得て実施されることになる。

これが、今日この一文を書いた時点での、核実験場改組についてのコンセプトである。

「ネバダ - セミパラチンスク」

反核実験場運動の歴史を客観的に遡ってみると、おそらく詩人でありエンジニアでもあったヴァチェスラフ・コプリンという人物に行き着く。この困難な闘いに最初に立ち上がった中の一人だった。州の新聞で公開された彼の詩が、行動への呼びかけとして響き渡ったのだった。

当時、グラスノスチと民主主義という概念にまだ人気が高まりつつある中、詩人の心中がぶちまけられた彼の詩の市民の受け止め方は、ソフトな言い方をすれば、落

ち着いたものだった。それでもコプリンは自分が始めた容易ではないことを頑固に続けた。モスクワに行き、当時のソ連平和擁護委員長ユーリ・ジューコフ氏と、後に新しい委員長ゲンリフ・ボロビク氏と知り合い、彼らの支持を取り付け、セミパラチンスクでは他の活動家と共に平和擁護委員会を作り、その委員長を務めた。

それ以降の核実験場を巡る嵐のような出来事は、平和擁護委員会の活動をまるで脇役のような存在に押し流した。反核運動の舞台により強力に組織化された「ネバダ - セミパラチンスク」運動が躍り出て、その行動の規模、活動内容、リーダーの権威によって、すぐに市民の信頼と尊敬を獲得した。

反核運動「ネバダ - セミパラチンスク」については、多くのことが語られ、パンフレット、記事、インタビュー、コメントが発表され、ドキュメンタリー映画も撮影されている。その中には外国の著者のものもある。従って「ネバダ - セミパラチンスク」について特別なことを話せるつもりもないが、この今日的な運動の流れを簡単に追うことをお許し頂きたい。私のこの運動とそのリーダーたちに対する深い尊敬の念がそうすることを迫るだけでなく、対立が先鋭化した期間に核実験場を巡り起こった全てのことに対する客観的評価が本当に必要だからである。

1989年2月28日。ある記憶に残る出来事が起こった。セミパラチンスクにV. ブカートフを長とする政府調査委員会がやってきたこの日、詩人で雄弁家のオルジャス・スレイメーノフは、カザフのテレビに出演し演説を打った。このスレイメーノフの炎のような演説がセミパラチンスクにおける核実験反対の感情に火を付けたと言える。

同じ日、アルマティで開かれた大勢の人の集まった集会で、スレイメーノフは、国の全ての社会、芸術、宗教組織に向け、ソビエト平和擁護委員会、国際組織「緑の世界」、国際基金「人類存続の運動」に向け、ネバダ州での核実験禁止運動に向けての声明文を読み上げ、カザフスタンにおける核実験中止を要求した。声明文は、直ちに熱い支持と人々の心からの共感を得た。特に、自分の双肩に40年間も核実験の重荷を担いできた人々の共感を。

3月だけで声明文に百万以上の署名が集まり、運動基金には多くの寄付が寄せられた。そして3月11日、この運動について外国の通信社が報じた。平和を愛する地球の人々が運動の目的と課題を支持し、運動との団結を表明した。運動は国際的な認知を得た。

国内外に衝撃を与えた今日の政治的闘争の舞台において、「ネバダ - セミパラチンスク」運動はその高いヒューマニズムと人間愛で際立っており、このことだけをとっても、深い尊敬と支援を得るに十分だった。

運動は人々を目覚めさせた。迷うことなく運動に参加した人や、その影響の下で住民の中で反核の運動を指揮した人の何十人もの名前を私は挙げるができる。作家、評論家、歴史家は、反核運動の歴史の中にこの運動についてのページを書き綴るであろう。

その理想を支持し運動に参加した多くのセミパラチンスクの人々は、労働者の中で、または住民の中で懸命に活動を展開し、運動にどんどん新しい味方を引き込んでいった。

セミパラチンスク・セメント工場の作業班長ペロウーソフ氏を採り上げてみよう。オープンで率直で原則を曲げない人物である彼は、迷わずに核実験場について強固な姿勢を採った。ソ連共産党中央委のメンバーでもあった彼は、大胆にも、政府や軍産共同体代表の高い地位の権威ある人物にも物怖じせず、ソ連共産党中央委総会やその他の大きな会議で発言し、強大な省庁を厳しく批判した。反核の代表団のメンバーとしてもモスクワに赴き、一度ならず様々な会議で発言し、被災地域の利益を主張した。

ソ連共産党中央委第28回大会において、このペロウーソフ氏は発言権を獲得しようと、何度もゴルバチョフ氏と議長に詰め寄ったが、その度毎に拒否された。

指導部の頭には、セミパラチンスク州の代議員に発言を与えたら、核実験場について話すことになるだろうという考えが染み込んでいた。そのため人民代議員大会や他の連邦レベルの会議での演壇は、我々には閉じられたものになってしまっていたのだ。しかし、この時ペロウーソフ氏は主張を押し通し発言権を得た。彼の炎のような演説は大きな関心を引いた。反響を残さなかったはずがないと、私は思う。

「ネバダ - セミパラチンスク」運動の州支部は、医科大学の学科長マラート・ウラザーリン教授が率いていた。クルチャートフ市長エフゲニー・チャイコフスキーとウラザーリン教授は運動の共和国調整委員会メンバーであった。

E. チャイコフスキーは活発に反核の立場を採り、クルチャートフ市の住民に核爆発が継続された場合には不服従するよう呼びかけた。彼は国際的なものを含む様々なフォーラムで揺るぎない確信に満ちた燃えるような演説をし、核実験中止を要求した。

チャイコフスキーの確固とした姿勢に核実験場指導部は不満を覚えており、彼には少なからぬ不快な出来事が降りかかったようであった。

全世界に名を知られているのが、カザフの作家ロラン・セイセンバーエフである。多くの自分の作品、特に近年のものでは、彼は偉大なアバイの故郷、サリ・アルカについて綴った。こここそが彼の祖国でもあった～ここで生まれ、少年時代を過ごしたが、それはまさに地上核実験の開始に時期であった。子供の心が揺さぶられた衝撃を作家は自分の作品の中に明快に表現した。

セミパラチンスク医科大学のマイラ・ジャンゲローワ教授も揺るぎない反核運動家の一人だった。

この運動のイニシアティブで行われた多数の抗議ミーティング、記者会見、国際フォーラムなどは、セミパラチンスク核実験場および全世界における核実験反対運動の原動力となった。

これらの期間を通じ、反核運動において我々は常に「ネバダ - セミパラチンスク」運動と肩を並べて歩んだ。一つの共通の目標「核実験中止と核実験場閉鎖」を掲げて。

残念ながら、核実験場の閉鎖が事実上決定された最終段階で、これは誰の手柄かという問題を巡り騒動が始まった。マスコミに氾濫した記事を読むと、その評価は明確である。「ネバダ - セミパラチンスク」運動のお陰であり、他には貢献者はいないという評価である。

この運動のすべての活動やイベントは広く宣伝され、まさにそのような評価が正当であろう印象が作られていった。そしてこの運動は急激に自画自賛の方向に舵を切った。その多くの活動家は、中には時流に乗っただけの人々もいたが、理由がなんであろうとデモへの参加を呼びかけるだけが自分の仕事と考え、しばしば嘘の噂を流しもした。デモの波は過激主義と異常な精神状態を生み、運動が現実の生活から乖離していった。

「ネバダ - セミパラチンスク」運動の後を追いつき、同一の核実験場の即時閉鎖という目標を掲げたいくつかの別の運動が現れた。その中には、アマンタイ・アシルベーコフが率いた「アッタン」運動がある。初めは彼の断固としたアプローチと激しさに私は警戒したが、後に相互理解が進んだ。アマンタイは、熱い問題は決定的な行動を要求するという自分の運動のモットーを信じていた。これにはおそらく同意しないわけにはいかないであろう。

州首脳は、おそらく建物の基礎を掘る工夫の仕事に例えうる基礎の基礎たる業務にたずさわっていた。我々は、自分たちの仕事を大声で宣伝することには縁遠かった。反対に、官僚主義の迷宮を知り尽くしていたので、声高なフレーズや呼びかけなしに困難な課題をこなそうと努力していた。一般市民たちは、我々が克服しなければいけなかった複雑に曲がりくねった道や高く急な障壁を本質的には知らないものだ。

対立の時期、核実験場を巡る出来事を中心にいた人間としてこれだけは強調したい。セミパラチンスク核実験場閉鎖という歴史的勝利は、市民の支援に支えられ、全ての反核運動参加者、カザフスタン大統領、そして共和国最高会議の共同の努力により達成されたということ。

我々は、「ネバダ - セミパラチンスク」型の運動に賛同する。その大衆性と人道的目標は社会に必要とされている。我々ひとりひとりが公共に尽くさねばならない。我々は共通の目標を持たねばならない。そして、それに向かって手を取り合って、支え合いながら進まなければならない。この道においてはいかなる対立も容認されないのだ。

社会的革新への道：現実性と必要性

新任の指導者は何から手をつけるか？もちろん視察旅行からだ。工場、組織、企業体などを訪問し、町、村、アウル、住民に近づくことからだ。

私は、州党委の第一書記に選任された総会の後すぐに諸地方への出張を計画した。もちろん最初の数日間は州都を回ることに費やした。自分の目で見て全体像を持ちたかった。

セミパラチンスク市を他所の街と見なしたことは決してなかった。この大地自体が私の故郷だ。たとえこの街に住んだことはなかったにせよ。しかし、明らかにこの街は刷新され、常に成長していた。好印象をもたらしたのが、新しい住宅区域と新しい工場、そして中央広場だった。街はその境界を押し広げ、よりよくなっていっている。しかし、他の特徴が私の注意を引いた。街の集合住宅は主に3階建て、4階建てと5階建ての建物でそれ以上の高層住宅は少ない。そのため一階建ての家が相当数あり、そこに約60%の市民が住んでいた。これは、隣接するウスチ・カメノゴルスク市と比べ、普通ではなかった。セミパラチンスクとウスチ・カメノゴルスクの二つの都市は、地理的に同じ線上、太古の昔から流れるイルティシ川の岸辺に位置している。セミパラチンスクは、カザフスタンのイルティシ川沿いにたてられたの町の連なり中の、

ほぼ中央に位置する最古の街である。1991年に建都276年を迎えた。しかし、歴史が進む中、隣町の方が産業を成長させ、兄を追い抜き、より発展した社会基盤を持つようになった。セミパラチンスクには工業基盤がほぼ建設されなかった。そのため文化的中心として発展してきた。

歴史的な状況と過去この街で活躍した才能豊かな人々のお陰で、セミパラチンスクはカザフスタン文化史の中で特別な場所にある街である。街は、どんな文明国にとっても誇りになるような偉人を輩出してきた。この街は我々の数世紀に渡る文化を理解したい者にとって生きた先生であり、多民族の友好と相互発展の源泉である。

街の歴史、ひいては州の歴史の最も素晴らしい一頁は、芸術家アバイ・クナンバーエフの生涯である。今日、彼は世界の精神文化の巨匠たちの中で名誉ある位置を占めている。

アバイとセミパラチンスクはお互い切っても切り離せない存在である。アバイといえばセメイ（訳注：セミパラチンスクのカザフ語名称）であり、セメイといえばアバイなのだ。アバイはその作品と今日なお生き続ける精神性により、昔も今も我々を豊かにしてくれている。

著名なカザフの文化人たちの生涯は、この街と密接に結びついている。そして、ありがたいことにこの街と州は今日も文化人や芸術家を輩出し続けている。

我々の偉大なる同郷人ムフタル・アウエーゾフについては、世界中の読者が知っている。彼もアバイが生涯を送った地方に生まれ、勉学に勤しみ最初の作品を世に出したのがセミパラチンスクであった。

アムレ・カシャウバーエフは、アブラリ郡で生まれ、始めてカザフの音楽を外国で披露した一人だった。彼の比類ない才能は著名な芸術評論家ロマン・ロランにより高く評価されたことはよく知られている。

セミパラチンスクには、過去の様式で建設された文化施設が少なからずある。それらを鑑賞すれば、過去の文化の声を聞き、その時代の生活、風習、流行などに思いを馳せることができるだろう。

このように短縮された紹介からですら、共和国の巨大な文化的中心地の一つとしてのセミパラチンスクの役割を理解していただけるであろう。

今日も芸術や技術の分野での創造的知性が育っているが、そのルーツはアバイ・クナンバーエフ、ムフタル・アウエーゾフ、フョードル・ドストエフスキーやチョカン・

バリハーノフらの時代に遡るのである。このユニークな文化性はこの街を象徴するものである。今日この34万人の州都には、4つの大学、16の専門学校、職業訓練校とアバイの名を冠した音楽劇場がある。

アバイ郡、チュバルタウ郡、マカンチ郡、アクスアト郡、タスケスケン郡などの地方を訪ずれ、私はこの地域には素晴らしい歌手が多いことを確信した。その声は、コンサート・ホールのソリストにもひけをとらない。残念ながら多くの才能が花咲かないままになってしまっており、その原因は少なくない。社会的貧困が人々を閉じ込めているだけではない。僻地まで「手が届いていない」のである。

しかし、街と州の生活環境をよりよく理解するようになると、私には別の印象も生まれた。

社会基盤の貧困さ、住宅不足には愕然とした。住宅不足は共和国のこの全ての都市共通の問題だが、セミパラチンスクでは多くの住民にとって殆ど解決不能というレベルであった。建設能力が全く不足しているのに、その解決について考えられるはずもない。州には住宅建設総合工場がなかった。大型パネルの住宅製造工場はあるが、製造していた型は生産中止となっており、その生産能力も不十分だった。

大昔からイルティシ川が街を二分していた。自動車の荷重に耐える橋は一つで、それは4倍も荷重超過であった。都心部の公共交通機関はバスしかないが、このバスも深刻な台数不足であった。街には標準的な公衆サウナ施設もなかった。

また生活基盤の面で大きく遅れていた。建設予定の建物の建設がすべて完了していた通りは、事実上一本もなかった。

私は、都市は細かな地区割りの原則により設計され総合的な社会施設の建設が行われるものだと思っていた。しかしセミパラチンスク市の建設は明らかに無作為に進んでいた。住宅や施設は、暖房配管と給水管が容易に敷設できた場所に立てられた。明確な都市計画がなかった。これが原因で州都が現代的な姿にならず、生活基盤が整備されなかった。

郡部の中心都市、村、アウルの状態はどうであったかたとえば、現代的な住宅や社会施設が少なからず存在していた。しかし、大部分は粘土の壁と木造の家で、窓は薄暗く、春や秋にはぬかるみで通り抜けられないような穴だらけの道路、そして古くなり傾いてしまったような一階建ての学校と地区病院などが立っていた。多くの公民

館と文化会館は、藁入り煉瓦製の建物を無理矢理そう呼んでいるようなもので、人影まばらであった。

最大の不整備は水がないことだった。またまともな道がないことで住民は不便を強いられていた。2000を超える羊飼いの越冬地には電灯がなかった。そしてこれらの極貧のすぐ横、ほんの数十キロ離れたところに、最新の核実験場と生活基盤が完備したクルチャートフ市があった。

州の幼稚園と学齢前施設の充足率は44%で、そのうち「標準」建築の施設は23%だった。また公民館施設の充足率は44%、うち「標準」が15%だった。学校（訳注：小中高一貫）433のうち、「標準」建築の学校は170だけだったが、その多くは、基準を大幅に超えたクラス毎の児童数だった。

1987年2月、州党委第一書記に選任されてから文字通り数日後、共和国国民管理委員会から一式の書類を受け取った。これは州消費者連盟議長についての詳細な調書であった。

その調書は、議長を留任するか、標準的な処罰を与えた上で解任するか、どちらの判断もできるような内容であった。私は州消費者連盟のシステムの設備基盤について問い合わせた。まさにその状況、および社会的基盤が、議長の評価を決定づけるものと考えたのだ。問い合わせに対して出された資料によると、この最重要分野の設備基盤の管理がずさんであることが明白であった。州消費連盟議長は解任した。

貧困と社会的設備の乏しさは現実だった。社会的設備の相当な遅れに妥協してはならなかった。生活そのものが、第一に解決しなければならない課題を明らかにした。後により深く諸事情に精通できてからは、社会的基盤の刷新こそが核爆発の影響を克服に際しての大前提であることを確信した。

州の諸問題は私の諸問題となった。

州党委書記局と州評議会執行委による状況の批判的分析の後、セミパラチンスク市、郡部、州全体に関する一連の短期的及び長期的な社会的プログラムが採択され、行政の方向性が決まった。

我々は意識的に、そのプログラムが非常に過密で手に余るかもしれないことを承知で自分に課した。全てが実現可能ではないことは承知していたし、批判の炎にさらされることも判っていた。しかし、州の現実的可能性の最大限をこのプログラムに落とし込むことにしたのだ。これには誰からも文句がなかった。

どうあがいても、これは州の力だけでは解決できるはずのない大規模な問題であると理解していた。必要なのはソ連邦と共和国レベルの効果的な支援だった。

1987年から88年の間に、共和国のほぼ全ての閣僚が私の要請により州を訪れた。これが成果を残さないはずがなく、彼らはいずれもある程度の支援を差し伸べてくれた。

1988年2月、ナザルバーエフ共和国閣僚会議議長が州を訪問した。ナザルバーエフ氏は僻地や遅れた郡部も含め、多くの地方を訪れ、自分の目で住民の住んでいる環境を確認してくれた。そして我が州の社会基盤の未整備に対し、無関心ではいられなかった。ナザルバーエフ氏は、自らの考えを次のように表明した。「全面稼働中の核実験場の存在が連邦政府に地域の運命に介入する権利を与えている。この件に対するソ連閣僚会議の特別決議を採択させねばならない」。

共和国政府の長からの支援と理解はよい刺激として作用した。我々は直ちに作業に取り掛かり、直ぐにソ連邦首相(閣僚会議議長)リュシコフ宛の口上書が準備された。それに署名したナザルバーエフ氏はリュシコフ首相と会談し、連邦政府が特別決議を採択することで話が付いた。

多くの読者の胸中には次のような質問が沸いてくるかもしれない。核実験場はこれほど長く稼働していたのに、なぜ1988年になって連邦政府に核実験場の破滅的な影響と支援の必要性が先鋭化した問題として提示されることになったのか？

ここで若干脱線し、連邦省庁による、省庁の利益がからむ地域への支援の問題に触れさせていただきたい。私はセミパラチンスクで働きだしてすぐにこの問題に目を向けていた。核実験場の管轄省庁のひとつであるソ連中型機械製作省(訳注:後の原子力産業省)を採りあげよう。

ウスチ・カメノゴルスクにあるいくつかの大規模工場はこの省に属し、まさにその支援により、共和国東端の僻地の小都市が、わずか数十年の間に、現代的な建物が揃った都市に変身していた。これは中型機械製作省の大きな功績である。産業を発展させながら、インフラを建設する。一般的に非常にまともな手法であろう。

そしてこの省は、管轄の核実験場、管轄の主要な研究センターの位置するセミパラチンスク州に対しては何をしたか？

セミパラチンスク核実験場がフル稼働していた40年間、中型機械製作省と国防省が、クルチャートフ市を除けば、セミパラチンスク州の開発のために1ルーブルの投

資もせず、一つの社会施設も建設しなかったことに、私は驚いている。

もちろん、省庁が核実験によりもたらされた被害の規模を知らなかったためだったということはある。彼らは知っていたのだ。おそらく、核実験場は住民の目から遠く離れた所、ステップ草原の茂みの中にあり、厳格に秘密とされていたという事実が地域の利益を顧慮せずに実験や研究に従事する権利を与えている、とでも言いたかったのであろう。しかし、これは実際の主要な理由ではない。

もし州首脳から粘り強く中型機械製作省や国防省に問題を提議し続けていたら、また、カザフスタン共産党中央委と共和国政府の中に心から被災民のことを心配してくれる人々がいたなら、この高い障壁も克服可能であったと思われる。30～40年昔は「労働の勝利」の幸福感に酔いしれた時代だったことを思い出していただきたい。幸福感は他のあらゆる生活の問題を脇に押し流し、まるで存在しないかのようにしてくれていた。しかし、そんな状況下でも、セミパラチンスク核実験場は稼動し、新世代の核兵器が開発され、国防上重要な他の実験も行われていたのだ。そして時間が過ぎるだけ地域の社会的問題も深刻化していったが、それを気にする者はいなかった。

リュシコフ首相は、ナザルバーエフの口上書に対し「決議案準備」を決意した。最初の重要な一歩が踏み出された。しかしながら、前方には多くの点で予測困難な難題が待ちうけていたことについては、疑いの余地がない。ソ連の省庁をがんじがらめに縛っていた煩わしい細々とした規則や手続きと官僚主義の密な網の中を突っ切って進むのがどんなに困難か、私は経験から知っていた。それでも決議を実現し諸問題を解決するには、それを突っ切っていくしかなかった…。

ソ連国家計画局は、セミパラチンスク州に関する決議採択については基本的に支持してくれた。しかし肝心のカザフ共和国計画局の個々の指導的な地位の官僚の側からかなり深刻な異議が上げられた。

不思議なことに、ソ連国家計画局の役人たちの方がすぐに我々の側に立ち、共和国計画局と論争さえし、我々の利益を援護してくれた。ただ共和国計画局長アブドゥラーエフ氏は我々を支援してくれており、これが事態の帰結を決めた。

V. コルビン氏はなぜかこの件は避けていた。彼は私との会談の中で「どうしてこういう場合に、アルマティのカザフ政府が決議を採択しないのか？」とコメントしたことさえあった

決議案準備に関与したのは州党委、州執行委、州の諸官庁の指導的官僚であり、彼

らは基本的な経済の方向性や総合的な社会福祉問題が抜け落ちないように努め、精力的に作業にあたった。

決議案は、共和国計画局と取り決めたペースで作成された後、ソ連国家計画局に送られた。同時にモスクワに州党委産業輸送部長V・マリーニン、州執行委副議長S・サルセムバーエフとN・コンバーエフらをメンバーとする作業班が派遣された。

作業班はソ連国家計画局に腰を据えた。モスクワに到着したその日から、自らの双肩に計り知れない重圧を感じていた。決議案に35の省庁の合意を取り付ける必要があったといえば、彼らの重い責任を十分押し量ることができよう。

大臣の署名を得るためには、担当者を知らなければならず、その人を通さねばならない。要するに担当部長の受付室での待機に次ぐ待機である。担当部長から予備的な合意をもらい、大臣への拝謁が許される。また、執務室から執務室へと走り回り、必要な人を探し出すことの連続である。そして、ようやく大臣に辿り着くと、大臣はペンの一振り、全ての努力を台無しにすることもできるのだ。個人的な関係を築き、実務的に会話し、説得する能力にかかっていた。リュシコフ首相は、最初の決議案を更に仕上げるよう突き返した。これは我々にはプラスであった。

我々の「使節」たちは何週間もモスクワから動かず、省庁の敷居を跨ぎ続けた。常に私とエレメンコ州執行委員長に電話で事態の進捗について報告があった。私は、一度ならずモスクワに出張し、いわゆる「緊急でこ入れ」を行わなければならなかった。私は、現代の「ホドーク（請願提出者）」の役割を演じた。省庁の壁はとても高く、誰もがそれを乗り越えることができた訳ではなかった、と今でもつくづく思う。

我々の作業班は約二ヶ月間モスクワに居座った、というより、走り回った。そして、その使命が完了する時には、最終的に決議案に合意するため、またソ連閣僚の謁見を得るため、エレメンコ委員長と私がモスクワに飛んだ。閣僚の多くを、私は既に東カザフスタンで働いていたときから知っていた。当時も、重工業発展のための設備と予算を獲得するために、何度も彼らと会わねばならなかったのだ。この個人的な関係は今回も役立った。

1988年6月末、決議案は完成した。それには全部で35の省庁首脳が署名していた。後は国家元首の署名を待つだけだった。我々はここまでたどり着くことを疑ったことはなかったし、最後には確信を持っていた。

このタイミングでソ連共産党中央委7月総会が開催され、ゴルバチョフ書記長の演

説の中で、「国内の深刻な経済状態を鑑み、個別の地域に関する決議案は採択すべきではない」という言葉が響いた。これは深刻な打撃だった。本当にセミパラチンスク州は政府の支援がないままに放置されるのか？

私は中央委総会後の夕方、マスリュコフ国家計画局長を訪ねた。彼は私をすぐに引き入れた。私は彼に決議案について自分の不安を述べ、どれほど深刻な事態にセミパラチンスク州が陥っているか説明した。マスリュコフ氏は明確に述べた。

「我々はこの決議を採択しますよ。」彼の言葉は私を安心させた。しかしその後2ヵ月半の沈黙の期間が過ぎ、中央からは何の知らせもなかった。

9月末、我々はソ連共産党中央委定例総会に呼び出された。10月2日の総会后、私はリュシコフ首相を訪ねた。既に夜10時だったが、待合室にはまだ人々が座っていた。それは他の州や地方の党首脳だった。各人それぞれ自分の問題を持ってここに来ていた。私は自分の順番を待った。遅い時間だったにもかかわらず、首相は私の話に聞き入ってくれた。私は彼に長々と詳細に、州の経済的貧困と社会的状況について、また核実験場の影響について説明した。そしてリュシコフ首相にとっては今聞いたことは全て初耳だったと感じた。彼は私を中断することなく、ごく稀に信じられないというように頭を振った。そして、こう聞いた。

「どうすれば私は貴殿を助けられるのでしょうか？」

「セミパラチンスク州に関する決議案は準備されています。閣下の承認が必要です。」

首相は決然として言い放った。

「よろしい！私はシェカバルドン（閣僚会議事務局長）に言いましょう。」

10月5日、私はタスケスケン郡に出張していた。この地域の経済は着実に発展していた。郡の党、評議会、経済機関と労働組合は、郡党委第一書記D・スルタノフの下で、この新しい郡の発展に意義ある貢献をした。

郡首脳と共に畑や農場を巡った後、私はソ連共産党第25回総会記念ソフホーズのムスタフィン所長室に立ち寄った。

B・ムスタフィン氏は、実務に傑出した、率先して動く農業指導者で、独創的に考え、常に時代の鼓動を感じ取っていた。我々は同じアウルの出で、私は彼を個人的に知っていた。ソフホーズの状態についての話になった直後、電話のベルが鳴った。ムスタフィン氏は受話器を私に渡した。私は聞き慣れたナザルバーエフ氏の声を聞いた

「吉報だ。決議が署名された。おめでとう！」

数日後、我々は州にとって意義の深い文書を受け取った。ソ連閣僚会議決議「カザフ共和国セミパラチンスク州の経済及び社会的開発の促進に関する措置について」である。この決議の施行に関しては、カザフ共和国閣僚会議による対応する決議が採択された。

おそらく、ここで一言付け加えるべきであろう。このようなソ連閣僚会議決議が採択されたのは、国内2地域だけであったと。ひとつは、ムルマンスク州に関するもの。これはゴルバチョフ書記長訪問後のことだ。ふたつ目が、我々の州に関するものだ。

もちろん、ソ連邦決議や共和国決議と言っても、その中で州の全ての問題を扱うことはできなかった。このため、我々は州執行委決議を採択した。その中で、自らの力で実施することになる、最優先の諸課題が明確にされた。

決議の施行は基本的に1990年に始まり、1995年に終了することになっていた。盛り込まれていたのは、重要な社会施設の建設と運用開始、数多くの工場の拡張と改造であった。この期間内に工業生産額は1.8倍、農業は1.5倍の成長を見込んでおり、住民の食糧確保に必要な諸施設の運用開始も予定されていた。この決議の実現に対する全ての条件は整っていた。しかし、ソ連崩壊により決議は施行されない運命となった。

我々はそのような運命を心なしに予感してはいた。しかし、決議により予定されている多くの社会的施設と食糧供給施設の建設に着手でき、一連の工場の改造に着手することもできた。

このように決議は社会施設の刷新と経済開発によい刺激を与えた。

社会施設の刷新に関するアプローチにおいて、我々はもうひとつの重要な課題を取り上げ、その解決に小さからぬ努力を向けることになった。それは建築である。

人々に食料を与え、整備された住宅を与えることが重要であることに異論の余地はない。しかし、人はパンのみで生きるわけではない。我々ひとりひとは時代の子であり、都市や村の建築物は、時代の鏡であり、我々と生活の関係、我々自身との関係を映す客観的なポートレートなのである。

人間の居住環境の正しい建築的・美的解決は、精神的発展の基盤である。我々は建築と美的感覚が貧弱なため、深刻なモラル喪失を招いてしまっている。残念ながら、これらの要素は長い期間然るべく考慮に入れられず、本質的には我々の社会的指向か

ら抹消されていた。そのため、都市も村も陰気な灰色のモノトーンな様相を呈するようになってしまった。さらに州都では一連の歴史的建築物が取り壊されてしまい、その代わりに時代遅れの設計で建設された特徴のない箱物 - 集合住宅、学校、幼稚園、公民館など - が数多く建てられた。標準的設計が数十年間更新されず、多くの社会施設が不適切な建物や建築基準を満たさないような建物に配置されてきたことが更に状況を深刻にした。時が進むほどに、建築的にも美的にも不完全な都市計画、町村、集合住宅地、社会施設が増殖してしまった。

しかし、生活の中に建築の原則と要素を取り込むためには、最高度の知性と新しい考え方を活用せねばならない。これに関しては、我々は未だ人材育成が間に合っていない。この重要な要素は、未だ我々の日常生活の基準となっていないのだ。明らかだったのは、民族として、人間として誇れるレベルに我々の建築の美を引き上げるための運動が必要であるということだった。我々の美的理念は決定的に取り残されていた。

社会施設の刷新に対しては総合的アプローチが必要だった。人々を取り巻く環境が美しく味のある印象をもたらすように、時代遅れの「標準」設計から広く美しい社会環境を建設するという方向に切り替えることが必要だった。

我々は、市民の社会施設の建設とは、広い生活空間を創ることだけでなく、人間の物質的及び精神的な欲求を満足させうる「美しさ」という価値を持っているものでなければならないというコンセプトを出発点とした。

美しい社会環境創造の仕事を始め、我々は問題は決して簡単ではないことを心の底から理解した。資金と少なからぬ時間が必要である。建物、通り、住宅の改造・改築や取り壊しだけでなく、時代遅れの標準設計の建造物を個性的な設計に刷新することが必要だった。

短期間で、住宅、学校、幼稚園の建設のための州にとっては新しいタイプの設計が導入された。シリーズ 85、1 - 090、1 - 020 が導入され、シリーズ 17 の設計導入数が増加した。

セミパラチンスク市の中心部の建築計画プログラムが採択された。個別設計の 12、14、16 階建ての煉瓦・鉄筋コンクリート高層建築が建設され始めた。それら高層建築は、店舗が配置される突き出た一階部が作り付けられた一体構造集合住宅であった。これにより、都市建設の課題を総合的に解決し、美しいファサード（訳注：建物

前面)を創造するための条件が整えられた。

ここ数年で、州都では複数ホール映画館「エンリク＝ケベク」、子供会館、バレエ学校、健康増進浴場センター、医療センター、集合住宅などが竣工した。

マカンチ町、ノーバヤ・シュリバ町、タスケステン町などの郡の中心都市、および企業、学校、幼稚園、医療施設の敷地にも文化会館が建設された。

美的で整備された環境を作る上で重要なのが、日常的なサービスを提供する商業施設である。セミパラチンスク市と農村地域においては短期間で100を超える商業施設が改築もしくは建設された。

これらの施設では、内装材として大理石や花崗岩といった美しい石材が広く用いられ、長期耐久性と芸術的な美的表現性が両立された。また、石膏、石灰岩、モザイクや寄木パネルの床、鏡、木材、個性的な照明器具やシャンデリアも広く用いられた。

美しい社会環境を求める運動が村で始まった。多くの古い建物と施設が美しい「外套」や「シャツ」をまとい、外見を一新した。

古い建物の改築により、目を喜ばず外観に社会施設が生まれ変わったのだ。

これらの文化的・社会的施設の使命が、住民の育成、教育、社会サービスと治療、文化、休息にあることは明かである。中でも主な使命は、才能ある若人の能力育成で、広範な可能性を開き、伸び盛りの世代の莫大な潜在能力を開花させ、人間の身体的及び精神的発達の環境を作ることだ。

私は一度ならず、「住宅も、店も、病院も、極度に不足している時に、美に係わる時間はない。余計な支出になるばかりだ。」という警告めいた非難を聞かなければならなかった。しかし私としては、便利さと美しいフォルムは決して贅沢ではなく、人々への尊敬の現れである、と確信していた。

確かに、このような施設の数はまだ多くない。しかし社会環境を美化するという基盤は敷かれた。採択されたプログラムで、更にこのような建築物の増加が予定されている。今、州都では、個別のプロジェクトとして、体育・健康増進施設、多角的診療センター、浴場総合施設などが建設されている。また、設計が完了している多くの社会施設の建設も始めなければならない。

人々はよいものに惹かれる。店を選ぶにしても、大理石で覆われ鏡壁また天井にはレリーフのある方を選ぶだろう。今そういった店を時代遅れのうす汚い建物に戻したり、全ての集合住宅をフルシチョフ時代の特徴の無い五階建てのものにしたりするこ

とに同意する人がいるだろうか。

美的で整備された多様な建築物が、今後の州の生活において重要な場所を占めなければならないと確信している。

この2～3年で、我々は住宅建設数を2倍、幼稚園と商業施設建設数を1.5～2倍に増やすことができた。

5年間で、69の学校、62の幼稚園が創立された。これはその前の5年間のほぼ2倍である。28の文化会館と公民館が解説された。この本の執筆中にも、州の町々や村々では、34の学校と33の幼稚園が建設されていた。もちろん、一斉にそれらの全ての利用が始まるわけではない。計画や建築基準があり予算難という問題もある。

毎年、州の道路には300kmのアスファルトが敷設されていた。遅いテンポながら、村とアウルの水の供給、羊飼いの越冬小屋の電化を進める作業が行われている。以前は、これらの作業は事実上行われていなかった。州は段階的に大きな建設現場になりつつある。

社会施設の刷新に十分な進歩が進んだと思えた。しかし人々は、これを全く実感していない。社会福祉の基準値との比較においては結果は大きな向上を見せていなかったのだ。多くの学校、幼稚園、文化会館、医療施設はいまだ老朽化した代用の「箱」に入ったままだった。以前と同様に住宅問題は緊急の課題のままであり、特に僻地の農村は貧しいままであった。

我々は依然として社会整備の刷新の基礎づくりをしている過ぎない。しかし、人々に必要なのは基礎ではなく、完成した建物そのものなのだ。つまり、社会施設刷新のテンポをより速めなければならなかったのだ。

1955年、核実験場の拡張のためアブラリ郡が接收され消滅した。行政によるこの行為は、住民に深刻な物質的及び精神的被害を与えた。多くの人々がわずかな準備期間で、何年間も住み慣れた場所を捨て、かまどを失い、先祖の墓を放棄し、強制的に移住させられた。

今、この郡は復興されている。我々は、復興の決定をしたときに、自らに大きな負荷を課したことを認識していた。前途には、捨てられた村の再建、復興された郡の経済・社会面の開発が待ちかまえている。しかし、公正さが勝利したのだ。これはこの郡の住民の精神的再生に莫大な意義を持っているのだ。大勢の元住民が生まれた場所、自分のルーツに戻ったのだから。

「...健康は最高の財産である...」

人類の歴史を通じて、健康は常に、自然からの最大の贈り物として、最大の意義があるとされている。

住民の総体的な健康は、今、統計的な概念として観察され、出生率、死亡率、疾病率、平均寿命等の人口学的な諸指標により測定されている。

人類が、疫学と感染免疫学の基本的な法則を知り、最も危険な感染症の管理を学んでから、ほんの100年が過ぎただけだ。先進国では、ジフテリア、ポリオや結核の防疫に成功した。しかし、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ諸国では、これらの感染症はマラリヤ、ペストやコレラと同様に今だ発生している。

社会的な健康状態が大きく向上したのは、前世紀の30～50年代になってからに過ぎない。しかし、最も進んだ国々でも、循環器系疾病と腫瘍の増加が、更なる社会的な健康状態の改善をかなりの程度阻害している。

それでも、病気との闘いは続いている。医学の研究と実践は、常に新しい治療手法を獲得している。

しかし、医術の主要な目的は健康の維持と強化と見られて、病気の治療は医学原則の副次的部分であった。

しかし、今日、健康と病気を分けることが可能だろうか？どこにそれらの物差しがあり、境があるのだろうか？

健康とは、身体的及び社会的に完全に無病息災な状態であり、病気でないことだけではない。まさに社会の健康状態が、一国の社会・経済的成熟度、文化、福祉の尺度の基本的な基準にならなければならないであろう。

社会の健康状態には住民の生活レベルの向上が反映されるのは周知のことだが、それは社会施設の刷新抜きでは不可能だ。

現代人は、その健康を大きく減退させるストレスと生物社会的環境の急変時に発生する影響に満ちた、複雑な世界に住んでおり、いわゆる「第三の状態」(健康と病気の中間)に陥っている。

セミパラチンスク地域の住民の圧倒的多数は、核実験場の有害作用の結果、第三状態にある。いくつもの病気は既に地域病となっており、それから住民を救うためには第一に環境の健全化が必要である。

もちろん社会の健康状態は - 特にセミパラチンスクのように健康が奪われた地域では - かなりの度合い、医療の発展レベルにより規定される。

州における第一書記としての最初の数週間が過ぎていた。保健の設備基盤を詳細に理解するには時間がかかり過ぎるであろうと思い、初めに州都にある、最善と最悪の二つの医療施設を見せてもらうよう依頼した。

私が連れて行かれた第4小児病院は定員30人だが、何倍という単位で定員オーバーであった。その病院はとっくに老朽化したバラック建屋に収められていた。狭い廊下、支柱、カビの生えた壁、菌によって半分腐った床、垂れ下がった天井、脱衣場も無く、トイレも無い、廊下で受付を行っており、その横で病気の子と母が不安に悩みながら自分の順番を待っていた。各診察室では3～4人の医師が同時に受け入れていた。

このみすばらしさに私はショックを受けた。そこでサリムバーエフ市執行委議長に、一年内に新しい総合病院の建物を建設し、既存のものは取り壊すよう指示した。多分、これは強力な上からの圧力と恣意的な決定と見なされてもおかしくなろう。しかし、この病院はすでに定員150人、診察室30部屋の新しい二階建ての建屋に移っている。

残念ながら、州の保健状態との邂逅は私を一つの結論に導いた。それは、住民は熟練度の高い医療サポートを日常的に期待できていないということだった。問題はスタッフにあるのではない。例えばこの病院自体もそこで働く医師、中級・下級の医療スタッフの多くが住民の信頼を得ていた。セミパラチンスクには医科大学と医療専門学校があったので、基本的に医療スタッフは確保できていた。しかし彼らの真に自己犠牲的な労働は、文字通り砂に染み込む水で、必要な効果を生んでいなかった。確かに、彼らに時代遅れの医療機器でなにができよう。人口34万人の州都で、いわゆる標準型設計で建設された市立病院は存在しなかったのである。市の中央病院は二つの旧式設計の寮として建てられた建物に分割して入っていたのだ。児童精神病院は帝政時代の監獄の転用で、市立小児病院は一階建ての老朽化したバラックに入っていた。大部分の病院は、窮屈で不適切な建物に配置され、幾つかの施設は地下か半地下にあり、ほぼ全ての施設の建物が建築安全基準を満たさないような状態にあった。装備された医療器具は貧弱で、住民に最新の治療技術を広く適用する可能性がなかったことは、言うに及ばない。

老朽化し狭苦しい条件の中で、新しい機器を設置したとしても合理的な利用ができるだろうか？そうしている間にも、患者の数は増え、ひしめき合い深刻な不便を耐えていた。特に、市外から来た患者の多くは、長期間自分の入院する順番を待たされていた。

本質的に、診断 - 治療の流れが断ち切られていて、治療の場所が不足していたために患者はどの位の期間待たされるかはっきりしなかった。こういう条件では、住民が地域の段階的な健康増進を当てにするのは不可能だった。

記憶に残っている出来事がある。水の供給状態と農業用水について詳細に理解するため、私はある日、セミパラチンスク州水建設組合に行くことにしていた。農業を管理していたN・セムバーエフ州党委書記と一緒に行くよう頼んだ。道すがら、セムバーエフ氏に、「第一産院」に立ち寄るよう提案した。

「しかし、そこで何かすべきことはありますか？」と、セムバーエフ氏は反論した。

「状況を知るんだよ」と、私は答えた。

セムバーエフは長年、州の農業分野を指導し、自分の業務は深く理解しており、農業の発展に少なからぬ貢献をしてきた。

しかし、人格の豊かさとは、専門知識が申し分ないことだけで決められるものではない。もし自分の専門外の事に興味がなければ、頭が硬くなってしまって何かを失ってしまっているはずだ。こういう理論が私の人生の信条であった。

産院のひとつの科を見せられた時、私には女性が自分の意思でこんな施設に来ることが信じられなかった。産院から退出し、セムバーエフ氏は言った：

「何というみすぼらしさでしょう！驚きました。農場の獣医室のほうがこの産院よりもまだましですよ。」

後に、建設中の医療施設の一つに「第一産院」が入ることが決まり、元の場所には、個別設計の16階建て集合住宅の建設が始まった。

極めてみすぼらしい状態にあるのが、村の治療施設だ。14の郡の中で標準設計の病院があるのは4つだけだった。幾つかの郡では、病院は老朽化した藁入り煉瓦の一階建てバラックに入っていた。それでもなお、五カ年計画には郡病院の建設は予定されていなかった。さらに恐るべき状況にあったのが、村の診療所、医師補・助産婦駐在所と外来診療所だった。

社会基盤がこうでは、核爆発の影響克服を語ることはできなかった。これ以上この

状態を野放しにしておくわけにはいかなかった。

まず最初にプログラム「健康」が策定された。ここで重要視したのは医療の設備基盤の向上のための方針策定だった。

もし常用の道を行くとすれば、中央から資金を獲得し、規定の期間で建設しようと努力することになるが、このためには何年もが失われるだろう。

この伝統的なアプローチも拒否せずに中央の財源を活用しながら、我々は標準的ではない案も選び、空き地となる敷地を保健施設に割り当て、施設を企業や組織の財源負担により建設することを決定した。

1988年には既にセミパラチンスク市内の3つの地区が消滅していた。これは党機関縮小を求めるデモの波の遙か前だった。空き屋となった党機関の建屋は保健施設に転換されることが決定された。この2～3年の間に、セミパラチンスク市には診断、眼科、小児健康回復、母性保護、民間・伝統療法をテーマとするセンターが開設された。1991年にはカザフ放射線医学・環境研究所が開設されている。

今日、それらの存在と業務は住民にとって当たり前のもので認識されている。しかし、医療センター作りに関する作業に直接関わった何人かしか、これほど広範な分野を網羅する医学センターの活動が集中しているのを知らないので、それについて少し詳しく述べさせていただく。

これらの根本的に新しい医療センターの特徴は、順番を待つ患者がどこにも見受けられないことである。医師と医療従事者全員が、患者のために生産的に働くために必要な環境が整備されているのだ。

建物を医療センターに改造するに際し、我々は一つの原則を堅持した。それは施設に最新の設備を装備するだけでなく、美的デザイン面でも最新のニーズに対応しなければならないということである。劇場はクロークから始まる。これを言い換えれば、つまり、我々の医療センターは玄関ホールから始まるということだ。大理石の壁と床、貴重な種類の木材製の仕上げ材、シャンデリア、大理石張りの柱と階段、レリーフが彫られた天井～これらはすべて今日におけるその顔である。

既存の古い病院と診療所を比較すると、これらのセンターはまだ見慣れないその「貌」の様相により際立っている。しかし、時と共に圧倒的多数の保健施設はこういう「衣服」をまとうと確信している。人々が治療を受け健康を増進するところは、しかるべき環境が整っていなければならない。

現在の政治的な不安定性、経済と社会的な動揺に苦しみ疲れた読者や訪問者の中には、「ここまで・・・」と懐疑的に冷笑する人もいるかも知れない…。我々の立場は一意的である「一日単位で生きてはならない」のだ。

精神的に価値が優先される時間が来ると信じている。そうなれば、今もそう言ってくれる人もいるが、我々の贅沢な医療機関はとうぜん現実の生活に違和感なくとけ込むであろう。

州の住民の半分が住んでいる農村部の保健が改善された。直近2回の五カ年計画で、標準設計の病院として郡部で運開したのはたったチュバルタウ町の一つだけだった。然るに、近年、標準設計病院がゲオルギエフクで建設され、4つの郡の中心市でも同様の病院が建設されている。さらに4つの郡の中心市では、既存の総合病院に個別の棟の増築が進んでいる。コルホーズとソフホーズの独自の力で、農村部の保健ネットワークが展開されている。ただし、最も質の高い医療サービスは、農村部の住民と都市部の住民が新しいセンターというひとつの場所で受けられる診断と治療であろう。

診断センター

診断センターの開設の歴史は、全ソ及び共和国コンクールへの参加に遡る。

1988年春、我々は今後5年間でソ連邦全土に国内外の最新鋭の医療設備が30セット導入されることを知った。カザフスタンには2セットが分配される。そのうちひとつはアルマティに、そしてもうひとつは高いスペックを備える建物を準備できる都市に、ということであった。高レベルの医療設備を獲得する権利を巡って、共和国内の都市が競争を繰り広げ、その独特な競争に我々の州も巻き込まれた。

将来の診断センターは、古いホテル「イルティシ」を改造して収容することが決まった。ソ連保健省特別委員会の全ての要求を考慮しつつ、急ピッチでその改造が行われた。

間取り改造という大仕事が行われ、建物の両側面と前面には、全体的な建築的外観に調和する増築が施されされた。背面にも新しい建物が建てられ、暖かい通路で繋がれた。改造には街の大きな建設会社が総掛かりで参加した。建物外面には白い石灰岩が張られた。主に大理石が内装の装飾材として使われた。改造には250万ルーブルが投じられ、建物の総床面積は3000から7500m²に増えた。

建屋は診断センター創設に関するソ連保健省の全ての要求項目を満たしていた。そ

して我々は、コンクールにおいてソ連に建設される最初の10の診断センターに当選した。

センターが最初の患者を受け入れたのは1989年初めだった。最新の医療機器の納入に合わせて段階的に運営が始められていったが、短期間でフル稼働となった。主な部門は機能診断、放射線診断、検査室診断、超音波診断および内視鏡診断の5つで、日本、オランダ、米国、英国、オーストリアやドイツの一流企業の最新医療機器とコンピュータ設備が備えられた。患者への最大限のケアのために、内科と小児の二つのカウンセリング部も開設された。オランダ「フィリップス」社製の超音波CTは、ディスプレイ上に動いている心臓も表示できる大変ユニークな機器である。超音波により検査する器官の任意の部分の「断面」を映し出す機能を持っている。この機械によって数秒でプリンタから写真を印刷したり、心臓の稼働状況をビデオテープに記録したり、大動脈や大静脈の様々な循環指標をチェックしたりすることが可能となった。

今日診断センターでは、我々の州と隣接するパプロダール州、東カザフスタン州の住民を1日当たり600人診断している。センターのラボでは年間50万件を処理している。

放射線診断科は1990年に26,000人以上を診察した。多くの住民に前癌性疾患などの悪性疾患が見られ、妊婦の子宮内疾患も多いという憂慮すべき結果だった。患者には必要な治療が指定された。

外呼吸機能診断によって地域の疾病率首位を占めているのは気管支喘息と呼吸器アレルギーであることが判明したことは、この診断の重要性を示している。外呼吸機能診断には、国産機器だけでなくドイツ「エリル・エゲル」社の胸腔鏡も用いられた。機能診断科は約32,000件のラボ処理を行い、24,000人以上を診断し、多くの住民に循環器系の病気が見つかった。

診断センターの開設は、保健の根本的再構築の機会をもたらした。センターが住民の健康増進と核実験の影響の克服に大変意義ある役割を演じていることは言うまでもない。今日セミパラチンスク州において、複雑な診断のために患者をアルマティ、モスクワ、または他の都市に送る必要は無くなった。

児童健康回復センター

このセンターは建設されたばかりのある区党委員会の建物に開設された。新築の建

物ではあったにもかかわらず、ここでも改装が必要だった。

1989年初めにはセンターの開設準備は整っていた。

ここには、毎日550人を受付けできる総合外来診療部があり、第一科には日中専用の60ベッド、第二科には入院用40ベッドが常設され、州全体から子供を受け入れていた。

州がこのようなセンターをどれほど緊急に必要としていたかについては、おそらく証明の必要さえないであろう。放射線の作用はある特別の影響力で次の世代に現れる。私はしばしば児童健康回復センター院長のT・ヌルマガムベートフ博士と話をする機会を得たが、話すたびに胸の不安が高まる感覚を覚えた。この治療施設の患者は、重度の貧血、重度の慢性病をもつ子供たちだ。ただの流感を見てみても、この地域の子供にとっては、その経過は平均よりやや重く数日長い。これは放射線の有害な影響による免疫力低下の結果である。

ここで医学的研究によって得られたデータを示させていただく。核実験場隣接地域で生まれた知的障害児数は共和国平均の3倍を超えている。同様に、脱毛は2倍、リンパ球減少症は1.5倍、感染症・寄生虫病と結核も2倍、先天性異常の頻度も2倍である。

もちろん、通常健康回復や治療法は役立たない。センターがまず最新機器の装備と新たな診断法の確立から取りかかったのはそのためである。ここには多方面の専門設備が揃った分析室がある。これにより、患者とその両親の遺伝子を七親等まで分析できる。迅速な分析法で遺伝病の可能性を検証できるのである。センターで働いているのは高資格の遺伝学者ルフィナ・ナシロワである。

現在においても国内唯一の斜視矯正科も設けられている。科長は医科大学のタチヤーナ・テテーリナ教授である。専門診察室にテテーリナ教授に開発され特許を取得した8つの器具が設置された。それらはセンターに無償で供与された。それをうい眼科医は子供の斜視を外科手術せずに治療している。患者の96%がこの不快な症状から解放されたという明るい結果が得られている。

様々な年齢の子供が頻繁に悩まされる症状の一つがアレルギーだ。このセンターでその治療にたずさわるのは医科大学小児アレルギー科のガリア・トレウターエワ教授だ。センターの分析室では毎日400もの検体が処理され、アレルゲンが確定されている。子供には全部で54種類の治療と予防のための療法が提供されている。

1991年、その湖水に治療効果があることで知られているアラコリ湖畔にも、放射線の影響に苦しむ子供のためのセンター支部が開設された。

2年半の間に児童回復治療センターを訪れた子供数は18,500人で、そのうち85%の子供の健康が改善された。子供は毎日通院するので、センターは両親に入院証明書を発行していない。

眼科センター

もうひとつ他の地区党委員会の建物には眼科センターが開設された。ここでも大理石や表面仕上げ材を広く用いた大改造が行われた。

センターは1990年1月にオープンした。その開設により一連の焦眉の問題が解決された。この地域の特徴として、年々眼の病気が増えており、年配者の病気である白内障が「若年化」していることがあげられる。これは放射線影響下での人体の全般的老化と関連しており、核実験が大気中で行われた時期の深刻な影響と評価される。

センター開設に向けた準備は全般的に詳細に渡って行われた。最新機器が装備されるということは、それに対応できる専門家の養成が必要だということであった。多くの医師がカザフ共和国眼科研究所の眼科マイクロ手術総合科学技術センター内のS・フョードロフ教授の医局で研修を受けた。共和国眼科研究所の専門指導員にもセミパラチンスクにたびたび来ていただいた。

眼科センターではどのような種類の治療と支援が提供されているのか？

この眼下センターには、児童および成人のための総合治療室、機能診断室、州共同レーザーセンター、そして、24時間稼働の緊急治療室が設けられている。三つの科に、成人用併せて120ベッドと小児用併せて40ベッドが設置されている。

センターはすぐに多州共同とされた。このセンターおよびセミパラチンスクの全ての医療センターに、パプロダール州、東カザフスタン州、タルディ・クルガン州他のカザフスタンの諸州から、またロシアのアルタイ地方やシベリアからも患者がやってくる。センターには治療に関する相談を求める手紙や感謝状が多数寄せられている。

ほんの少し前まで、当地の眼科医たちは人工水晶体インプラント、緑内障外科治療、血管構造再生、レーザー手術、外科手術のようなものを夢想すら出来ただろうか？ところが今やそれらの治療はここでのごく日常的な治療になった。機能診断について言えば、これにより臨床段階以前の症状、素因、症状進行予測などを非常に繊細なレベ

ルで検知することができるようになった。

1990年に総合診療室を訪れた人の数は2万人以上で、そのうち2,000人以上は他の州の住民だった。入院者数はのべ3,000人以上で、2,200を超える手術が行われた。全患者数の85%に手術が行われた。これらの数字は多くを語っているが、何よりも先ず、核実験の影響が如何に深刻であったか、また眼科センターの開設が如何に望まれたものだったかを示している。さらに重要なことは、センターのスタッフはセンターにとどまって治療をしていたのではないということだ。彼らは、州の諸地域 - 核実験場隣接区域は特に重点的に - に出張し、専門健診を行い、疾病率算定などを行っていた。

眼科センターの医者はある結論を持っている：核実験場隣接地域では眼科病疾病率はロシア共和国平均標準を25%上回っている。これは生体の老化が早まった結果である。

センターができるまでは人々が何ヶ月も入院の順番を待ち、外来診療さえ受けられなかったが、現在そのような問題はない。

母性保護センター

女性の地位は、社会的性格や環境変化の尺度であり、またバロメータである。また女性の地位には、結婚の安定性、出生率、住民の健康、子供の養育等の多くの重要な社会問題のルーツが集まっている。社会に多く発生する現象とプロセスは、女性の問題というプリズムを通すとより明確に見えるようになると言っても誇張ではあるまい。核実験場が稼働していた年月、州人口の半分を構成する女性たちは、激しい感情的動揺の道を歩んでいた。

セミパラチンスク州には21万人の出産可能年齢の女性がいる。彼女たちの健康状態が年を追うごとに悪化しているという現状が確認されている。

女性の貧血症疾病率に関しては、州は共和国で第一位を占めている。早産、未熟児出産、先天性異常、早期の老化も増えている。州にとって深刻な問題となったのが小児婦人病で、年端も行かない女の子たちがこの病気に苦しんでいる。不妊症は共和国平均の2倍である。

しかしながら、婦人科のベッドの充足率は50%未満である。不妊症の入院治療用ベッドはひとつもない。婦人病の若い女性のためのベッドもない。産後の合併症の専

門治療部門もないのだ。

今日、我々の未来の問題の解決を討議せねばならないと言える。我々の未来がどうなるかという問いへの回答は、健康な子孫にある。健康な子供を産み養育できるのは健康な母だ。母親の健康は、我々が多くの重要な問題をいかに解決するかにかかっている。それら問題は、国家的重要度の問題として取り組まなければならないと考える。有名なフレーズ「健康な女性 = 健康な民族」は、今日の我々の環境の中で特別の意味を持ってしまっているのだ。

母性保護センターの開設は緊急課題であり、それが開設されれば多くの女性の問題が解決されるであろう。ベッド数 110 の母性保護センターは引き渡され改造された建物に収容されたばかりである。

ここでは全てのサービス - 治療、健康回復、カウンセリング - が女性の支援というひとつの目的にするため展開される。センターの2つの手術室は、医師の丈夫さ、衛生、美しさについての意見に基づき、明るい色調の大理石で装飾された。美的観点が考慮された設計となっている。

民間・伝統療法センター

我々は住民の健康維持および増進に関する問題の解決に向け、あらゆる新しいアプローチを探求した。これを可能にしたのが、伝統療法・民間療法を採用していた医療組合であった。組合では、個人で開業する医師が増えていた。州内、特に州都では、住民は様々な医療組合、民営小規模病院、開業医、または医学教育を受けていない人々の医療サービスにかかることが増え、サービス対し現行標準価格よりかなり高い額を支払っている。そしてこのプロセスは後戻しできなくなり、より重要なことに、管理不能になってしまっていた。

こういった状況、および住民の間で伝統療法・民間療法の人気が高まっている状況を考慮し、我々は民間・伝統療法センターを創設することを決定した。このためにいわゆる「小ホテル」の建物が引き渡され、その改修工事に約 100 万ルーブルが投資された。

センターの課題は、民間・伝統療法と公式医療のさまざまな手法を最適な組み合わせで用いることによる病気の予防、診断、治療、リハビリ、住民の健康増進である。

センターには、生体エネルギー療法科（人体の生体エネルギーにより病気の診断と

治療をする)、ホメオパシー科(植物やミネラル等の天然素材からなる薬を極微量使用して治療を行う。人工物を加えない治療法。)、用手療法科(脊椎、関節およびそれらに繋がる筋肉、靭帯などの疾病を手によって治療する・・・指圧など)、虹彩診断科(目の虹彩の状態による診断)、薬用植物療法科、心理療法科、治療体操科、マッサージ科、鍼療法科、接骨科が開設された。

センターでは賢明な東洋の儀礼が復活した～子供の包皮の切断(割礼)である。

広範な住民層のために、自己トレーニング、瞑想、自己コントロールの講座も開設された。センターの人気は急速に高まり、現在1日300人以上の来訪者がある。

放射線医学・環境研究所

前述したように、1990年7月10日にセミパラチンスク核実験場の幾つかの問題についてのソ連最高会議決議が採択された。

この決議により、アルマティにカザフ共和国保健省管轄でカザフ放射線医学・環境研究所を創設し、その支部をセミパラチンスク市に設置することが規定されていた。しかし我々はその研究所はアルマティではなく、セミパラチンスクに設け、支部をクルチャートフ市に - つまり放射能に被災した地域に直接 - 置くべきだと固執した。この提案はカザフ保健相A.アマンバエフにより支持された。

1991年2月、セミパラチンスク市に研究所本部、クルチャートフ市に支部を置くことを定めたカザフ共和国閣議決定が採択された。

研究所は、セミパラチンスク市にあった以前の放射線医学診断センターをベースに設立され、そこに実験室、設備、スタッフ、研究資料が引き渡された。そして研究所は直ちに最初の諸課題に着手した。

研究所の設立のスピードは多くの要因のおかげだが、何より住民の健康回復が緊急に必要とされていたからだ。

最近まで医学研究者、そして住民も、放射能からの被害は腫瘍としてのみ現れると見なしていた。確かにそのリスクは高い。しかしより深い放射線影響の研究によれば、被害は遥かに深く大規模だ。その他の被害とは遺伝メカニズムの破壊、免疫力低下、生物的老化の加速等である。アメリカと日本の研究者は、放射線作用の晩発的影響と若年性糖尿病、異種特異的多発性関節炎、骨軟骨症などの症状との直接の関連性を見出した。このようなことが放射線医学の問題である。

この研究所の基礎になった放射線医学診断センターの研究室の固く閉ざされたドアの向こうでは35年間にわたって秘密の研究が行われていた。核実験場の隣に住み放射線被ばくを被った人々を選択的に調査・診断し、豊富な資料が蓄積されていた。今、その秘密の壁が破られ、データが研究所に引き渡されることによって、放射能被ばくした住民のために供せられるようになった。

研究所の基本的な研究方向が定められた：

- 環境、人間、動物にとって環境的に重要な放射能及び他の要因の研究と共和国諸地域における放射線状況の予測
- 放射能と非放射能要因の人体への混合作用について診断、治療、疾病予防と総合リハビリの体系的開発
- 臨床基礎研究と実験に基づく放射線安全システムの開発
- 核実験により影響を受けたセミパラチンスク地域における放射生態学的環境の調査。

これらの全ての分野において医学研究プログラムが策定されるだけでなく、より重要なことは、被災民の治療、健康増進とリハビリのためのプログラムが実施されることである。

研究所の最重要課題の一つは、核実験場の長期稼働の結果この地域の地方病になってしまった免疫機能障害の特質にかんする研究を総合的に進めることだ。我々は住民の半分が免疫機能障害に苦しんでおり、これが住民の健康状態向上の大きな障害となっていることいることから出発した。免疫研究科が置かれ、そこで免疫学、細胞遺伝学及び免疫化学の分析ができるラボが設置された。その研究対象は、カザフスタン北東地域における免疫機能障害の広がりや構造、免疫機能障害形成への放射線およびその他環境的マイナス要因の影響、免疫機能障害の進展メカニズムとされた。

研究所はこれから放射能が残した不気味な痕跡を辿ることになるという訳である。

臨床条件における診断法開発のために、研究所は入院病棟を必要としており、それは本稿執筆時に設計段階にある。この新しい研究所は前途洋洋である。遠くない将来、それがフル稼働するとき、核実験場の影響を克服する闘いに、意義ある貢献をもたらすと信じている。

さらに、上述のソ連閣僚会議決議により、1990年第 四半期から、セミパラチンスク州およびセミパラチンスク核実験場隣接のパブロダール州とカラガンダ州にお

いて衛生環境、放射能状況および住民の健康状態の総合的研究を実施することが関連官庁に委託された。この調査では特に空気中・地上核実験が行われていた1949～1963年に上記の諸地域に住んでいた住民の健康状態に特別の注意が払われた。

住民に核実験の影響に関連する疾病が現れた場合には、ソ連保健省とカザフ共和国閣僚会議がソ連労働厚生国家委員会と共同で、これらの住民に対して相応の補償を供与する義務を負うことになる。研究所はこの問題の解決において大切な役割を担うであろう。

総合病院

この施設は1993～1994年にかけて段階的にオープンさせる予定である。これについて書くのは時期尚早と思われるが、敢えてこのユニークな施設について詳しく話そうと思う。

この総合病院の導入により、医学研究発展と医療スタッフ人材育成をベースにした高度な専門性をもつ医療サービスを住民に対して提供することが可能となる。総合病院建設の考えが生まれたのは、州の保健システムの設備基盤について理解した時であり、最終的に決断したのは、住民の健康状態にかんする真の現状を理解したときであった。五カ年計画中には総合病院建設は予定されていなかった。当時、そのような施設の建設は、ソ連国家計画局によって策定される五カ年計画の枠内で決定される習わしがあった。

当時のセミパラチンスク市党委ウリヤーノフ第一書記とクルチャートフ市党委サフローノフ第一書記を伴い、私は再びモスクワにやって来ていた。まず国家計画局の関連部を回り問題の本質について簡単な事前説明を行った後に、ソ連国家計画局長タリージンを訪問した。彼の元へ向かいつつも、我々にはある種のためらいがあったのは仕方のないことであった。タリージンは、国のありとあらゆるところから陳情にやってくる人々の扱いに慣れていて、我々も冷たく迎え入れ、最後までこちらの話を聞かずに、こう遮った。

「貴方には自分の共和国があり、自分の国家計画がある。それにこの施設は五カ年計画には採用されていません。五カ年計画の投資配分はすでに決まっており、もうこの件をとりあげるのは無理です。」

私はこう反論した。

「40年間、国はセミパラチンスク州で核実験を行い、住民は大量の放射線を受け、今も受け続けています。しかし国は一度も被災した人々に支援を差し出していません。貴方は我々の申し出を拒絶できないのですよ。」

私は、礼儀正しく、しかし毅然と話した。そしてこれが明らかにタリージンの決意を揺るがせた。

態度を軟化させた彼はセミパラチンスク総合病院の建設に合意した。共和国の国家計画局も直ぐにこの案を支持してくれた。今や問題は、誰が建設にあたるか、どれだけ速く設計と建設を始められるかということだった。州だけの力ではこの大規模な計画を実施することはできないであろうことは明白だった。

新しい総合病院の建設計画は、地域全体のニーズを第一に考慮しつつ進められ、我々は直ちにその法的地位を規定した。それは、多くの専門分野を持ち、最新の医療水準に対応したものでなければならない。ふさわしい設計を探求しつづけ、ついにベラルーシ共和国の首都ミンスクに同様の総合病院が建設されていることを突き止めた。直ちにミンスクヘエレメンコ州執行委議長、トフターロフ州保健部長らを派遣した。

ミンスクにある総合病院は、国内で最新のものであった。それを我々はいわゆるベースとして採用し、設計研究所「セミパラチンスク州設計」(N.クリーモフ所長)に提示した。設計は根本的に見直され、改良され、最終的にはミンスクより大幅に良くなった。

核実験場がフル稼働していた年月、軍当局は地域の不安を脇においやっていた。今やついにその負債を支払う時が来た。しかしどんなにこう言っても、その言葉はむなしく宙に浮くにすぎなかった。地域の利益のために我々は別の道を歩むことを決めた。軍産共同体との対立から、友好関係への転換である。彼らに支援を頼みながらも、核実験場閉鎖という我々の姿勢は当然堅持した。

私はコロワノフ原子力産業相に二度手紙を出し、総合病院の建設を提案し、二度とも拒否された。引き下がるつもりはなかった。適切な時を待ち、同大臣がセミパラチンスクにペロウソフ委員会のメンバーとして来た時にも、新たにこの問題を持ち出した。この時は、コロワノフ氏は同意し、省内のステプノゴルスク建設管理部(訳注:ステプノゴルスクウラン濃縮・生物化学兵器工場などがあったカザフスタンの閉鎖都市)に建設を指示した。

こうしてセミパラチンスクの西の外れ、広大な空き地と松林との接点付近に総合病

院の建設が始められた。

総合病院にはベッド数 1,080 の入院病棟、1シフトあたり 1,000 人の受付が可能な外来診療部が設けられる。予算額は約 1 億ルーブル。ベッド数各 60 の 18 の有料診療部門、ベッド数各 15 の麻酔科と集中治療室、9 つの診療科、それらをサポートする事務などの部局で構成される。入院病棟の年間収容可能人数は 22,000 ~ 25,000 人である。

入院病棟の構成は、内科 480 床、外科 240 床、婦人科 60 床、神経科 120 床、眼科 120 床、耳鼻咽喉科 60 床となっている。内科の入院病棟は、心臓科、肺臓科、神経科、内分泌科、消化器科、治療科で構成されている。外科の入院病棟は、胸腔科（肺、食道、縦隔内の器官の疾病の外科治療）、血管外科（大動脈弁置換も可能）、そして、神経外科、肝臓、胆道と胃などの手術の一般外科部である。

神経科のベッドには、一般的な中枢及び末梢神経系疾病の治療のための部門の他に、神経症の患者を治療し心理療法を行う心療内科が開設される計画である。

耳鼻咽喉科部では、人工内耳に至るまでの耳、喉、鼻のあらゆる手術が可能である。

この病院で重要な位置にあるのが、外科診療部門である。消化器、呼吸器の内視鏡検査を行う診断センター、及びあらゆる種類のレントゲン検査を行うレントゲン部の設置が計画されている。循環器系、呼吸器系、末梢血管の疾病の診断を行う機能診断部の設置も計画されている。

造影と超音波脳造影用の専用室が設けられた高次神経科も開設される。また、あらゆる器官と系統の疾病を診断する超音波検査科も設けられよう。

住民の健康増進においては、リハビリテーション科も大きな役割を演じよう。ここでは以下のような想定されている。低電流及び高電流の電気療法、光療法、水療法（酸素浴、炭素浴を含む）、様々な精神療法、泥療法、空気療法、鉱泉療法、レーザー療法、鍼および用手療法、機械療法、心理療法、薬用植物療法、電気睡眠、マッサージ、治療体操。その他に総合病院には、電算センター、録音センター、ラジオ放送部、映画・テレビスタジオが併設される。

総合病院をベースに異なる専門分野を医療センターが複数おかれ、ほぼ統合されたひとつの機関として機能する。それは医科大学の専門講座と研究科、そして病院の専門科により構成される。

これらの統合された複数のセンターにより、高度に専門的な医療の提供、組織的な

治療法指示、人材育成が可能となる。また、専門性の高い研究を行い、これら研究の結果を医療現場で実践することも容易に可能である。

核実験の影響で低線量被ばくを受けた州の住民にとって特に重要であるが、これらのセンターにおいてはニーズに対応したテーマの応用研究の割合が急激に高まっている。

総合病院は医科大学の教育基盤を兼ねることになる。その敷地内には教室も配置される予定である。

教師と学生に対しては、学科長室、助教授室、アシスタント室、図書館、12～15人用の教室12室、72人収容の講義室が2室、195人収容の講堂、4つの実験室、博物館、コンピュータールーム、学食、クロークが提供される。

総合病院は入院患者とスタッフにとって快適な条件の創出を目指している。全ての入院病棟は、30ベッド毎のセクションに分かれている。トイレ付シャワールームは基本的に1～2ベッドにひとつの割合で配置される。セクション毎に浴室、化粧室、医療スタッフ用トイレがある。患者のための図書室、薬局、理容店および映画鑑賞ホールも設置されている。

この総合病院が社会の最高の財産である健康の強化に貢献してくれることを確信している。

(完)